
バイオハザード・アウトブレイク 『ファイルK』

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード・アウトブレイク『ファイルK』

【Nコード】

N5124D

【作者名】

馬路キレ子

【あらすじ】

平和な日常を打ち破る悲劇、目を背けたくなる非情の現実。誰が？何故？街は死で蔓延し、死の虜となった者が、生きている者へ執拗に襲いかかる。悪夢の時間、その時計の針は動き始めた。

序章（前書き）

二年前ほど前にブログで書き上げた、ゲーム
バイオハザードアウトブレイクの影響を受けたエフィ的な小説です。
ブログ用には書き上げているため、所々おかしい部分があり、
少々過激なシーンやグロテスクなシーンがあります。
耐性の無い方は、ご注意ください。

序章

西暦2008年日本、秋。

依然不況に煽られ、不安の続く国家経済。

それは県や府、市や街も例外ではなく県財政を圧迫し

一地方団体として成り立たなくなった、街や市が統廃合化が急速になされていた。

都市は名前を変え煌びやかに栄え、街や村は名前を変え衰退していく。

豊かに暮らす人々、貧しく生きる人々。

それぞれが様々な日常を毎日生き続けている。

そんな何処にでもいる人間が存在する、この都市で

誰も予想することの出来ない悪夢は始まってしまっただった。

事件七日前K県Y市PM4時21分

都市部からは少し離れた場所で、チャイナタウンと呼ばれるアジア料理店などが軒を連ねている街。

名所をめぐる為に来た観光客や美味しい料理を求めするため料理店の前に行列を作る人、ショッピングモールに買い物しに来たのだろうか？大きな買い物袋とセカンドバックを抱えたまま走る熟年の女性。

賑わいを見せるその街で一際大きなトランクを運ぶ男性。
カツカツと小気味いい音をたてながら鳴る革靴の音は
観光客の話し声にかき消されてしまう。

男は、黒い帽子を深く被り、サングラスをつけた、トランクに似合
わない

ほどの高長身に黒いスーツを着て歩いている。

溢れかえる人間を掻き分け

チャイナタウンの出口である大きな門にたどり着いた。

男は辺りを見回す。どうやら誰かと待ち合わせのようだ。

少しすると次第に男はイラつきだし、腕時計に逐一目をやったり、
しきりに携帯電話を気にだし始めた。

そこへ美しいブロンドを棚引かせて全身に赤いスーツを着た女性が
現れる。

胸の辺りにはバッチが付いている。この街ではそんなに
珍しくもない、どうやら外国人のようだ。

「He doesn't come even if you w
ait so much (そんなに待っていても彼は来ないわよ)」
ブロンドの女が英語で男性に語りかける。

「Are you those who undertake i
t? (オマエが引き取り人か?)」

男は携帯電話を閉じ、ポケットにしまう。

そして指を女の方へ挿しながら彼女の胸のバッジに目をやる。

何かに気づく男。

その瞬間、信じられないといった表情を浮かべながら
男はスーツの内側の胸ポケットに手をやる。

「Fuck you!! (くそっ!)」

男はポケットから拳銃を出し女に向かっていきなり発砲した!

女は瞬間的に身を翻し、銃弾を避けた!

だが、どうやら後ろを歩いていたカップルの旅行者に避けた弾が当たったらしい

血を流して倒れる男性と、それを見ていきなり悲鳴を上げる女性。

駆け寄ってくる人々。

銃声は旅行者の会話を一瞬にして止め、行き交う人々の顔を引きつらせた。

どよめきの中、黒いスーツの男は人が集まり始めたのを見ると即座に門をくぐり、

門の外に停めてあった、自分の黒塗りの外国車に飛び乗った。

ブロンドの女はそれを見ると、即座に走り出したが
人ごみの中に捉われてなかなか移動できない!

「Please retreat! (どいてちょうだい!)」

という彼女の台詞も悲鳴とどよめきによってかき消されていた。

大きなトランクを助手席に置き、ポケットから出したキーを回し、
アクセルを思いっきり踏む男。

爆音をあげ車は猛スピードで走りだした。

うなる爆音を尻目にやっと人ゴミから抜けだせたブロンドの女性は自分の車に向かいながら携帯を取り出し、即座に電話をかけた。サイドドアをあけると勢いよく車内へ飛び込み、エンジンをかける女性

目の前を走るスーツの男の車を目視で確認しアクセルを踏み出す！

そこへ、電話が繋がったらしい彼女が電話口で大声を上げる

「The criminal ran away! Run after!（犯人が逃げたわ！追いかけて！）」

日本の公道に似合わない赤いスポーツカーが爆音を上げて車道を走る。

公道を恐ろしい爆音を出しながら進む車二台。

車の追い抜きはもちろん、信号など無視して進んでいる。

男の車は、途中軽自動車との接触したのだからか車後部のバンパーが外れている。

5分ほどのカーチェイスが続き、男は公道からのびる妙な坂道の道路を

発見する。

高速道路だ。

料金所を破壊し、坂道を登っていく黒い外国車。

それを見て、赤い車の女は少し笑みを浮かべ黒い車と同じく料金所を突破する。

片腕でハンドルを操作しながら、助手席においてあった日本製パトランプを車の上部に設置し光らせる。

そしてまた電話をかける女。携帯電話の音声をフリーにして、普通に喋れるように充電器のような場所に携帯を置き、両手でハンドルを握る。

電話が繋がり大声で何かやりとりしたようだ。その間もアクセルは踏みっぱなしだ。

一時間ほど追跡を繰り返しただろうか

辺りはさっきまでとは違い若干暗くなり、女の車は男の車より少し離れたところを

走って追跡しているようだ。

電光掲示板には【S県S市入口まで後200m】とある

「…slowness…(そろそろね)」

女の笑みが今度はハッキリとわかる。

前に行く男の車の前には大型装甲車両によってバリケードが築かれていたのだ。

「What That?… Fuck ing off!」
男は周りに目をやり、出口が存在するかどうか回りを見る。
非常時に公道に下りるために作られた脱出道路のようなものが対向車線に見える。

男は、ハンドルを大きく動かし、タイヤの向きを変えた
一気にUターンする車。

男は一か八か高速道路から公道へアクセルを全快にする！
煙を上げて悲鳴をあげるタイヤをよそに女の車に突っ込む！

「What?!」

予想もしてなかった男の行動に思わず怯みブレーキを踏み
ハンドルを右に切った。一気にスピンする車。

それをよそに男の車は脱出道路を進んでいく…。

完全に見失ったようだ。車の中でがつくりと肩を落とす女性。

「To the town that . . the night m
are it if it is distributed . .

(あれが街にばら撒かれたら、とんだ悪夢になるわ…)」

女はそう言い残し、どこかに携帯電話をかけた…。

事件六日前AM6時56分K県Y米軍基地

「S県S市郊外で事故が発生しました。中に乗っていた外国人男性

は死亡

男性の所持品から拳銃など出てくるところから犯人はマフィアの
員では

ないかと警察は発表しています。なお所持品のトランクが空いており
中身が空だったことから、麻薬か大麻の取引による暴力団同士の抗
争では

ないかと警察では捜査が続いている模様です。では次のニュースを

…」

テレビの日本人アウンサーがいつものトーンでいつもの何気ない
ニュースを

淡々と言い放ってゆく。まるでBGMでも聞くかのように聞き流す
職員をよそに

あのブロンドの女性は一人、顔を真っ青にしていた。

「…the start of the nightmare .

・ (悪夢は始まってしまったわ) 「

序章（後書き）

筆者のブログ

6
4
2
1
3
<http://blog.goo.ne.jp/kireko15>

シナリオ【異変】 - 1 (前書き)

この小説は過激な描写や、グロテスクな表現を含んでいます。
耐性のない方は注意願います。

シナリオ【異変】 - 1

事件三日前PM9時49分S県S市

住宅地から都市部へと続く長い道路。

辺りの暗さにまばらに走る車やバイクのライトが夜道を照らす。道中あるコンビニエンスストアや有料駐車場の電気が煌々と光る中スーツと灰色の車体を街頭に光らす自転車が通る。

今日は少々風が吹いており、道路の横に植えてある木々の枝がかすかに揺れている。

夏の時はうだる熱風に過ぎない風も、打って変わって涼しいほどになった。今年は猛暑で、しかも夏が長かったせいかいつもより秋を新鮮に感じれる。

灰色の自転車に乗る青年。名前を瀬敏健^{セミンケンジ}二二歳。

職業はプログラマー。今仕事も終わり、仕事場から自宅へ戻るようだ。

新品の自転車は彼の自慢であり、毎日整備を欠かさない。

新品の自転車をズンズン進ませ、何か良い事でもあったのだろうか鼻歌まじりに自転車のサドルから腰を浮かせ立ち、ペダルを思いっきり

踏み始める。今日は仕事の締め日だったのだ。

立った時、健二の持っているジープンのポケットから妙に違和感を感じる。携帯のバイブレーションだ。

たいがい仕事場から帰る際に携帯をマナーモードから

着信音をONにする健二は、どうやら設定するのを忘れてしまったようだ。

携帯電話の着信を確認すると液晶部分の名前を見る

『ナルミトモヒロ
鳴神智弘』

彼の高校時代の友人だ。

ビックリしたように電話に出ると高校時代と変わらない明るい声で智弘は話しかけてきた。

「いよーう健二。久々〜元気してる?」

「ああ元気だけど、今頃どうした」

古い友人にあった気分。少々の喜びをかみ締めつつ自然体で対応する健二。

13

「昔の仲間が集まって馬鹿騒ぎしたらしいんだが」

「へえ・・・いつやんの?」

「今週の金曜日の夜6時集合かな。三日後ね」

「場所は?」

「最近流行ってる居酒屋『虚無僧』ってとこなんだけど知ってる?」

「ああ、それなら知ってる。最近雑誌に取り上げられて有名な」

「そこでやるうと思ってるんだけどね」

「ふーん。で、メンツは?」

「アポとれたのは岩田と茂子とマルさんかな」

「懐かしいメンツばかりだな、わかった行くよ」

「良かった。で、そっちのツテで綾香も連れてきてよ」

「あいよ。あ、ちなみにたぶん彼女も金曜日は休みっぽいから大丈夫だぜ」

その後、自転車を脇に止めて、高校時代の懐かしい話を長々とする健二。

よほど仲の良い友人なのか、話もほとんどん拍子で進んでゆく。10分ほど話した後、これではキリがないので当日と電話を切ってパタンと携帯を折りたたみ、またジープンのポケットに入れる。

「今週の金曜の夜か。楽しみだなあ・・・」

健二は止めてあった自分の新品の灰色の自転車に乗った。

この先の道路は傾斜が少しきつくなっている。

また鼻歌まじりに立ちこぎし始めた。

さつきより速度を上げたようだ・・・。

事件二日前T都S区テレビスタジオPM1時30分

「…これは首塚の霊が自分の首を切り落とした人を探しているんでしょうね」

「え？見えませんか写真中央の・・・」

さつきまで明るく、スポットライトが当たっていたスタジオの照明が暗くなり

後ろの巨大液晶テレビには如何わしい写真の拡大が映されている。

その巨大液晶テレビの下にはキャスター席に座る一人の女性。

女性が口走った台詞と共に写真がどんどん拡大されていく。

その『何か』にハッと気づく観衆、気づきだしたとたんどよめきやザワメキを含んだギャラリーの声がスタジオ中に聞こえる。

「はいカットーッ！みんなおつかれさーん！」

元気一杯のADの声がスタジオに響きわたる。

ギャラリー達の顔は安堵の表情に変わり、中央の女性も明るく笑みを浮かべる。

そんなところへディレクターらしき男が近づいてくる

「河野さん〜今回も良い語りと表情してましたね〜ゾクゾクしちゃいましたよ

まるでそこに本物の霊が居るみたいでしたよ〜」

髪を軽くかきあげ、満面の笑みでこういう女性。

「ありがとうございます。でも本当に霊ってのはこの世にいるのよ

その言葉を聞くと、ディレクターは少し焦ったようなそぶりを見せて「またまた〜そんなことあるわけないじゃないですか・・・」

「でも、居るのよね。あなたの後ろに。カタナを持った首無し侍が・・・」

「へっ？そ、そんなことあるわけないじゃないですか」

「最近、首に痛みを感じない？もしかしたらただけど霊に取り付か
てるかもよ」

「ま、まあまあ。そういう話は今度の打ち上げで話しましょうよ」
不安にかられたディレクターが首の辺りを確認し、ドキツとする。
その時、ADがすかさず止めにはいる。

フツと笑みを浮かべるとその場をツカツカと立ち去る女性。

この女性の名前は河野貴美子。^{【ウノキミコ】}26歳。

心霊マニアがたたって、業界入りし、斬新な語りと
そのエキゾチックな顔立ちからくる表情で

最近めきめきと頭角を現してきた新進気鋭の女性タレント。

テレビ局の用意した楽屋に入るとマネージャーらしき男がいる。

「お疲れ様です貴美子さん。次はK県でプロモーションビデオ撮影
です」

「まったくやになるわ。最近お仕事続きでお休みもないじゃない？」

スケジュール張を黒い鞆から取り出しながら貴美子の仕事のスケジ
ュールを

確認するマネージャー。ワガママな貴美子のマネージャーは気苦労
が絶えない。

「今週の金曜日までは我慢ですよ。金曜日の午後から土曜日までは
フリーですから」

「ふーん。あ、そうだ。最近美味しいお酒飲んでないんだけど。何

処が美味しい店知ってる？」

またか。と言いたそうな顔でスケジュール張を鞆にしまっマネージャー。

「ちゃんと顔隠して行ってくださいよ、この前S区の居酒屋に行つて河野貴美子つてばれて大変だったじゃないですか」

「はい。わかってますよ。ちゃんと変装していきまーす」

「やれやれ・・・わかってるんだか心配だ・・・」

またやらかすんだろうなと思いつながら渋々次の場所へ移動する支度をするマネージャー。

だがそこで貴美子が思い出したようにこう言う

「で、美味しい店どこ知ってる？」

ちよつと悩んだが、味に五月蠅い貴美子に変な店を紹介すると怒られるので

少し間をおいて話し出すマネージャー。

「そうですね・・・あ、そうだ最近雑誌やテレビに取り上げられてる、ちよつと独特な雰囲気居酒屋が、S市にありますよ」

「S市かあ・・・遠いなあ。車で送ってくんない？」

「はいはい、わかりましたよ・・・じゃあ次の仕事場行きますよ」

楽屋から荷物を持ち、移動するために車が止めてある
地下駐車場へ向かう貴美子とマネージャーであった。

事件二日前PM4時19分S県S市内パチンコ屋【Bフィーバー】

「いらっしやいませーいらっしやいませージャンジャンバリバリ、ジャンジャンバリバリ！ジャンジャンバリバリ！出します出せませす出させませす！はりきっていきましょー！」

常時流れる電子音、銀玉がクギにぶつかり合う音、銀玉が大量に入ったドル箱を

積み上げる音、ドル箱が空になり客が台を叩く音、当たりを出した歓喜の声、

店内にかかっている店員のマイク音、ありとあらゆる音がこの場所を支配していた。

タバコの煙が充満し、定期的に空気清浄機がそれを換気していく。

「先輩交代の時間です」

奥の業務員専用ドアから一人の男が出てきて、出玉交換所のカウンター越しから先輩と呼ばれた男に向かって交代時間が来たことを告げる。

「ああ、そうか悪い。じゃあ頑張れよ」

先輩と呼ばれた男は席を立ち、業務員用ドアに入ってゆく。

けだるそうにカウンターで携帯をいじり始める男。

ネームプレートが見える。

この男の名前は寺丹飛鳥^{テラジアスカ}。22歳。

パチンコ屋に勤務して半年。会話は得意だが仕事意欲があまりなく勤務態度も悪いので、オーナーから目をつけられている。

「あーあ。世の中つまんねえことばっかだな」

携帯のメールを打ちながら店内を見回す飛鳥。

「まったくどつかに楽しいこと落ちてねえかなあ」

そう言いながらカウンターの引き出しをゴソゴソと漁り始める

「へへっこりやいいぜ、幸先コウチヨ」

タバコがあったようだ。見回る店員も少ないし

客はパチンコに夢中なので、気にせずタバコの箱を取り

自前のライターに火をともし、タバコをつけてスパスパとすい始める。

「・・・さーてこれでオサツの一枚でもありやめっけもんだけど・・・

」
タバコを片手に持ち、また引き出しをゴソゴソ漁っているようだ。

「おっこりやあいね、居酒屋の割引券じゃん」

引き出しの奥にあった割引券を手に取り、じつくりと眺める飛鳥。

まだ誰も気づいてないみたいだ。

「なにになに...？居酒屋【虚無僧】・・・かあ。イカス名前じゃん。

そっぴやこれ雑誌で取り上げられてたな。今度の休みにいってみっ

かなあ」

ブツブツと独り言で盛り上がりながら、またタバコを啜え一服して
いると

客席の奥からドル箱を5、6個抱えた客がこちらへ向かってくる。

「はいはい、集計ね〜入れますよー」

彼の仕事は、まだ始まったばかりだ。

事件二日前PM6時00分S県S市S駅前交番前

駅前には丁度仕事の終わったサラリーマンやOLでこった返していた。ここは特に人の集まる地域。これから大人の時間だろうか、喜び勇む声や

客引きする店員の呼び声が聞こえる。

そんな駅前にポツンと光る小さな交番。

そこには、座って記録を書いている警官と少し小太りの警官と瘦せ型の警官がいた。

中から大きな声が聞こえる。

「今日からこの派出所で頑張ってもらおう正義君だ。」

小太りの男が警察帽をかぶりながら手招きで記録を書いている男に瘦せ型の男を紹介する。

「本日付けで本派出所に配属されました正義五郎であります…どうぞよろしくお願いたします」

敬礼と共に挨拶する若い瘦せ型の刑事。

名前を正義五郎^{マサキゴロウ}。19歳。

去年第二公務員試験合格。警務試験に受かり、本日付でこの交番に配属された。

「よろしく頼むよ…ゴホッ」

「風邪か？巡査」

軽く咳き込む巡査と言われた男。

どうやら原因があるようだ。ゆっくりと口をあけ話し始める。

「ええ、昨日パトロール中に挙動不審な男を見かけまして、職務質問しよう」と

声をかけたら、いきなり走り出すもんなんで追跡したんですが、見失ってしまいました。それで少し汗をかいて体を冷やしてしまっ
て…「コホッ」

今まで記録を書いていた巡査と呼ばれた男の息が
すこしあがっている。喋るのが若干、辛いようだ。

「そうか。まあ明日君は非番だ。ゆっくり休むといい」

「コホツケホツ…ええ、そうします」

そんな二人を尻目に敬礼を解かず待つ五郎。

「…」

「ああ、すまんすまん。ここでは堅苦しいことは言つつもりは無い
姿勢直せ」

小太りの男が敬礼したままの五郎へ、そう言つと

「…はい」

緊張の糸が切れたようにデスクの椅子に座り込む五郎。

「とにかく。今日から頑張ってくれたまえ、わからないことがあつ
たら私か、そこにいる巡査に話してくれ」

「…はい」

小太りの男の話の聞きながらデスクの周りに自分の荷物を置いてゆ
く…。

ゴホッ！ゲホッ！

巡査の咳はひどくなる一方だ…。

事件前日AM9時10分S県S市高層ビル8Fオフィス

「はあはあ、遅れました！」

勢いよく『企画部』の部屋に入るスーツ姿の男。

「おい、何分遅刻したかわかるか」

企画部部长と書かれた席に座る一人の女性が涼しい顔で言う。

「はっ、10分ではありますが・・・」

焦りを隠せないスーツの男が鞆をデスクの上に置く。
手は震えている。

「そうか、じゃああと5分以内に部署転属願いを出せ」

「へっ?!」

「転属希望は聞いてやる。後4分45秒だ」

「どっぴいことですか、美和部長！」

この涼しい顔の女性。名前は美和恵。ミワメケ25歳。

この若さで最優良企業の企画部長として出世する裏には
厳しい努力や、画一的な発想をしたからに違いない。

声を少し荒げたようだが、恵は表情を崩さず部下に言い放つ

「キサマの質問は聞いていない。書くのか書かないのか？」

「ちよつと待つてください課長、そんな高々遅刻で・・・」

「おい、キサマ今『高々遅刻』と言ったな。その遅刻のおかげで
作業能率はいくつ下がる。会社の利益はどの程度あがる？」

お前と同じかそれ以上の社員など、ここには掃いて捨てるほど居る。いいな。企画部のルールは私だ。わかったな。あと二分だ」

淡々と語る恵に何も言い返せない部下。

後ろのデスクからヒソヒソ声が届く。

「どうやら企画部に長年いる社員達のようにだ。」

(・・・また閣下がうるさいこと言ってるな)

(ああ、こりやまたもめるぞ。あの新人、使えると思ったんだがな)

(しかし閣下もひどいな、今朝の人身事故見ててああいうこというんだぜ)

(実力があるからな・・・閣下は。自分がルールなんてよくいうよ)

「そのデスク二人。手が止まっているようだが。オマエたちも転属するか？」

凍るような視線をデスクで陰口を言う二人に浴びせ言い放つ恵。

「いえ、滅相も無い！」

あたふたと自分の仕事に専念する部下二人。

キーボードを叩く音が仕事場にこだまする。

「まったく、使えん部下どもだ・・・」

恵はそういうとデスクを立ち、別の部署との会議をするため歩き出した。

企画部室には、ただただキーボードを撃つ音だけが聞こえた。

シナリオ【異変】 - 2 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【異変】 - 2

事件前日PM5時13分S県S市療養所

ビル郡の聳え立つ都市に、ネオンの光りが光り始める。
夜が来るようだ。

夏とは違いめつきり日が沈む速度も速くなり、日が当たらなくなって冷たくなったコンクリートは、誰に言われるまでも無く夏から秋の到来を予測させた。

ここは都市部より少し離れた住宅地にある小さな療養所。
白衣の男が表の門の前に立っている。

男は門にかかっている表札をくるりと回転させる。

『診療終了』の文字が見える。どうやら今日の診療はここまでのようだ。

「やれやれ、今日はやけに患者が多かったな・・・」

肩を手でポンポン叩きつつ『疲れた』と言いたげな表情で男は門の中へ入り、門に鍵をかけ、療養所の中へ入ってゆく。

この白衣の男の名前は尾山紫。オヤマムラサキ 45歳。

父親の小さな療養所を継いでもう何年にもなる開業医。

傲慢で高慢ちきな男で、金儲けが三度の飯より好きである。

父親が現役のころには、この療養所には毎日患者でこった返していたが

紫の代になると、診療所の医療費の値上げや、患者へのケアが足りないなど

問題点があり。すっかり療養所も寂れてしまったようだ。

だが、ここから都会の病院までは少し距離があるので仕方なく通う人も多いようだ。

玄関のドアを閉めると『院長室』と書かれた部屋に入る紫。

壁際にある蛍光灯のスイッチをつける。

今まで暗かった室内は明るくなり、蛍光灯に照らされて黒塗りのデスクが鈍く光る。デスクの上にはボールペンや食いかけのスナック菓子、患者のカルテであろうモノが散乱しあまり整理整頓は得意でないようだ。

ドカッと座り心地の良さそうなソファアに座り、デスクにあったりモコンで

テレビをつける紫。

「……のようで……で……早急な対応が……」

いつものようにBGM代わりに、お決まりのニュース番組を見る
淡々と語るキャスターの言葉は、いつもと同じテンポ、同じ調子である。

黒いデスクから食べかけのスナック菓子の袋を取り、
資料が入っている棚を開ける。資料の本立てになっていた黒い瓶を取
取る。

瓶のラベルが微かに蛍光灯に映し出される。

どうやら有名な酒造会社のワインのようだ。

少し横倒しになった資料など目もくれず、

そのまま瓶を取りソファアに深く座り込みコルクの栓を開ける紫。

グラスにはやや黄色がかった透明な液体が注がれた。

紫はグラスを傾け一口グイッ飲むと、間髪入れずにスナック菓子を口に放り込む。

さつきからBGM代わりに聞いているテレビではキャスターが次のニュースを読むために、目の前のニュース用紙に目をやっている。

「明日の天気の間になりました。S県全体は日中までは曇りですが午後からは晴れるようです。前線の関係で今夜から降り出す雨は明日までにはあがりませんが、北からくる強い寒波により、今夜は今年一番の冷え込みになるようです。寝るときは厚着をして風邪には十分気をつけてください」

スナック菓子を頬張り、サクサクと小気味いい音をたてながら何気なく傍にあった新聞のテレビ欄に目をやる紫。

「チッ、ろくな番組やってないな」

軽く舌打ちしつつ、新聞をぱらぱらめくる紫。

「S市で異常な人身事故続くねえ・・・」

興味の無い記事をぱらぱら単語だけ拾って読んでゆく。白衣には、こぼれたスナック菓子の破片が付いている。

「そうだ、そろそろ六時か」

ふと何か思ったのかイキナリ立ち上がり散らかっているデスクの奥にある電話を取り出す。この時代には珍しいアナログな黒電話だ。

デスクの引き出しからメモを取り出し、

そこに書いてある番号を電話に打ち込んでいく。
電話をかける間も受話器の線を肩にかけ
ワインを飲み、スナック菓子をほっばる。

ブツッ。

どうやら繋がったらしい、散らかったカルテを時々手に取り見ながら
電話口で応答している。

「じゃあ薬の引き取りは明日の午後9時だな？くれぐれも遅れるな
よ」

ガタンツチーンツ

勢い良く受話器を置くと、デスクの引き出しから白い紙包みに入った
プラスチックの箱を確認する紫。

「町医者に作らす薬じゃないと思うが・・・金になるからいいか」

そのままソファーにまた座りかけ、テレビのリモコンを持ち、
スナック菓子を頬張る紫。

外には、いつの間にか雨が降っている。

窓に若干の結露が見える、寒くなってきたらしい・・・。

事件当日PM5時32分S市S駅前

会社から電車に乗って帰る人たちがまばらに出始め、道には

たくさんの車と週末の夜を楽しむために集まった若者やOLが
ごった返している。

雑踏の中、灰色の自転車が人の中を掻き分け疾走する。
ぶつかりそうになりながらも、なんとかバランスを保ち走り続ける
自転車。

相当危なげな走行をしつつ、鼻歌まじりにかっ飛ばす人影・・・
それは健二だった。

「このままだったら一番乗りできるんじゃない？」

携帯のデジタル時計を見てニンマリと笑みを浮かべる。

鳴神が言った集合時間は6時だ。まだ30分弱ほど時間に余裕があ
る。

集合場所に着きそうになると急に携帯の着信がかかってくる。
少し古い歌謡曲のインストウロメンタルが辺りに響く。

「おっ、この音は綾香か」

着信メロディごとに着信相手を分けているのは珍しくない。
相手がわかるとすかさず通話ボタンを押す健二。

「もしもし？健二？早めに集合場所着いちゃって暇してるんだけど
今何処？」

電話口で若い女性の声が聞こえる。

綾香と呼ばれた女性は本名、ユメノアヤカ夢乃綾香

健二と同じ高校に通い、今日集まる鳴神たちの友人でもある。

高校卒業後はウエイトレスとしてバイトする至って健全な女性であ
る。

ちなみに健二の現彼女でもある。

「あー俺もそろそろつくから。そこでちょっと待ってよ・・・
プツ。ってか姿見えたわ」

自転車の速度を少し落とし、姿を確認できたことから片手をハンドルから離し

思いっきり手を振る。若干その情景にお互い噴出しそうになるが、
周りの人間もいるためそこは我慢した。

自転車を止め、携帯電話をポケットにしまい綾香の近くに寄る健二。

「いやー久々。ってかチョットばかり早すぎじゃね？」

「バイトが早く終わっちゃってね、用事も無いから早めに来ちゃっ
たんだけど

まあ健二も早く来たし結果オーライってことで良いんじゃないの？」

「ちげえーねえ」

二人とも屈託のない笑顔で会話を続ける。

雑踏の音が二人を包む中、自然体で続く話は途切れることは無い。

10分ほどたっただろうか、二人が話してる柱の陰からヒョッコリ
小柄の男が二人の前に飛び出してきた。

「いよーう、この寒いにお暑いねお二人さん」

今回の発案者で幹事でもある智弘だ。

軽いジョークと共に高校時代と変わらない、そのヒョウキンなキャラクターは

変わっていない。

「遅刻常習犯の智弘が珍しいじゃん」

「おひさー元気してた？」

健二や綾香の弾む声が聞こえる。2、3会話を繰り返すうちに少し会ってなかったただけなのだが、なんとも言えない懐かしさで一杯になる三人。

時間を忘れて話していると懐かしい高校時代のメンツがどんどん集まってきた。

うどん好きの岩田武イワタケシに

話好きの相模原茂子サガミハラシゲコに

大人で常識人の丸山空さんマルヤマソウラ。

みんな懐かしいメンツだ。変わってない。

全員が集まると智弘が声を少し張り上げてこう言う

「さあ、懐かしい話も積もる話も【虚無僧】で一杯やりながら話そう！」

合意して足取りも軽く動きだす団体。

向かうは今S市で人気の居酒屋【虚無僧】。

同日PM6時00分駅前交番

一人の警官がパトロールを終えて派出所に戻ってくる。

交番の自転車を手前に止め、鍵を閉める警官。

左胸のプレートには、テカテカ光る正義五郎という字が見える。

「・・・パトロール終わりました」

「おお、そうか。では報告書の続きを頼むぞ」

小太りの警官が五郎に帳簿を渡す

「はい・・・」

無愛想に受け取り、自分のデスクに座り込みペンを持つ五郎。

ズササ・・・ドン！

隣のデスクで大きな音がした。

先日風邪を引いていた巡査がデスクに体をつ伏している。

「大丈夫か?!巡査!」

「は、はあ。大丈夫で、すよ。昨日から・・・熱がさがら・・・なくて」

心配して体をゆらす小太りの警官。

どうやら巡査は休み中に咳は直ったが、発熱の症状が出ていたようだ。

無理して派出所まで来たわいいが、朦朧としていたらしい。

「奥の休憩室に運ぶぞ、手を貸せ五郎!」

「・・・はい」

巡査の足を持って奥の休憩室に運ぶ五郎。

巡査は凄い熱のようだ・・・。

同日PM6時02分居酒屋虚無僧

居酒屋虚無僧の店内は独特で洋式のホールと和風の座敷が壁を挟んで

渾然一体としている。

壁や天井には若者には分からない昭和の映画ポスターが貼ってある。店長の趣味だろうか……。

奥の座敷から女性の声がする……。

ノート型パソコンを机に置き、対面に座っている茶色のスーツを着た初老の男性と会話する女性。

少しあきらめたという笑いの入った表情で初老の男性が口を開く。

「美和恵さんといったかね？あなたには負けたよ。」

この企画、うちでやらせてもらおうよ。」

「ありがとうございます。では早急に正式な企画書を作りますので、少々ココで、お待ちください。」

恵は喜びの表情など一切見せず、いつもの顔で淡々と語る。

「企画書は明日……部下に届けさせてくれい。」

「わかりました。では後日おくらせていただきます。」

初老の男性が立ち上がると、自らフスマを開け靴を履いてその場から立ち去る用意をする。

恵も後を追い、居酒屋を出ようとすると、いきなり初老の男性が話しかけてきた。

「あなた……その性格だと部下に相当嫌われてないかい？」

「はい。たぶん嫌われていますね。」

「たまには、酒の席で部下の話聞いてやってもいいんじゃないかい？まあココはワシの顔の利く店だな。ゆっくりしていきなさい」

「まあ考えておきます」

恵にしては珍しくあやふやな受け答えだったが、初老の男性は納得したように居酒屋虚無僧を出て行った。

「ふう・・・たまには部下と飲んでみるか・・・」
手元の携帯の電話帳を開く恵であった。

同日PM6時15分S駅周辺道路

S駅の高架下から青い乗用車が出てくる。

中に乗っているのは貴美子とそのマネージャーだ。

夜のネオンに包まれる街を見ながら

車は虚無僧とデカデカとかかれた看板を見ると
手前の有料駐車場に駐車する。

「久々のお休み、嬉しいなったら、嬉しいな」

鼻歌まじりに車から降りてくる貴美子を尻目に不安を隠せないマネージャー。

「まったく、みだりに騒がないでくださいよ？またゴタゴタに巻き込まれるのは勘弁ですからね」

「はいはい」

聞いているのか聞いていないのか不安なマネージャーをよそに
貴美子はズンズン居酒屋に近づいていく

「あ、まってください！ちよっと！」

車に鍵をかけると、走り出すマネージャーであった。

同日PM6時23分居酒屋虚無僧店内

「でよー・・・そいつがよ」

すでにアルコールの回っている二人組がカウンターごしに会話して
いる。

「アスカさん、ノミスギですよ。ホドホドにしてくださいヨオ」

ずいぶん前から飲んでいる風の飛鳥と横にいるカタコトな日本語を
喋る

外国人。カウンター席とは思えないほど料理と酒が並んでいる。

「うるせーよ。バイトの分際で社員の俺様の話を黙って聞きやがれ」
飛鳥は相当酔っている様だ。アルコールとタバコをやりながら
いつまでも閉じない軽口を叩いている。

少し話を聞くフリをして料理をついばむバイトと呼ばれた男性。

「マツタク。ボクオサケ弱い知ってるクセニ。モグモグ。ウン！
こりゃウマイですネー！」

二人の会話はどことなく繋がっているようで、繋がっていない……。

カランカラン！

その時、この店独特のドアの音が鳴った

カウンターごしに、厨房で頑張っている店主らしき男が大声で……

「らっしゃーい！居酒屋虚無僧へようこそ！お客様！」

「いやあ、迷ったけどここか！居酒屋虚無僧は！」

それは健一たち一行だった。

シナリオ【異変】 - 3 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

事件当日S市居酒屋【虚無僧】店内PM6時27分

店内には、すでにもうどのくらい飲んだかわからなくなるぐらい出来上がっている人や静かに楽しく酒を交わし会話を楽しむ老夫婦何か嫌なことがあったのだろうか、一人で自棄酒を煽る男などがいる。

店の入り口正面突き当りのカウンター席の横には木製のウエスタンドアがあり

ウエスタンドアの上には仕切り板がある。

ガチャガチャと食器音が鳴り響き、ガタンといい音を立てて置かれる器の数々。

そこに出来上がった料理などを置いてゆくのだ。

仕切り板の上には日本酒のボトルや洋酒を注ぐためのグラス、ビールのジョッキ

美味そうな湯気を立てて並ぶつまみの乗った皿がトレイに乗っている。

客からの下げ皿や空のジョッキはすぐに厨房内のシンクの泡の中に放り込まれる。

ホールの店員が注文の紙を持ち、仕切り板上の壁に貼り付けていく。店員は動きを止めることなくホールと厨房を往復し、

威勢のいい声を上げながら、専用のトレイに乗ったメニューを運んでいる。

健二たちが居酒屋に入ると、賑やかなホールで手の空いた店員が

「いらつしやいませ」と満面の笑みとともに声をかけてくる。

「予約されたお客様ですか？」

少々焦ったように店内を智弘が口を開く。

「予約はしてないんですが、席はあいてますか？」

少し困ったような表情見せる店員。

さすが人気の居酒屋店だ、ホールは客で一杯で、座敷は全席予約貸切であった。

「ただいま店内大変混み合っておりますので、少々お待ちいただきますがよろしいでしょうか？」

苦笑いで智弘に話しかける店員。

「はい」

納得するように入り口付近に居た健二達に事情を説明し入り口手前に設置されている椅子に座る仲間達。

その時ホールの客が立ち上がり財布を出して何か相談している。どうやら退店するようだ。

「お勘定おねがいしますよ」

「はいありがとうございますー！」

店員の威勢のいい声と共に、ぞろぞろと男女の団体が入り口から出てゆく。

深深とお辞儀をし、体勢を戻すと健二たちの座っている席のほうを向き

「お待たせいたしましたお客様！席まで案内いたします！」
そろそろと立ち上がり話をしながら店員についてゆく健二たち。

空いた席は他の店員によってすでに片付けられており
ピカピカに光る黒塗りの机には居酒屋のライトに照らされて
趣きのある光沢を演出している。

椅子に座ると店内の充満する店員達の熱気から上着を脱ぐ健二と智弘。

「やれやれ、やっと座れたぜ」

健二が智弘を少し目線で意識して喋る。もちろんジョークだ。

「まったくね。人気の居酒屋なんだから混むなんて私でもわかるわよ。」

健二のジョークに乗る綾香。若干の嫌味くささも古い友人の彼らには日常会話と同じだ。

「ごめんごめん！あやまるから許してよ」

苦笑いで答えつつテーブルの端にあるメニューを取り出す智弘。

「まあまあ、ともかく座れたんだからいいじゃないの？」
マルさんが三人の仲裁に会話の中に入ってくる。

「で、何頼む？俺はうどんがありやいいな」

岩田がメニューをペラペラめくりながら、写真を見る。

「まったく岩田は空気読めてないわね、とりあえずメニュー独り占めするのはやめようね！」

岩田が会話の流れを切って、メニューを独占しているので注意をする茂子。彼女は元生徒会長なので仕切るのがうまい。

「はいはい、じゃあまず何飲む？俺は生ビールかな」

智弘がメニューを岩田から取りあげる。岩田は啞然といった感じだが気にしない。

「じゃあ俺もそれで」

健二が智弘に向かって手を上げながら言う。岩田と茂子も同意する。

「私は白ワインかな〜綾香はどうする？」

マルさんが、もうひとつのメニューを見ながら言う。

「うーんと…じゃあ私は赤ワインたのむー」

メニューを見てちょっと悩みつつ、目に入った赤ワインに惹かれ注文する綾香。

「さて、飲み物は皆決まったことだし。つまみは適当に頼んどきますよ」

智弘がみんなの意見をまとめつつ、息を吸い込み大声で言う

「店員さん！注文おねがいします！」

ホールから店員が駆け寄ってくる。

PM7時02分 虚無僧 奥座敷一室

ノートパソコンを部屋の隅に置き、

上座に恵、下座に恵の職場の部下が三人座っている。座敷の中は周りの騒がしさとは別次元で、正座する部下を尻目に手酌で日本酒を注ぐ恵。

部下は自分たちが何故呼ばれたのかもわからずに来ていたので恵からのお叱りがあるのかとビクビクしている。

テーブルのつまみや酒は一向に減らない。部下達の前においてあるビールのグラスも、まだひっくり返っている。

「あ、あの部長。なぜ我々を呼び出したんですか」

部下の一人が痺れをきらしたように言う。

手酌で飲んでいた恵は、いったん飲むのを止めてグラスをテーブルに置き、ゆっくりと口を開く。

「たまにはお前らと飲むのも・・・いいかと・・・思ってた」
いつも厳しい言葉を浴びせている恵にとっては
少々恥ずかしかったのだろうか、酒のせいだけでは無い顔の赤さ。

「はっ?・・・今なんと?」

部下達はそれぞれ個人個人不思議そうな表情を浮かべる。

職場では【閣下】と恐れられる恵が、こんな言葉を部下にかけるわけがないと考え、その言葉の裏に何が隠れているのかわからない

怖さが部下達の表情をいつそう曇らせる。

「まあ・・・飲め」

恵が自分の席から立ち上がり、部下に酒を勧める。

「は！？・・・は、はい頂きます！」
部下達は驚いた声を隠せず、自分たちの目の前のまだ使用していないグラスを慌ててひっくり返すのであった。

PM7時21分 虚無僧 ホール禁煙席

健二たちが飲んでいる場所のちょうど仕切り一枚挟んだ裏で飲んでいる
貴美子とマネージャー。
ものすごいペースで酒を飲んでゆく貴美子。
彼女はどうかやら酒豪らしい。

マネージャーは貴美子と同じペースで飲んでいたせいで、少し気分が悪そうだ。

「ちょっと貴美子さん頼みすぎですよ、それにお酒も飲みすぎです・
ウップ」
マネージャーがテーブルに広がる料理と空いたビールの瓶を見て言う。

「男のクセに弱いわねえ、このくらい楽勝 楽勝」
焼酎のジョッキを片手に持ち上げながら、口元に運び
ゴクゴクと喉を鳴らしながら飲む貴美子。
プハーツと息を吹きだすと、目の前にある鳥の軟骨揚げを一つまみする。

「さあー次はウォッカいってみましょうかー！」

貴美子のテンションは、ますます上がり止まることを知らない。

「明後日は仕事なんですよ、いい加減にしてくださいよ・・・」
頭を抱え、驚くマネージャァを気にすることなくとめどなく注文をする貴美子。

まったく飲む勢いは衰えないようだ。

PM 8時12分 虚無僧 カウンター席

飛鳥が一人で飲んでいる。

まだ残っている料理の数々をしかめつつらで見つめる。

生ビールのジョッキの泡が半分くらいになっている。

どうやら相方の中国人は酔って寝てしまったようだ。

暇そうにタバコを口にくわえ、オイルの少なくなったライターを何度もこすり

火をつけようとする飛鳥。一向に火はつかないようだ。

「ちっ、火にも嫌われたってのかよ。おいバイト、ライター買いに・
・

って起きる気配なしかよ。仕方ねえ、外で買って来るか」

席を立ち上がり、入り口に向かおうとする飛鳥。

「お客様、お会計を先におねがいます」

入り口付近で会計を担当していた店員が、

勝手に外に出ようとしている飛鳥に声をかける。

「なんだなんだ？俺はライター買いに行くだけだぜ？」
飛鳥は呼び止められたことに少し不快感を覚えながら
店員に説明する。

「では当店特製のライターはいかがですか？マッチもありますよ」
店員は善意で言ったのだろうが、飛鳥の不快感は増える一方だ。
怪訝そうに少し息を吸い込み、店員に向かって少し怒気を含んだ口
を開く飛鳥

「へっ、少しばかりうまい酒と料理で騙して、自家製のライターま
で売ろうってのかよ？こりゃあ、お笑いだぜ。ぼろ儲けしようつた
ってそうはいかねえよ。

俺は客だ。俺がココに金を払ってる以上、客の自由を奪う権利はね
えよ！」

そう言い放ち店の外へ向かおうとする飛鳥。

「おまちくださいお客様！」
店員がツカツカ歩いて店を出ようとする飛鳥の肩をつかみ、飛鳥を
止める。

「ちっ、しつkeer店員だな、俺はライター買いにいくって言ってん
だよ！」

店員を勢い良く振り払って外へ出た飛鳥。

だが、そこにはスーツ姿のサラリーマンらしき男が立っていた。
妙にスーツのところどころにシミが出来ていて全体的に汚れている。

「おいなんだ、ジャマだぞおっさん」

自分の前をいつまでもどかない男の隣をすり抜けて通ろうとする飛

鳥。

ドガッ！！！！

通り抜けようとした瞬間、飛鳥の顔めがけて男のコブシが飛んできた！
勢い良く吹っ飛ぶ飛鳥！

ドスン！ガラガラ！

床に思いっきり叩きつけられる飛鳥。
「い、いてえ・・・なにしゃがる！」

顔をさすりながら男のほうを向いて言い放つ飛鳥。

それを見て、会計係りの店員が飛び出してくる。

「お客様困ります！店内でのトラブルは警察呼びますよ！」

すかさず男の前に出る店員。だが男は無反応に顔をうつむいている。

「お客様さま！」

男の反応がないようなので再度大声で言う店員。

下をうつむいていた男が顔を上げた。

肌は、まるで焼死体のようにただれ堕ちていて、眼は黒い部分を失っている。

「ヒッ！」

普通の人間のそれとは違う表情に一瞬驚いた店員を見た瞬間、男は口を開き店員の肩を掴んだ。

「お、お客様・・・？」

人間とは思えない力で押さえつけられ、人とは思えない悪臭を感じながら

冷静さを保とうとしている店員に

鋭い歯をぎらつかせ、男はこう叫ぶ。

「あ・・・ウ・・・ガ・・・あ、あ、あ！」

「うわあああああああ！！！」

次の瞬間、店員がその場に倒れこみ、重力に負けるように、ぐたつとする・・・。

スーツの男の口元には店員の喉下の『あたり』が、ぷらんとぶら下がっていた。

倒れた店員の首あたりからおびただしい血飛沫がとび入り口を真っ赤に染める。

店員の『最後の叫び』は店内中に響いた。

・
・
・悪夢は始まったのだ。

シナリオ【異変】 - 4 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

PM 8時15分 虚無僧入り口

目の前に力なく倒れる店員の体から広がる赤い液体。

液体は入り口を赤く染め、ドア付近は今まで嗅いだ事の無い悪臭に包まれている。

血飛沫は会計のレジスターまで飛び、重さに耐え切れなくなった大量の血が

メニューが貼つてあるポスターから滴り落ちる。

「・・・お、おい嘘だろ？うわ・・・これ血・・・まじかよ！！」

床にへたり込んでいた飛鳥がヨタヨタと後ろに下がりながら叫ぶ目の前に広がる信じられない光景。飛鳥の顔は恐怖で引きつっている。

さっきまで少し赤い顔だった飛鳥の顔面は青ざめ

自分の側には、おびただしいほどの生暖かい店員の血飛沫が顔にも服にもべったりとついている。

ポタツ・・・ポタポタツ！

「ア”ア”・・・ア”！ア”！ア”！！」

店員の喉下を啜っていた男が人間とは思えない奇怪な声をあげる。

口に啜っていたそのモノが口を開けることによって音を立てて

黒塗りの床におちる。ライトに照らされて、より鈍い赤に

恐怖を引き立てるには申し分のない光沢が出る。

男が店内に入ってくる。入り口からの逆光であまりよく見ていなかった姿が、飛鳥の目視に入ってくる。

明らかに気を失った目。口は血で汚れ。汚れたスーツのシミから赤い液体がポツポツとおちる。肌は老人のような斑点が無数に広がり、口の周りの肉は剥がれ落ち、歯茎など内部がむき出しの状態だ。

「うわ・・・ああ！ば、ばけものだー！ーッ！」
後ろを向いたまま立ち上がり、悲鳴を上げながら勢い良く駆け出す飛鳥。

飛鳥の悲鳴に気づいた店員たちが入り口に駆け寄ってくる。

「あ、あれを・・・」

飛鳥が恐怖の表情で指を指した。
入り口のドアは開いたままで外からの冷たい風が店内に少し入ってくる。

何かが腐敗したような不快な匂い、血の匂いと共に。

「どっしましたお客様！・・・うっ！」

飛鳥の指が示す方向に目をやると店員は絶句してしまった。
それまで注文に追われ、笑顔を絶やさなかった店員が血まみれの入り口と壁の異様に目を疑う。

さっきまで一緒に仕事をこなしていた店員はおびたらしいほどの血を流し倒れ

倒れた店員の近くにいるの男は荒く辛そうなうめき声をあげながら、

口からだらしない唾液をたらすように血を流し、こちらを見つめている。

「ウ・ウウ・ア”ア”ア”！！」

男はもう一度うめき声を上げると、倒れていた店員の体に覆いかぶさるように

自らの膝をつき、血がドクドクと流れる店員の首筋に噛み付きだす。

ガリ・・・ピチャ・・・ガリ・・・カリ・・・ザシュ！！・・・カツカツ

一噛みで首の血管繊維を食いちぎり

脊髄の辺りで一瞬噛むのをやめ、エグるように皮膚のついた血まみれの内部組織を夢中で食っている。

「け、警察をよんでくれ！」

目の前の悪夢におびえながら、我に返った店員は大声で集まってきた他の従業員に、無意識に手のひらを従業員に向けて広げ、後ろに下がるように指示する。さっきまで仕事でかいていた汗とは違う汗が、額から流れる。嫌な汗だ。

後から集まった従業員は、その光景を目の当たりにすると顔から笑顔が消えて、悲鳴にかわる。

「な、なにをしているんだ！はやく警察に電話するんだ！」
少し冷静さを取り戻しつつあった店員は、後ろで棒立ちする他の従業員を見て声を大にして再度言い放つ。

その気づいた従業員達は厨房のほうへ走り出したようだ。

「くそっ！は、はなせ！」

いまだ倒れた店員の体に噛み付いて離れない男をどけようと恐怖に引きつりながらも、男の肩に両手をかけ思いつきり力を込めて倒れた店員の体から引き剥がそうとする。

ドオン！！！！

次の瞬間、ものすごい力で店員が吹っ飛ばされた。

血飛沫で赤く染まった壁に、もの凄い音を立ててぶち当たり

店員は大きな音を立てて、その場に崩れ落ちる。

音は店内中に振動と共に伝わった。

「な、なんだどうしたんだ？」

何人かが異変に気づき、こちらを不思議そうに見る

だが、数秒後にはその顔も恐怖で一杯になった。

悲鳴を上げる女性客、その悲鳴に気づくように周りの

女性客が席を立ち、その場から逃げようと厨房のほうへ向かう。

テーブルにおいてあったジョッキやグラスが倒れ、床に勢いよく落ちた。

ガシャンガシャンと破裂するような連続音が店内中に悲鳴とともに響く。

何人かの勇気ある男性客が、席から立ち上がり入り口の方へ走る。

男達が入り口に着くと、壁に叩きつけられ倒れていた店員の体には血染めのスーツの男とは違うジャンパーの男が噛み付いていた。やはり目には黒い部分が無く、顔面の肌はただれ、緑色に変色している。

噛み付かれている店員は肩口から血を流しながら必死にジャンパーの男を引き剥がそうと抵抗している。

だがジャンパーの男が再度口を離し、店員の首筋に噛み付くと

「ギヤアアア!!」

周りに悲鳴を撒き散らしたあと動かなくなり、その場に静かにぐったりする店員。

その光景を見ていた客の男達に、さっきまでの覇気は無く顔面には恐怖の表情を浮かべ、その場から立ち去ろうと後ずさりしている。

だがその時、入り口からまたゾロゾロと人が入ってくる。ジャンパーの男と同じような肌の色をし、また目からは黒い部分を失っている。

「ア”ア”ア”ア”ア・・」

悲鳴と共に襲われる男性客の声が店内に響いた。

それらの声や音は健二たちが座るホール席にも、恵がいる座敷にも聞こえた。

店内奥の席

「なんだなんだ？」

不思議そうに席と席の仕切りから顔を出す智弘。

そこには人だかりが出来ており、何か事件があつたのだろうかと思智弘が言つと、岩田まで席を立ち上がり、その光景をまじまじと見つめる。

「すごい音がしたけど・・・何があつたか見える？」

綾香が立ち上がったのぞいている智弘に問いかける
少しワインのせいで顔が赤い。

「何かがぶつかった音みたいだったけど・・・」

酒を余り飲んでなかつた健二は、ほろ酔い気味の皆とは違い
音をわりと冷静に聞いた一人であった。

不思議そうな顔で智弘や岩田に問いかけたが、良く見えないらしい。

健二が不思議な顔をするのも無理はない、

ジヨッキヤグラスが割れる音は居酒屋ではよく起こりうる音だが
重い何かがぶつかつて響く音や、常軌を逸した客の悲鳴に似た音は

日常居酒屋で聞くような音では無かった。

ドタン！バタバタ！

その時、物凄い勢いで走ってきた飛鳥が、健二たちのテーブルの横で思いっきり前のめりに転倒する。

「大丈夫ですか！」

マルさんが床に倒れた飛鳥を心配して席を立ち、飛鳥の側に立ち寄って起こす。

「い、入り口に化け物がいるんだ！あんた達も早く逃げろんだ！」
飛鳥は恐怖に震え、転んだ痛みなど感じる暇さえないほど必死な顔をしている。

さつき男に殴られた箇所がうつすら青みがかっている。

「あんた酔ってるんじゃないか？いくらなんでも、そんな冗談受けないぜ」

冷静な健二が飛鳥に少し怪訝そうな顔をして言い放つ。

「う、嘘じゃねえ！もう俺は逃げるぜ！」

マルさんを押しつけ、カウンター席に向かって走り出す飛鳥。

「なんなんだあいつ。これだからヨッパライは困るぜ」

健二は飛鳥に弾き飛ばされた倒れたマルさんの体を起こし、つぶやくように言った。

カウンター席に向かう途中のトイレから、さっきまで寝ていた飛鳥の連れの中国人が出てきた。

「お！バイト！起きたか！大変なことになってるぜ」

「……」

中国人は顔をうつむいたまま何も言わない。不思議そうに再度声をかける飛鳥。

「おいどうしたんだ？とにかく早くここから出ようぜ！」

「……ア……ス……カ……サ……ン……ボク……」

中国人はカタコトな日本語を少し辛そうに喋る。

「は、はいとこ逃げようぜバイト！」

せかす飛鳥は中国人の肩をつかみ、早くその場から立ち去ろうとする。だが中国人の体は、やけに重く、動く気配すらない。

中国人は顔を上げると飛鳥に向けてこういった。

「……ア……ス……カ……サ……ン……ニ……ニクッ……」

「

飛鳥が驚いて掴んでいた手を肩から離すと、中国人の顔をよくみる。肌には斑点が見られ、やけに緑がかっている。

そして、口からはおびただしい血。

トイレのドアの内側からうめくような声が聞こえる。

「た．．たすけ．．てくれ．．いきなり噛まれ．．て．．血が．．」

肩口から血を流した男性客がトイレのドアを這いずりながら出てきた。

「ニク．．！！！」

「うわあああ！！た、たすけてく．．れーっ！」
倒れた男に中国人が覆いかぶさるように噛み付きだした。

「．．．くそ！！おまえもかよ！！！」

飛鳥は絶叫を上げると非常口に向かって走り始めた。

厨房内

カウンター席は妙にあわただしく、調理をする者もオーナーの万田も手を止めて

恐怖と焦りの顔で一杯の従業員と話している。

「とにかくお客に被害が及ぶとまずい、事件の後の対応の悪さでガイドブックに叩かれるのは店のイメージにも関わる。とにかくお客を裏口から逃がすんだ」

万田はガスレンジのスイッチを切り、従業員にどうするべきかを伝える。

顔は苦々しい表情に曇り、少し怒気を含んだ言葉調で会話を続ける。

「チツ。警察に電話は、まだ繋がらないのか!？」

「今かけているんですが・・・繋がらなくて・・・」
おびえて受話器の前に立つ従業員に
「やれやれと言った感じでエプロンを脱ぎ捨て、厨房の奥へ向かう万田。」

「これで三日は営業できないな・・・まったく大損害だ!」
ステンレスの冷蔵庫をコブシで思いつき叩き、

万田は従業員用のロッカールームへ消えていった。

シナリオ【異変】 - 5 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

PM 8時23分 奥の席

トイレの付近で悲鳴が聞こえる。

ドアには、べったりと鈍く赤い血液が滴りおちる。

トイレ付近の客が騒ぎ出し、悲鳴が店内中にこだまする。

「お、おい。あれは・・・血じゃないのか？」

岩田は震える声でトイレのドアに指を指した。

指した方向には確実に正気を失った男がうつろにこちらを眺めている。

「な、なんだありゃ・・・」

健二が声を上げる。まるでスプラッター映画の描写のような血飛沫がトイレを中心として客席に向かいゆるゆると流れだしている。

63

「と、とにかく逃げよう！非常口に向かうんだ！」

智弘は恐怖の顔を浮かべながら席を立ち、その場にいた皆に言い放つ。

健二は綾香の手をつかみ非常口を確認すると走りだす。

健二を追うように智弘や岩田、他の二人も上着と荷物を持つと走り出した。

座敷

「一体なんだって言うんだ！」

座敷にいた恵の部下が声を上げ、フスマを開けると

そこには恐怖の顔に歪んだ客が逃げまどっている。

「うっ、な、なんだ・・・」

ピシヤツと部下の顔に液体がつく。

何かと顔を触ってみると、独特の匂いとツーツと広がる赤い色が手についている。ヒッ！と思わず座敷のほうへしり込みしてしまう。

「血・・・部長！血・・・血です！！」

悲鳴を上げる部下は、思わずフスマを閉じる。

フスマの外では恐ろしい悲鳴の数々が聞こえる。

「何が起きている？おいオマエとオマエ。様子を見て来い」

部下の驚きようを目の当たりにした恵だが、意外と冷静だったのか余裕そうな面持ちで部下に命令する。

「は、はい」

二人の部下は立ち上がり、フスマの前にたち開けようとする。

ドンツ！！ズズ・・・

「うわっ！！」

次の瞬間、部下二人はフスマから出てきた何本もの腕に体ごとフスマをぶち破り引き摺り出されてしまった。

「うわああああああ！！」

血飛沫がフスマに当たり恐ろしい悲鳴と共に

どよめきに似たうめき声と再度部下の悲鳴がフスマを通して伝わってくる。

貫かれて穴が開いているフスマを恵が覗くと、奥にいた光りを失った恐ろしい男二人が部下に襲いかかっている。

「な、なんだこれは・・・ひいい！」

さっき腰を抜かしていた部下が、立ち上がりながら後ずさりをする。

「これは・・・とにかく逃げろぞ！ついてこい！」

恵は隣の座敷のフスマを大急ぎで開け、ホールへ出た。

「うっ！！！」

ホールへ出た恵が自分達の居た座敷のあたりに目をやると、

うめき声と共に部下ではない男が体を引き摺りながらこちらを見ている。

全身から血が出ているようだ。

「う、う・・・たすけ・・・グワッ！」

全身から血を流す男の足には顔色が変色したさっきの男達が、男のふくらはぎ部分からかかとかかにかけての足の部分に食いついていた。

「うわああああ！！！」

恐怖に耐え切れなかったのか悲鳴を上げて大急ぎでその場から走り出す部下。

入り口に向かって走り出した部下を追おうとするが、近くにあったトイレのドアが勢い良く開き、さっきの男達と同じような正気を失った顔の女が出てくる。

「くそっ・・・！」

退路を二つ塞がれて恵は周りを見渡し、緑色の蛍光色を放つ機材を目にする。

冷静な顔に少し焦りの色を浮かべ、トイレ近くの曲がり角を急いで

通過し

非常口に向かって走り出した。

非常口

入り口の惨劇に気づいた何人かの客やトイレ付近での惨劇を目の当たりにした客。それら異変に気づいた客が非常口に列を作り、ドアを開けようとしている。

非常口は逃げようとする人で、ごった返していた。

「くそっ、なんで開かないんだ！」

重い金属で出来ている非常口の大きなドアは、

なぜか鍵もかかっていないのに開かない。

何人も男性客がとつかえひっかえドアをあけようとするが

ドアとドアノブは重い金属音を立てるだけでまったく開きそうにならない。

舌打ちと悲鳴が入り交ざる中、携帯に必死電話する女性客や

その場にへたりこむ男性客。その中には怪我を負ったものもいる。

「くそっ・・・なんでこんな時に・・・」

「なんなんだよう・・・あの男は・・・」

その中に居た健二や智弘は開かないドアに苛立ちを覚えつつ常に周りを

つぶさに見まわしていた。

岩田はドア近くの前列に行ったようだ・・・。

マルさんと茂子はイラツク健二たちの周辺に固まっている。

「な、なんで・・・なんでなの・・・」

綾香は、携帯電話で警察に電話をしているが、なぜか繋がらない。リダイヤルボタンを押す綾香の手は震えている。

「おい早く開ける！」

前列のほうに居た飛鳥は、怒声とも思える声をあげてドアの前の客に言い放つ。

そうこうしている内に、

さっきまでドアを開けるのに必死だったサラリーマン風の男が言い放つ。

「誰か！この中で力の強いの！手伝ってくれ！五、六人一斉にタックルしてドアにぶち当たれば、その力で開くはずだ！」

群集の中から一人、また一人と屈強そうな男が出てくる。

そして岩田も手を上げ、その中に加わったようだ。

「よしいくぞ・・・せーのッ！！」

ガタイのいい男達がドアから少し助走距離をとり息を吸い込み一気に力を溜める姿勢になる。

男の掛け声と共に一斉にドアに突っ込む男達。

ドーンッ！ ガンッ！

重圧に耐え切れなくなつた重い金属製のドアが開く。
ドアを開けた勢いで男達は体ごと外へ出た。
一気に外の冷たくなつた空気が入ってくる。

「よし！皆逃げろーッ！」

先頭の男が声を上げると前列の客達がゾロゾロと駆け足で出てゆく。

だが、走り出した客達を待っていたのは、正気を失つた緑色の化け物だった。

先にドアから出て行つた客は次々と襲われていく。

逃げようとする客も恐ろしい力で引きずり出されていく。

悲鳴を上げてその場に倒れる客の中に岩田もいた。

「うわああ・・・！」

走ろうとしていた飛鳥が非常ドアのノブに手をかける。

重い金属のドアがゆっくりとしまりはじめる。

「い、岩田ーッ！」

健二が大声で襲われている岩田に叫ぶ。

岩田の元へ走ろうとするが急いで非常ドアに逃げかえる客に止められて

身動きが取れない。

「くそっ！け、健二・・・うわああ！！！」

襲い掛かってくる化け物を払いのけようとする岩田だが、肩口を噛み付かれ、ぐったりとする岩田の体が見える。

ズウン・・・

「岩田ーーーーッ!!!」

健二の叫びと共にドアが大きな音を立てて閉まる。

その場に崩れ落ちる健二を見て、智弘が叫ぶ。

「くそ！なんでドアを閉めた！」

ドアを閉めた飛鳥に& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; みかかり、悲鳴の聞こえるドアの前で

怒号を浴びせる智弘。

「し、しかたねえだろ！化け物が中に入ったら俺達もやられちゃう！」

胸倉をつかまれながら、必死に弁解する飛鳥。

ドアノブから離れた手は震え、顔には恐怖の表情が浮かんでいる。

智弘は飛鳥の胸倉から手を離し、ドアの前で崩れた。マルさんと茂子が智弘の近くに寄ってくる。

「なんてことに・・・なんてことになってしまったの」

綾香が恐怖と悲しい顔を浮かべて肩を落とす二人と同じ気持ちに襲われながら

ポツリとつぶやいた。

非常口の外は悲鳴とつめき声が聞こえる・・・。

シナリオ【異変】 - 6 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【異変】 - 6

PM 8時30分 非常口

重い金属の壁を外側から強く叩く無数の化け物。

その場に泣きじゃくる女性客、苛立ちを隠しきれない男性客。

恐ろしい振動とガンガンという音が響く壁を背に恐怖の色を濃くする客達を

よそに悪夢のシナリオは進んでいく。

「くそつ、これじゃあ外に出れねえじゃねえか！」

飛鳥がドアに内側からかけられる鍵をかける。

外の悲鳴が殆ど聞こえなくなったせいか、

ドンドンとドアを叩く重量音がますます大きくなっていく。

「非常口もだめか・・・あの状況じゃもう一つの非常口もダメそうだしヨックを隠し切れない健二だったが、うるたえる綾香や仲間達の手前、

自分が冷静でなければいけないと思い始めていた。

「とにかくここは危ない、移動しよう！」

ドア付近に頂垂れている智弘を起こし

後列に居た綾香達と合流し、非常口のドアを閉めてから悲鳴を上げ続ける客、

もうひとつの非常口に向かうために、その場から逃げ出す他の客達を見て、

仲間達と歩き出す健二、脱出口は無いのかと冷静に考え始めていた。

「なんで岩田君が・・・」

綾香が歩きながら、細々と声をあげる。
手は震え、手に持っている携帯電話は今にもおちそうだ。

付近を見渡ししながら、慎重に歩き続ける健二たちは
トイレと厨房付近の席と入り口へと続く十字の曲がり角に出た。

「入り口・もしかしたらあそこからいけるか？」

健二は入り口へと続く道を選んだ。

「お、おい。入り口には化け物がいるぞ！」

入り口に続く曲がり角を曲がるうとした健二たちを見て
不意に後ろから走ってきた飛鳥は声を上げた。

「な、なんだつて。じゃあ閉じ込められたに等しいじゃないか！」

智弘は脱出できない最悪の状況を思い浮かべてしまったのか
死を身近に感じ、震えながら声を上げる。

「どこか外へ逃げられる脱出口は無いのか・・・」

健二が頭の中で自分が見てきた店内の地図を広げながら
他の入り口が無かったか考える。

「うっ！」

入り口の曲がり角を見た飛鳥が何かに気づいたように
目を開き震えるように指を指す。

飛鳥の指した方向には、正気を失った男と女の化け物がこつちを見
ていた。

化け物たちは健二たちに気づいたように、ゆっくりとこちらに歩き
始める。

「に、逃げよう！」

「逃げるってどこへ！」

飛鳥と智弘が怒声と悲鳴をお互いにぶつける。

足はすくみ、じりじりと非常口の道へ後退していく。

「とにかく厨房の方へ向かうんだ！」

健二は声を張り上げ、綾香の手を引っ張り

皆に厨房の方へ向かうように手を振り、走りだす。

「ア”ア”ア”!!!」

声を上げて襲い掛かってくる化け物を振り払って厨房の方へ走り出す六人。

ガシャン！ ガシャン！

落ちていたガラスの破片を気にもせず化け物が少し速度を上げたように

健二たちを追いかけてくる。

「くそっ！追いかけてくるぞ！おい！」

厨房に向かって走っていた飛鳥が後ろを見ると、さっきまで二人だった化け物が

5、6人に増えて追ってくる。

「おい！こっちだ！」

厨房内のドアから女性の声が聞こえる。
さっきまで非常口に向かって走っていた恵だ。

「さ、先にいかしてもらおうぜ！」

奥に見える厨房の影から手をふっている恵を目視で確認すると
厨房とカウンターの間にあるテーブルに思いつきり体重を乗せ
てを

ヒョイッと飛び越えて厨房の中に入る飛鳥。

「早くするんだ！」

恵が厨房奥のドアを大きく開けて叫ぶ。

目を左右に動かし、しきりに化け物がないか周りを気にしている
ようだ。

「厨房カウンターのドアまで急げ！」

健二は足を速めながら、全員に言う。

飛鳥は厨房のドアにたどり着いたようだ。

ドタツ・・・ガタツガタツドーン！

厨房のカウンター横通路近くのトイレのドアが急に音を立てて吹っ
飛ぶ！

ドア近くのテーブル席にトイレのドアであったものが物凄い音を立ててぶつかる！

トイレのドアの中からは、男の化け物がこちらを眺め歩きだしている。

「くそ！早く走れ！」

それを見た健二が近くにあった木製の椅子を手に取り、仲間達の最後尾に回り、厨房の中へ逃げるように指示をする。

化け物がこちらに向かってくる。

最後尾の智弘がウエスタンドア前にたどり着くと

健二も後ずさりしながら、両手に握り締めた木製の椅子を再び強く握り締める。

化け物が健二の手の届く範囲まで近寄って襲ってくる！

健二は手に握り締めていた椅子を思いっきり振り上げ化け物に叩き落す！

ズガンツ！と鈍い音を立てて沈む化け物を見ていると横から、追ってきた化け物が見える。

再度椅子を自分の胸のあたりまで持ち上げると、思いっきり横にバッドのスイングをするように化け物の頭部めがけて投げた！木製の椅子は宙を舞い、迫る化け物の頭部に激しく当たった。

ズガン！ズズズー・・・ズウン！！！！

倒れる化け物を見て、智弘に合図を送り、ウエスタンドアへ向かう健二であった。

ウエスタンドアを潜って中へ最初に入ったのは綾香だった。厨房の中は意外と広く、冷蔵庫や冷凍庫、食器や刃物を入れる棚、奥のガスレンジの横には消火器が点在し、ウエスタンドア近くのステンレス台には、まな板には魚を捌く用の少々短めの出刃包丁があった。

「ッ!？」

綾香がウエスタンドアを潜ると、厨房内で目にしたものは厨房の店員が包丁を持って倒れていた姿だった。白いエプロンの腹部からは、まだ真新しい赤い血が流れだしている。

「とにかく急がなきゃ」

恐る恐る近づき、死体を踏まないように飛び越える綾香。

恵が待機しているドアにたどりつくと、

茂子とマルさんに早く来るように合図を送る綾香。

「はやく!はやく!」

腕を振り、声を張り上げる。

だが次の瞬間・・・

カ”ア”ア”ア”！！！！

包丁を持った店員の死体が急に動き出した！

「ウワツ！！」

死体を飛び越えようとしていた茂子は、おびえてその場に立ち竦んでしまう。

「ば、ばか早く逃げ・・・」

グサツ！ブンツ！！

マルさんが声をあげる暇も無く茂子は化け物と化した店員の包丁を首に刺され、そのまま凄いで宙にまい、茂子の体であったものは冷蔵庫にぶち当たる。血飛沫が凄いで勢いで厨房中に撒かれる。

「い、いやあああああ！！」

マルさんが絶叫と共に恐怖の表情に歪む。

血飛沫が服につき、さらに恐怖は加速する。

「ア”ア”ア”ア”！！！！」

雄たけびをあげる化け物。

その雄たけびにマルさんは、背中を向けてウエスタンドアの方へ走

り出す。

だが、化け物はギリリとマルさんの姿を見るとニヤリと笑い、マルさんの背中めがけ思いっきり包丁を投げた！

「キヤアアアアアア！」

悲鳴と共にマルさんの背中には刃渡り15cm程の包丁が突き刺さっていた。悲鳴を上げ、その場にぐったりと沈むマルさんの体。

丁度智弘がウエスタンドアを潜って入ってきた瞬間だった。

「うわあああ！！！」

智弘はマルさんと茂子の死体を見るとその場で気絶してしまった。

「どうしたんだ智弘はやく中へ………なっ！！！」

健二がウエスタンドアを潜り、おびえた智弘をどかした。

茂子の死体とマルさんの変わり果てた姿を見ると、

健二は急激な怒りと憤りを覚えた。

「くそおおおお！！よくも！」

周りを見渡し、近くのまな板にあった出刃包丁を手にとると、店員の化け物に思いっきり投げた！

シューッ……！ザクッ！プシューッ……ドロ……ドロ……

勢いよく店員の化け物の腹部に突き刺さる出刃包丁
包丁の刺さり口からは、赤緑色のドロドロした液体が噴出す。

「ア”！ア”！ア”！ア”！ギヤア！アアア！」

恐ろしい雄たけびを上げる化け物。

「や、やったか？」

健二が智弘に肩を貸して起こし、悶えている化け物の横を通ろうとする。

ブン！！ガン！！

化け物の腕が健二の体をかする！

間一髪で避けたものの、物凄い力であったことを物語るように
化け物が振り下ろしたステンレスの調理台は『ひしゃげ』ている。

「ウ”！ア”ア”ア”ア”！」

腹部に深く刺さった出刃包丁を抜くと、再度恐怖の雄たけびをあげる化け物。

ドクドクと流れる血液が床を伝うが、不思議なことに

化け物から流れ出た血は見る見るうちに少量になり、ついには止ま
ってしまふ。

顔を上げ、健二のほうをうっすらと見て少しづつ動きだす化け物。

「くそ！まだ生きてるのかよ！」

かるうじて避けたが、智弘に肩を貸している分、狙いをつけられたら二撃目を避けれる可能性は低い。

周りに使えるモノはないかと周辺を探すが、めぼしいものはない。

焦りの色が見える健二を見て、化け物はニヤリと笑うと

再び雄たけびを上げ健二達のいる方へジリジリと歩いてくる。

化け物が腕を上げた！

「もうダメか！」

健二は智弘をかばいながらその場にしゃがみこむ。

プシャーー！！

「キ” ヤアアアアッ！！！」

健二が体を起こすと、物凄い化け物の叫び声と共に周りは白い煙に包まれていた。

「はやくしなさいよ！」
煙の中から声が聞こえる。

聞き覚えのある声だが、こんなに大きな声は聞いたことはない
健二は思いながら智弘を背負って奥のドアのほうへ向かう。

「ぐずぐずするなよ！早く中へ！」

恵の怒るような声に導かれるように、ドアの中へと入っていく健二
と智弘。

「あ、ああ・・・」

智弘をドアの中に入れて振り返った健二が見たのは
体に似合わないほど、大きな消火器を持った綾香の姿だった。

「あ、綾香！早く逃げろ！」

健二が声を張り上げる。さすがに化け物も煙のない方向へ移動し始
めたようだ。

「このッ！化け物がッ！！！」

綾香は渾身の力で消火器を持ち上げ、化け物のほうへ投げた。

消火器は化け物の腹部にあたり、白い煙に包まれながら
のけぞって倒れる化け物を見た健二は
綾香の腕を引っ張り厨房奥のドアに走った。

健二に導かれるように、ドアへと駆け込む綾香。

恵は健二が入ったことを確認すると、即座にドアを閉め、重い金属のドアに鍵を閉めた。

綾香の表情は、まだ緊張が途切れていないようで、怒りの表情のまま固まり強張っている。

PM 8時45分 厨房奥 従業員用休憩室

「こんなことが起きるなんて・・・悪い夢だぜ」

先に休憩所に入っていた飛鳥が、店員用のロッカーにめぼしいものが無いか探っている。

「おい、あまり触れるなよ。警察が来たとき厄介だぞ」
恵がガサゴソと大きな音を立ててロッカー内を探しまくる飛鳥に忠告する。

「助かりました。ありがとうございます」
健二たちが、恵にお礼を言う。

「生き残ったのは君達と私達だけのようだな・・・」
恵が張り詰めていた表情を少し崩し、安堵の息をもらす。

「・・・私達？他に生き残っている人が？」

綾香が少し不思議そうに声をかける。

手は、まだ震えているようだ。

「ああ。あと二人、奥にいる。役に立つものがあるかどうか調べさせている」

恵は今ある現状を少しでも好転させようと冷静に判断を下したようだ。

「おい、調理用のバーナーと救急箱があったぜ！」
飛鳥がロッカーから何かを見つけたらしく、こっちに持ってくる。

「これは使えそうだな、でかしたぞ」

恵が飛鳥の持ってきたものに満足しつつ、周りを気にする。

「そうだ、名前がまだだったな。俺の名は飛鳥。寺丹飛鳥だ。よろしくな」

健二に目をやりながら、気さくに話しかける飛鳥。

「あ、はい。俺は健二。瀬敏健二っていいいます。この気絶しているのが智弘ね」

健二は気絶した智弘を少し心配しながら、綾香に目をやる。

「私は綾香・・・夢乃綾香です」

まだ震えが抜けきっていないようで口ぶりも、いつもより少し控えめな声で答える。

「そうかそうかよろしくな。で、あんたは何てんだ？」

救急箱の中身を見ていた恵の方に指を指して顔をむけながら喋る飛鳥。

「指を指すな馬鹿者が。言葉のなっていない奴に教える義理はない

が・・・私の名は美和恵。恵でいいぞ」
飛鳥に二度目の忠告をし、薬箱の中を探る恵。

「みんな！凄いもの見つけたわよ！」

休憩所奥のドアが勢い良く開く。

そこから出てきたのは、小柄の女性と黒いスーツを着た男性だった。

「この先に従業員用出入り口みたいなのがありましたよ！」

スーツの男が喜びの声を上げる。

健二たちも少しホツとしたような表情を浮かべる。

「化け物は居なかつたんですか？」

健二はさっきの非常口のことを思い出しながら

少し表情を硬くする。周辺は奴らに囲まれているんじゃないかという最悪の状況を考えてからだ。

「確認しましたが、化け物はいませんね。

どうやら、この敷地から独立している従業員専用の出入り口だったようで、

外の有料駐車場から少し離れた建物と直接繋がっているみたいです」
スーツの男が淡々と語っていると、安堵の息を放ち、全員安心したように表情を崩す。

すると、気絶していた智弘が目覚めたようだ。

「うん・・・ああなんだ夢か・・・」

「起きたか・・・残念だが、そうでもないらしい」

智弘の目覚めの台詞に少し表情を曇らせる健二。

「そうか・・・マルさんや岩田は・・・」

悲しい顔を浮かべた智弘は、周りをみわたした。

次の瞬間、智弘は目を疑う。

「え?!うそ!?マジ?!」

奥のドアに立っている小柄の女性を確認すると

目を皿のようにして、さっきまでの恐怖はどこにいったのやら立ち上がり小柄の女性の前に歩き出す。

「こっ!こっ 河野貴美子さんですよね!」

興奮したような鼻息を立てながら顔を真っ赤にする智弘。

「ええ?ばれちゃいましたか?エへへ、そうですよ。私貴美子。

河野貴美子」

名前を呼ばれたのが嬉しいのか、ウキウキと話始める貴美子。

「だ、大ファンなんですよう!写真集も怪談本も買いましたよ!

テレビも見てます!で、とりあえず・・・さささ・・・さ、サインもらえます?」

「おい、こんな状況なのに何いってやがるんだオマエさん」

「うるさいな!ファンが本人に会える機会なんて少ないんだよ!わかんないかな!もう!」

ミィー丸出しの智弘を見て、飛鳥が問いかける、

そのやりとりがあまりにも面白かったので健二たちが少しずつ笑い

だす。

「おい、とにかく脱出が先だ。その出入り口まで向かうぞ」
恵のまじめな声が、笑いの渦の中を裂くように響く。
しかし恵の口元には笑みが浮かんでいた。

救急箱とバーナーを持ち、立ち上がる六人。

休憩室のドアを開け、脱出路に走り出した！

シナリオ【異変】 - 終了 -

シナリオ【慟哭】 - 1 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【慟哭】 - 1

- P M 8 時 2 2 分 駅前交番

辺りは深い闇が降り、特有の冷たい風が吹き始めた。

駅前には居酒屋やカラオケルームの客引きの声

人々の楽しそうな会話、残業から解放されたサラリーマンなどにぎやかさを増していた。

スウーッと警察のモノであろう自転車がライトをつけて

駅前を通る。溢れかえる人を押しのけパトロールを終わらせた五郎が交番に帰ってくる。

交番には、もうすでに職務を終わらせたはずの小太りの部長が記録を書いていた。しきりに後ろを気にする部長を見た五郎は先ほど倒れた先輩の警官は、相当重症なのだろうと思っていた。

交番前に自転車を止め、イソイソと明かりのともる交番の中に入っ
てゆく五郎。

先輩の警官が倒れたおかげで五郎に回る仕事の量も増えたようだ
デスクには5、6冊の記録用ファイルが並べてある。

「正義五郎、パトロール終わりました・・・」

先輩の警官が行くはずだった、二時間ごとの巡回パトロールを
終えて帰ってきた五郎は、自分と部長のデスクにあるファイルを
ちらつと横目で確認しながら隣のデスクに座る部長に報告をする。

「何か異常は無かったか？」

部長はいつものどおりのトーンで、いつもと変わらない質問をする。奥の部屋で休んでいる警官を気にしているのだろうかしきりに奥の部屋に目をやっている。

「はっ・・・異常無しであります」

五郎が報告とともに部長に敬礼し、部長がうなずくとパトロール活動用の上着を脱ぎ、自分のロッカーにしまふ。

「6時頃に電話した医者がさっき来てな、巡査を見てもらっている。淡々とデスクに座り作業を始める五郎に語りかける部長の手は忙しそうに記録書類を片付けている。

「・・・そうですか、良くなるといいですね」

デスクの書類を見ながら、いつもどおり無表情を浮かべる五郎。部長からの話も無愛想な顔をして、ともすれば話になあなあに聞き流しているようにも見える。

「君は、もっと笑顔といつかなんといつか・・・表情をつけるべきだな。でなければ市民に愛される警官にはなれんぞ」「無愛想な五郎に向かって、上司として苦言を呈す部長。

ガタガタ…ガタガタ…

奥の休憩室が開いて閉まる音が聞こえる。

中から白衣を着た男が、自前であろうと思われる診療用ジュラルミンケースを

もって部屋から出てくる。

「先生、容態はどうでしたかな？」

部長がせわしなく動かした手を一旦休め、握っていたワンタッチボールペンのペン部分をカチツと音を立ててしまつと、ファイルの広がるデスクの上に置く。

「疲労から来る風邪だろうな。自律神経の機能が一時的に弱まつて体温調節が

出来なくなっているが、この時期によくある風邪だ。栄養剤と薬を二、三粒投与しておいた。少し寝れば自力で歩ける程には回復するだろう」

白衣の男が巡査の症状を語りかける。どうやらじきに回復するようだ。

「わざわざここまでありがとうございました。なにぶん大学病院のほうは手一杯らしくてドクターが派遣できないそうなので、尾山先生に電話させていただきました。料金のほうは後ほど署から送らせていただきます」

部長が少し顔を曇らす。なぜなら白衣の男は、最近悪名高い尾山診療所の医師

尾山紫だったからだ。診療時間外で、しかも金に五月蠅い尾山のとだ、とんでもない額を臆面も無く要求する男だというのを事前に知っていたからなのである。

「なあに心配するな、診療時間外だからと言って、そう法外な値段は要求せんよ。それに警察に貸しを作ればいざと言う時役に立つかもしれないからな」

ニヤニヤと少し嘲笑気味の嫌味な笑顔を浮かべる尾山。言葉では優しい事を言っているが、確実に法外な値段を突きつけるに違いない。彼が要求する値段を考えると、部長が曇った表情を浮かべるのも納得がいく。

「ではワシはこれで帰らせてもらおうよ」
ジュラルミンケースを持ち直すと、白衣の男はその場を立ち去ろうと五郎の前のデスクを通り交番の入り口に立つ。

その時、駅前で人々の大きな悲鳴が聞こえた。

ガタガタっと言う音を立ててデスクから立つ部長と五郎。

「なんだ今の悲鳴は！」
部長が立ち上がり外へ出る。
五郎はデスクのファイルを閉じてロッカーをあけ、パトロール用の上着を取り
急いで着込む。

「たすけて・・・駅で急に変な奴が・・・」
外へ出た部長は交番の外で倒れる女性を発見する。
外傷は特に無いようだが、相当怖いことでもあったのだろうか

足と手は異様に震えている。

「どうしました！くっ・・・気絶している・・・」
部長が女性を抱えると女性は気絶してしまふ。

「五郎！先に駅に向かえ！女性を介抱してから私も後で向かう！」
部長は五郎に目をやり、悲鳴のあった駅へ向かうように指示する。

「・・・はい」

駅前あたりで絶叫とも悲鳴とも受け取れる声を聞きながら
上着を着込み、駅のほうへ向かう五郎。

「ワシも行こう。けが人がいたら大変だからな」
尾山が後ろから五郎に声をかける。

ジュラルミンケースを持ち上げ白衣のエリを正すと
案内されるように五郎と共に駅に向かう尾山。

だがなぜか尾山の顔はニヤニヤしている。
けが人が出ればまた金儲けができるでも思っているのだろうか。

- P M 8 時 3 5 分 S 駅 西口改札前

「たすけてくれーっ！」

「うわあああああああー！」

「血が・・・血が・・・」

「キヤアアアアア！」

駅前に広がる声と音の数々。

人の波が四方に散らばろうとして列のうねりを生み出している。

勢い良くその場から逃げようとする男性に当たり倒れる女性
いつもの駅ならば流れるはずも無い、異質な音に気づいたのか
駅に併設されている喫茶店や食べ物屋から人が出てくる。

人を掻き分けて出てくる五郎と尾山。

「・・・ツツ」

逃げる人に邪魔されて、それほど前進できない五郎。

苛立ちを抑えきれず、少し舌打ちをしながら

逃げる人を回避して進む。

「これは大事件だな・・・」

人が逃げる様を見て、ニヤニヤと下卑た笑顔がますます顔中に広がる
尾山を見て、少し表情を曇らせる五郎。

93

どうやら駅にいた人達は大まか逃げたようだ。

人だかりも悲鳴も遠くで聞こえるようになった。

やっと人の波を超えて、現場であろう場所にたどり着く五郎。

「・・・うつ・・・これは」

普段無表情の五郎が、さっきまで曇らせていた表情をさらに曇らせる。

駅構内の床にはべっとりとした血痕がつき、駅構内の洋服店のウィンド
ウには

鈍いドロドロした血が重力に負けたようにぽたぽたと落ちる、窓には何か

大きなものが当たったかのようにヒビわれが来ている。

窓の下にはちゃらちゃらしたアクセサリーをつけた若者の体が転がっている。

「いてえ・・・いてえよ・・・」
まだ息があるようだ、荒い息を立ててその場に佇んでいる。

「おい大丈夫か」

尾山が飛び出して男に近づく。

男の傷口を見るや、さっきまでニヤニヤしていた顔は凍りついたように真剣になり、何を思ったのか怪我の手当てもせず男の側を離れる尾山。

「逃げよう、ここは危ないぞ」

尾山は焦りの色を浮かべ、五郎に駆け寄る。

「…何を言っているんだ。あんた医者だろう、直せないなら早く病院に連絡してくれ・・・救急だ！」

五郎は今まで上げたこともないような怒声を尾山に浴びせる。

「暴力事件か・・・？いったい何が・・・」

男に近寄り、五郎が息を荒げている男に質問する。
だがその目の前に広がる光景に五郎も、なかなか冷静さを保てずにいるようだ。

ドオンガーン！！

その時、奥に設置されていた自動改札機が大きな音を立てて駅構内にぶっ飛ぶ。

「うっ、なんだ・・・？」

不思議そうに改札のほうに走る五郎。

尾山はその場に立ったまま、やけに周りを見回し警戒している。

「アアア・・・ア”ア”ア”ア”！！！！」

巨大な咆哮が駅構内を包む。

改札からでてきたのは正気を失った目をしている人間の群れ。

肌の色は緑色に変色し、血や唾液などが口からだらしなくこぼれている。

化け物は獲物を探すように辺りを見回し、うろつきだした。目に生氣はまったくない。

「な、なんなんだ・・・」

ゾロゾロと改札から湧き出てくる化け物を見て思わずその場で立ち止まってしまった五郎。

そんな五郎を見て走り出す尾山。

「早く逃げるぞ！」

五郎の腕をつかみ、迫り来る化け物達の群れから逃げ出すように思いつき腕を引つ張る尾山。

恐怖に凍った五郎の表情は、それがどれだけ危険であるかを動物的勘で察したような、そんな顔だった。

怪我をしている男を置き去りにして駅構内を離れる尾山と五郎。

「や、やめてくれ・・・たすけ・・・て・・・」

化け物たちは怪我をした男を発見するとゾロゾロと群れで男に覆いかぶさるように襲い掛かった。

「うわああああ！！！」

血の音。肉を噛み切る音。

骨の軋む音が遠くで聞こえた。

曇った表情のまま走る五郎と尾山。

「とにかく交番へ……」

尾山の腕を振り解き、五郎は必死に冷静さを保とうと、部長への報告も含め交番に向かった。

「……どうなっているかはわからんがな」

尾山が意味深な台詞を吐く。

交番の明かりが見えた。もうすぐだ。

シナリオ【慟哭】 - 2 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【慟哭】 - 2

- P M 8 時 4 2 分 駅前交番

悲鳴の聞こえる駅前を通り過ぎ

五郎と尾山は駆け抜ける。闇夜にちっばけな明かりを灯す交番へ。

「うっ……お前達！どうしたんだ!？」

上着に身を包んだ部長と交番ドア付近でぶつかりそうになる五郎と尾山。

「え、駅で化け物が……」

五郎の声が若干震える、まださっきのショックから立ち直ってないようだ。

「……とにかく逃げたほうがいいな。ワシの車が近くの駐車場に止めてある。それで逃げよう」

五郎に比べやけに落ち着いた表情の尾山が後ろから合図する。

ジュラルミンケースを持ったほうの手を再び握りなおす。

駅のほうから悲鳴とも咆哮とも取れる音が近づいている。

「わ、わかった。とにかく本庁に連絡をとってみよう」

顔にうっすらと汗をかいている部長は、デスクの受話器を取り警察本部へ

電話をかける。

ツーツーツー……。

しかし電話は無常な電子音をたてるだけで繋がらない。

「くそっ！繋がらないぞ！」

徐々に焦り始めていた部長は、何かに気づいたようにロッカーの横のガラス棚に入っていた黒い箱を取り出す。

「……こ、これは？」

少し落ち着きを取り戻していた五郎がイソイソと配線を繋げる部長に話しかける。

「これは昔署内で使われていた無線機だ。お下がりを交番にもらつてな

電話のほうが便利だからと閉まわれておつたが……これは凄いで、電波の範囲内であれば全警察車両に届くんだ！」

部長が赤い配線、青い配線を巧みに指し込み、瞬く間に黒い箱は無線機としての姿を取り戻していく。

「よし、これで使えるぞ！」

最後の配線を入れると、ツーツーと小さな電子音が聞こえる。どうやら無線機のスイッチが入ったらしい。

「こちらS 駅前交番駅前で異常事態発生！応援頼む」
明確に伝わるように大きな声ではっきりとマイクに言い放つ部長。

その間にも近づいてくる悲鳴と咆哮。

部長が冷静さを取り戻しつつ、マイクを置き五郎に目をやり言う。

「・・・奥で寝てる巡査とさっき倒れた女性を連れて行かなければならないな」

悲鳴の聞こえる周囲を見回していた五郎が、部長のほうを見てうなずき納得したように奥の部屋に向かう。

ドオオオン！

五郎が丁度向かおうとしたとき休憩所のドアが勢い良く吹っ飛び灰色のコンクリート壁にめり込む。

パラパラと砕け散ったコンクリートの破片が周りに落ちる。

「・・・うっ！」

ドアと共にさっきまで生きていたと思われる女性の体が崩れ落ちとめどなく血を流している。

顔面を見ると五郎は思わず吐き出しそうになった。

女性の顔面はまるで何かにかじられたように深く抉られ、むき出しの骨格から毛細血管が千切れ、あたりにシャワーのような血液を流している。

見る見るうちに休憩所の入り口周辺が血の赤色で染まっていく

部屋の奥からつめき声とミシミシと物体から何かが弾け飛ぶような音が聞こえる。

「……っ！」

思わず、その場から後ずさりする五郎。

「くっ、ここにもか……」

下がってくる五郎を見て、ジュラルミンケースから何かを取り出そうとする尾山。

「おい！五郎大丈夫か」

部長が五郎に駆け寄る。

腕をつかむと五郎の体はガクガクと震えているようだ

五郎を払いのけ、部長もにわかに信じがたい恐ろしい光景を目の当たりにする。

「ど……どうなってるんだ……?! 巡査は……!?!」

状況に戸惑いを隠せない部長は驚愕の表情を浮かべる。

青い制服に赤い血飛沫がべったりと張り付く。

風邪で倒れている巡査が気になるのか奥の部屋へと駆ける部長。

ガンッ！ガンッ！ドガッ！ズゾゾオオオオ！

「カハッ……グボア！」

部屋の奥をのぞこうとした瞬間、物凄い質量が腹部にあたり部長の体は入り口に向かつて数m弾き飛ばされていた。丁度五郎の横をかすめるように飛んでいった部長の口からは内臓をやられたのであろうか、おびただしいほどの血液が流れ出ているのたうち回りながら、声にならない声をあげ、その場へたり込む部長。

「ぶ、部長、大丈夫です・・・か」

五郎が部長に駆け寄り、おびただしい血を吐き続ける部長に少し恐怖に似た視線を浴びせる。

「ッ・・・に、人間じゃないぞ・・・気をつけ・・・グハッ」

再び血を吐いてその場にガクツと力なく倒れる部長を見て五郎は腰のホルスターに手をやる。

ズウン！ズウン！

奥の部屋から、物凄い音を立てて出てくる、巨大な人間型の化け物だった。

さっきのドアがめり込んだ衝撃で、奥の部屋へ続く照明がショートしたようだ

かなり暗いが、化け物の姿が微かに見える。

人間のそれとは違い、脚部と胸部と腕部が異常に肥大化している。

「化け物め！これでもくらいやがれ」

覚悟を決めた五郎がホルスターから拳銃を抜き、化け物めがけて撃ち放つ！！

トリガーにかけた指が矢を放ったようにはじかれ、

鉛の銃弾が恐ろしいスピードで発射される！

ドオン！！！ブシュツ・・・！！

「ウ”カ”ア”ア”ア”ア”ア！！！！！！」

化け物が悲鳴ともとれる叫び声をあげ、のけぞりながら倒れる。

銃弾は、膨れ上がった化け物の胸部に当たり

肥大化した胸部からおびただしい血液と思われる黄緑色の液体が流れ出す

「や、やったか？」

五郎は倒れた化け物を見て、少し安堵の息を漏らす。

「いや・・・どうやらまだのようだぞ！」

尾山がそういうと、化け物の薄気味の悪い眼光がキラツとこちらを覗き込んできた

少しニヤツと笑ったような表情で、再び立ちあがる化け物。

「オアオオオオアヴァアア””！！」

雄たけびを上げながら入り口に向かって徐々に歩いてくる化け物。

電灯に照らされてしっかりと顔が見える。

「あ、あれは・・・巡査・・・巡査じゃないか！」
五郎が驚いたのも無理はない、なぜなら化け物の顔は
さつきまで奥の部屋で休んでいた先輩の巡査であったからだ。

「くっ、さつきの銃弾の穴がもう塞がりはじめてやがる」
冷静に見ていた尾山が、近づいてくる化け物を見て
ジュラルミンケースから液体の入ったビンを取り出す。

「ナ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！！セ”エ”エ”エ”！！！」

ドタンツドタンツドタンツ！

化け物は物凄い重量感を出しながら、尾山を確認すると一気に走っ
てくる。

尾山は焦ることなく左手に握り締めたビンのふたを開ける。

ブウン！

化け物が肥大化した右手を振り上げる。
その瞬間、尾山は少し笑みを浮かべてこう言う。

「一生苦しみがれ！化け物がッ！」

パッシヤアアア！

ピンを思いつきり化け物の顔面めがけてぶちまける。

ジュウ・・・ジュウ・・・ジュウ・・・

化け物の顔面から蒸気のようなものがとめどなく出てくる。

その蒸気は死体の焼けるような匂いで、覚悟していた尾山でさえとてつもない不快感を感じさせる。

「ガアアアアアア!!」

急に腕を顔の方へもっていき顔面をかきむしる化け物は、その場に音をたてて崩れ、じたばたと恐ろしい雄たけびを上げて苦しみだした

106

「さて、逃げるぞい！」

尾山はその場で苦しむ化け物をよそに入り口の方向へ走った。手に握り締めたジュラルミンケースを再び強く握り締めるとへたり込む五郎を見て、少し手に力を込める。

パシッ!

部長の死体を見ながらへたり込んでいた五郎の頬が少し赤くなる。

「おいオマエさん、ソイツみたくなりたくなけりゃ早くするんだ！」

「は・・・はい・・・」

尾山は五郎の腕を掴むと駐車場の方へ走り出した。

「アアア・・・ウガアアア・・・」

交番を後にする二人の耳には、化け物の悲鳴がまだ聞こえていた。

駅前の悲鳴も、いまだ続いている。

シナリオ【慟哭】 - 3 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【慟哭】 - 3

- PM 8時54分 居酒屋裏通路

ヒタヒタと近寄る恐怖と自我を戦わせながら

少し走るぐらいの早歩きで薄暗い居酒屋の裏通路を走る七人。

今まで居た休憩室のドアはガタガタと不思議な音を立てて揺れ
今にも化け物たちの群れが飛び込んできそうだった。

その音に恐怖を覚えながら、ひたすら声を押し殺すような沈黙を続ける。

地上の排気口から

ヒューッと冷たい風が独特の重苦しい臭いと共に吹いてきた。

裏通路は外の有料駐車場の近くの建物に繋がっている・・・。

「みんなどうしたんだ？急に暗い顔して黙っちゃいやがってよ」
いつもどんなときでも会話が止まるのが嫌いな飛鳥が
その長い沈黙に耐え切れなかったのか、皆に聞こえるように言う。

「とんでもねえ事に巻き込まれちゃってるのはわかるけどさ、明るくいこうぜ！」

続けて飛鳥が言い放つ、今度はさっきより大きな声で皆に言う。
こんな状況でも、表情は常に明るい感じだ。

しかし、皆の表情は少し暗い。むしろまだ現実の把握が出来てないようだ。

「おいおい、聞こえてねえのかよ。まったく必死すぎだぜ」
「やれやれと思つた飛鳥が手を上にあげ『わからない』と言いたげな
ポーズをし、
さらに大きな声で、周りに聞こえるように言う。

「人生楽しくいかなきゃな、なあそうだろ？おい？」
「いまだ無視され続けることを気にしていないように
今度は前を歩く恵に声をかける飛鳥。

「うるさい。少し黙ってる」
恵が余りに騒々しい飛鳥に向かって、少し怒気をはらんだ声で言い
放つ。

「・・・へっ、へいへい。黙ってればいいんでしょう」
少し残念そうに口を閉ざす飛鳥。
恵に言われたことが気に障つたのだろうか、表情は少し曇っている。

再び始まる沈黙。七人の足音と妙なうめき声だけが
わずかな電灯の明かりに照らされている薄暗い通路を埋め尽くす。

50mほど歩いただろうか、通路の端に横たわっている人影が見える。

薄暗い通路では確証はないが、この店の店員がつけているエプロンに似ている

胸に何かを抱えているらしく、腕はがちりそのものを&#25681;んで離さない。

「お、おいアレを・・・」

健二が指を指すと、人影がドサツと力なく

抱えていた腕をほどき、その場に崩れる。

ほどいた腕からは白い紙のようなものがパラパラと床に散らばり通路にだらしなく広がると同時に薄暗い電灯に照らされる。

「また化け物かい？」

智弘が健二の指指す方向に人影を見て少しビクツとする。

「いや・・・どうやら『被害者』のほうらしい」

健二がその人影の近くに寄って、少し気味悪そうに声を上げる。

エプロンをつけた人間は、すでに右腕と足に噛み傷があり

どうやら血は止まったらしいが、すでに脈は無く呼吸も止まっている。

数枚血に染まった白い紙を握り締めて事切れている。

エプロンについたプラスチック製のネームプレートには

『居酒屋虚無僧店主 万田功』と書いてある。

散らばった白い紙をよそに、エプロンの周りを散策する健二。

「何かめばしいものはあつたかい？」

さつきまで曇った表情をしていた飛鳥が健二に近づいてくる。走ると同時に散らばった白い紙の何枚かが宙に舞う。

「何かな？行ってみようよ」

「だめですよ。ただでさえ事件に巻き込まれてるんですから！」
なんだろうと近寄る貴美子を止めようとするマネージャー。

「健二、よしなさいよ。他人の死体なんて見たってしょうがないわよ」

死体の周りを散策していた健二に対して綾香が言い放つ。
たしかに最もなことだ。もし警察が来たら、何か疑われることを聞かれるかもしれない。

その危険性を危惧する綾香の意見を聞かず、
健二と飛鳥は倒れた男の周辺を散策する。

「これは・・・株券？・・・店の権利書？そうか持って逃げ出そうと
していたのか」

恵が散らばった白い紙のいくつかを手にして、読み上げる。
どうやら店の権利書や株券のようだ。

「逃げ出そうとして権利書を持っていつけど、外に出て殺されたという
ことか・・・ということはこの先に繋がっている建物はすでに
化け物に・・・」

冷静に推理する智弘。しかし、顔はあからさまに恐怖に歪んでいた。

小説やテレビでは、たしかに死体なんてザラに出てくるが、実際に見ることは違う。多大な不快感と恐怖感、嘔吐の感覚さえ出始めている。

「ちよつと？大丈夫？さつきから顔が青いけど」
貴美子が智弘の顔を見て、心配そうに声をかける。

「は、はい。貴美子さんがいるって言うのに。ダメだな僕は・・・」
智弘が心配されたことを気にしてだろうか、少し無理にでも明るい顔を作ろうとするが、実際に起きている事柄を見ると、やはり暗くうつむき、明るい言葉や表情など出るはずもなかった。

「これは・・・」
健二が死体の胸ポケットに入っている4枚のメモを発見した。

1枚目

『 前日の売り上げ 前前日より12万円売り上げが上がった。
今日から新メニュー 『北海道風虚無僧ちゃん焼き』 を発売した。』

材料コストに対して売り上げは上場のようだ。相変わらず自家製醸造ビールの売れ行きがいい。ガイドブックを信じる馬鹿な客のおかげだ。

普通のビールより高いだけでウマイと思えるなんて。いいカモだぜ』

2枚目

『くそつ、どういうことだ。肉屋の奴がもうウチには納入できないと言ってきたやつだ。肉のコストを下げると言っただけなのにまったく融通の利かない奴だ。最近事件が多発している。従業員には関わるな』

ときつく注意しよう。通路続きの店のガンシヨップ【千手】の店主の影響か？

最近、俺に逆らいやがる従業員が多い。シメなきやいかな』

3枚目

『ガンシヨップの栗木のヤロウが、また文句を言いにきやがった。

「この店から出てくる客がウチの店で暴れる」だあ？へっ！

もともとおめえの店だったらしいが、そんな文句くらいでへこたれる俺じゃねえんだよ。文句があるならためえのガンシヨップもつぶして虚無僧二号店を作つてやるよ。栗木よ！』

4枚目

『裏通路から外 出るドアと ン ップに出る アに

電子ロックを てやつ ぜ。ざまーみ がれ栗木 っ！

だが 俺も歳 かな 忘れ メモし おくぜ。

ガン ヨップへの ワード 0820

通路から外への スワード 06 だぜ』

四枚目はところどころ血が滲んで読めない部分がある。

「血で汚れて見えないな」

飛鳥がメモを取ってみている。

見終わったようだ。手のひらからメモをその場に置き、立ち上がる。

「何かの役に立つかもしれないから持っていけます」

健二は少し気になったのか飛鳥が床に置いたメモを

ズボンのポケットの中に入れた。

「とにかく進もうか。ここにも始まらないからな」

恵がメモを調べていた健二と飛鳥に声をかけ、

七人で固まりながら少し早めの速度で歩きながら通路の奥に向かう。

通路の奥は電灯の本数が多いのか、少し明るくなっている。

通路の奥にコンクリートの壁を挟んでドアが二つ見える。

一つからはうめき声が聞こえる。もう一つのドアからは地上からの風が吹いているようだ。若干ドアを叩く音も聞こえる。

二つのドアには番号入力型の電子ロック錠がついている。

電子ロックの解除には四つの数字を打ち込んでいくようだ。

「おい見てみる、電子ロックだ」

恵がドアの電子ロックを指差し、手に持っていたハンドバーナーを健二に渡し

少し焦ったように、数字の羅列を打ち込んでいく。

そのとき後ろの通路の休憩室のドアから通路全体に響く音が聞こえた。

ガン！ズサツ・・・ズサツ・・・

何かが後ろから追いかけてくる音がする。

通路に響くようにうめき声が聞こえる。

「くそつ、後ろのドアを突破されちまったか！」
健二が声を張り上げる。その瞬間、その場にいる全員が顔を歪ませる。

「は、はやくロックを解除しろよ！」

焦りが沸点まで達したように飛鳥が声を上げる。

無理もない。今通ってきた通路には他に逃げ道らしきものは無く。

ここで解除できなければ化けモノから逃げる術はない。

持っていたガスバーナーを強く握り締めた。

「何か武器はないの?!」

綾香が回りを見渡した。

通路の棚のところに【木製の長い角材】を発見したようだ。

「どうしよう・・・十字架もんにくも利きそうにないし・・・」

貴美子が持ってきたバツクから番組で使っている除霊道具を

取り出すが、使えそうなものはほとんどない。

「貴美子さん。ドアの近くまで下がっててください」

マネージャーが綾香の見つけた角材を手に持ち、ぐつと力をいれて構える。

「無理よ！そんな棒きれでどうにかできる相手じゃないわ！」

貴美子がマネージャーの腕をつかんで止めようとする。

しかし、それを振り払うマネージャー。

「私は高校時代、甲子園に出たこともあるんですよ？大丈夫、心配しないでください。危なくなったら戻ってきます。下がっててください……」

怪我でもされたら事務所に怒られますから」
角材を持って貴美子を押しつけ、走り出すマネージャー。

「お、俺もいくよ。役に立たないかもしれないけど
じっとしてるのはニガテなんだよね……ガスバーナー貸しておく
れ」

飛鳥の持っていたガスバーナーを自分が持っていた救急箱と交換してもらい
マネージャーの後に続く智弘。

「くっ、電子ロック……電子ロックのパスワード……」
プログラマーである健二の脳がフル回転している。
店の電話番号、住所、ありとあらゆる数字を打ち込んでいる恵に
言いながら、あたりを警戒している。

「くそ！人生最悪だよ！もういやだ！だめだ！」
飛鳥は悲鳴をあげている。開かないという現状にパニックしている
ようだ。

アアア・・・アアアア！！

電灯の薄暗い明かりに照らされて、化け物どもが通路の奥へ奥へと移動してくる。

「も、もうここまで来てるのか」

角材を持って走ってきたマネージャーが少し息を整えながら化け物たちのスピードに驚愕する。目測で化け物との距離は約10m先といったところだろうか。

「ま、マネージャーさん。僕もやりますよ」

ガスバーナーの使い方を見ながら智弘も息を切らして到着する。

「す、すまないね君。今度、河野貴美子のコンサートがあったらチケットを優先して君にあげるよ」

冗談まじりに手に持った角材を再び握り締める。

「マネージャーさん。甲子園出場って、ほ、ほんとなんですか？」
冗談に対して質問で返す智弘。

震えの止まらない右腕にガスバーナーの点火スイッチがカチカチと音を立ててぶつかっている。左手でそれを抑えるが左手も少し震えている。

「いちおね・・・・・・万年補欠だったけど」

少し照れ笑いながら、目の前に近づいてくる化け物に

目をやるマネージャー。

「ア”ア”ア”ア”!!」

化け物は手をマネージャーに振り上げ、ギラついた口と目で睨み攻撃してくる!

「く、くるぞ! 智弘君!」

角材を上段に構えて化け物に思いっきり振り下ろすマネージャー!

ブーン!! ガンッガンッ!

「ウ”アアア・・・」

叩かれた化け物は苦しそうにその場に崩れる

叩かれた部位の皮膚ははがれ、だらしなく血液が出ている。

「このっ!!」

智弘がバーナーのスイッチトリガーを押す。

ポオオオオ!

水の沸点をゆうに超える温度の炎の塊が小さなバーナーから射出される。

「ウフアアアア」！ガアアアア・・・！！」

まるで油に引火するように化け物の髪の毛や皮膚に燃え移っていく炎。

ジタバタと動き回り、その場に倒れこみ静かになる化け物。

「いけますね！これは」

智弘がクロこげになり異臭を放つ化け物を見ながら

バーナーが有効であることを知ると、俄然強気になっている。

しかし奥からまたゾクゾクと群れがやってくる。

「まだまだ、来るみたいだ・・・気をつけるんだぞ！」

マネージャーの音が通路中に響いた。

- 通路奥

後ろで物が倒れる音、人間が焦げた匂いなどが電子ロック前にいる
恵や飛鳥の恐怖を煽り立てる。

貴美子は、マネージャーのことが心配なのだろうか
通路の中間を覗いている。

綾香は周辺を見回し、何かないか見ている。

「セキュリティが高すぎて、非常用の解除プログラムじゃ
電子ロックが解けないみたいだ」

健二が携帯のメモリーを使って、自分で作ったプログラムを使い
電子ロックを解除しようとしている。

だが、どうやらセキュリティレベルが高くて携帯のメモリーでは
解析が追いつかないようだ。

「っ……どうすればいいの」
綾香が少しあきらめ気味に声を上げる。

「蹴飛ばして開くドアでもなさそうだな」
恵が電子ロックドアの材質を見て冷静に言う。
しかし表情に余裕などない。真剣そのものだ。

「くそっ！あの店主が生きてるうちにパスワードを教えてもらえば
良かったんだ！」
飛鳥が少々あきらめが入ったような声で言い放つ。

「ん……？パスワード……？そ、そうだメモだ！」
健二が何かをひらめいたようにポケットから
さっき拾ったメモを取り出す。

「ガ・・ンシヨップへの・・パス・・そうだこれだ！」
メモをパラパラめくりながら、血がにじんだ四枚目のメモに目をやり
パスワードがわかったようだ。

「恵さん！0820だ！」
大声でドアを隅々まで調べていた恵に合図を送る。

「わかった。打ち込むぞ・・・0・・・8・・・2・・・0・・・！」
恵が確認するように打ち込んでいく。

ピーッ！

「やった開いたぞ！」

電子ロックの表示が赤から青へ変わった、どうやらドアが開いたらしい。

「はやく智弘たちを迎えにいかなければ・・・」

その時、言うより早くダツと駆け出した影があった。
貴美子である。

ガチャ

「と、とにかく俺達は早く中へ行こうぜ！」
飛鳥が、いの一歩にドアを開け内部へいく。

- 通路奥手前

「だ、だいたい倒せましたけど・・・まだ奥からきますね」
智弘が少し震える声でマネージャーに話しかける。
ガスバーナーの残量も少し不安になってきた。

「どこまで持つか・・・早くドアを開けてもらいたいね」
マネージャーがさつきにもまして角材を強く握り締める。
角材の先には赤黒い血らしきものがついており
それまでであった戦闘の物凄さを語っている。

「みんな！ドアが開いたわ！早く来て」
貴美子の声が聞こえる。やっとかと安堵の表情を浮かべる二人。

「助かった！」
智弘が声を上げると、とっさに体を翻し通路奥に向かって走り出す。
マネージャーも一緒に走り出した。

「ア”！ア”！ア”！」

その時、マネージャーの後ろに倒れていた化け物が急にマネージャーの足に
噛み付いてきた！

「ぐわっ！」
ふくらはぎの部分から出血した血液が化け物の顔にシャワーのように降り注ぎ

智弘と貴美子の恐怖の色をよりいっそう際立たせる。

「ッ・・・このやるう！」
手に持っていた角材で化け物の背部を思いっきり突きするマネー

ジャー。

化け物は囁むのを止めて、その場にぐったりする。

「は、はやく逃げてくれ・・・」

足をずりながら後ろに振り返るマネージャー。

角材を化け物から引き抜き、足の痛みも気にすることなく
ゾロゾロと薄暗い通路から出てくる化け物に睨みをきかせる。

「そ・・・そんなこといったって!」

貴美子が情けない声をあげる。マネージャーに駆け寄ろうとしたのを
智弘が止める。

「早く!今のうちに!」

智弘は半ば強制的に貴美子の腕を取りドアまで走った。

「そ、それでいい。貴美子さんさえ無事なら・・・」

踏ん切りがついたような表情を浮かべ、

角材を強く握り締め化け物に思いつきりぶつけるマネージャーだっ
た。

血飛沫は壁、床、いたる所へ塗りとくられた。

化け物の咆哮がドアまで続いた。

シナリオ【慟哭】 - 4 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【慟哭】 - 4

- P M 9 時 1 0 分 奥 通 路 ド ア 階 段

秋独特の小寒い風が、冷たいコンクリートに伝わって
より一層深くなる闇に人間達の恐怖を煽る。

通路を吹き抜けた風は、冷たさと共に今現在
この街で起こっている異変を知らせる
不自然な異臭を運んでくる。

通路の電子ロックを開け、通路続きにある階段までたどり着いた六
人。

ドアの向こう側の通路で悲鳴が聞こえる。

貴美子の顔は、さっきまでの満点の笑顔から
悲哀の表情に歪んでいる。

階段近くでしゃがみこみ、うつむいている貴美子。
なだめる智弘と綾香だったが、貴美子は一向に暗い顔で泣き出して
いる。

カツンタンタンタン・・・

冷たいコンクリートを靴がはじく音が階段の上のほうから聞こえる。
健二と飛鳥だ。

「この上はどうやらメモに書いてあったガンショップのようだが」
飛鳥が解けた靴紐を直しながら階段上り口付近で言う。

「正面ドアは開いてましたが、どうやら化け物はいないようですが・・・」
健二がへたり込んでいる貴美子をチラチラと横で見ながら
綾香や智弘にアイコンタクトで移動を提示する。

「さあ貴美子さん行きましょよ」
智弘が優しく手を掴むが、その腕に自ら立ち上がるうとする力は無く
無力に智弘の腕にブランと吊り下がっている感じだ。

「ね？ここにいっても危ないのは一緒だから・・・」
綾香がもう一度貴美子に話しかける。顔にはうつすらと笑顔を作っ
てみたが
貴美子は元氣のない表情で、しくしくと泣くだけだった。

そんな会話が二、三回続くが、
まだ貴美子はマネージャーの最後の姿が目に焼きついて
そのショックから立ち直れないようだった。

「おいおい、ソイツのせいで襲われるのなんてまっぴらごめんだぜ。
早くいこう」
飛鳥がそんな貴美子を見て、少し投げやり気味に言い放つ。

「飛鳥さん、ちょっとそれは無いんじゃないの？貴美子さんの大切
な人が死んだのよ！」
余りに気持ちを察せない飛鳥にキツと睨む綾香。

少々それにびびったのか飛鳥が「チツ」と
舌打ちしながら階段の上のほうを見て黙り込んだ。

そんな状況をつぶさに見ていた恵が、少し真顔で重たい口を開く。

「泣いてるのは勝手だが、オマエ一人の感傷で全員の命が危険に晒されるのはどうだ？オマエのワガママに付き合っただけでやれるほど、私はこの状況に余裕を感じない。私は先に行くぞ。泣きたいならずっとなら泣いてる。あの化け物どもと一緒にな！」
そういうと恵は、階段を見ていた飛鳥と共に階段を上り始めた。

「・・・」

恵の一言一言が、貴美子の心にズキズキと刺さる。

「そんなこと言わなくて・・・」

綾香がなだめている手を止めて、ポツンとつぶやく。

「だけどたしかにココを動かなければ、いつかやられてしまう」
健二も恵の台詞を聞いて「最もだ」と感じていた。

「とにかく上へ行きましょう。このままじゃ危ないですよ」
智弘が強引に貴美子の腕を引っ張り階段を上らせようとすると
綾香も智弘のフォローにまわり、貴美子の肩に腕組みをし一緒に上
っていく。

「俺達は・・・生き延びられるのか・・・」

健二がドアの電子ロックを再びかけながら階段を上っている貴美子の背中を見てポツンとつぶやいた。

ガチャン。階段を上がった先のドアをあけた。

- P M 9 時 1 3 分 ガンシヨップ【千手】横 有料駐車場

タツタツタツタ...

五郎と尾山が全力で走りながら、追いかけてくる化け物どもをかいくぐり、どうにか有料駐車場前まで来たようだ。

「見る！駐車場が見えるぞ！」
尾山が車のキーを出しながら後ろに迫ってくるこの街の『市民であったもの』であるう化け物に恐怖しながら、持ちにくそうに手にぶら下げているジュラルミンケースを強く握り締める。

「た、助かった！」
駅からゆうに300mは全力疾走している五郎は、うつすらと頭部と背中に

冷たい感じを覚える。冷や汗まじりの表情は暗く必死だったが、その顔も少し

緊張のゆるみであろうか、安堵の表情を見せる。

だが初めて人に向けて撃った衝撃は五郎をいささかパニックらせていた。
右手に持った警察支給のミネベアM60『ニューナンプ』のグリッ
プを
支えている指が震える。

「まだまだワシらは運を持っていると見えるな！」
有料駐車場のゲート内に入ると車が見える。

ワゴン車、軽トラック、普通乗用車。
その中で一際目立つ黒塗りのベンツ。
その前で止まり、急にキーをガチャガチャとドアにあてがう。
どうやら尾山の車らしいが、暗闇の中少ないバックライトで照らさ
れる

普通車の中では異彩を放っている。

「早く乗りたまえ！」
外で周囲を見張っていた五郎を自分の車へ向かうように指示する尾
山。

ドンツバタンツ

助手席に乗り込んだ五郎は、ドアを閉めると
シートベルトをつけるのも忘れ、回りの状況をつぶさに確認する。
周囲に化け物の姿は無い。

ゲート前には駐車場警備員であろう数人の死体が見える
化け物は大通りのほうに群れをなしているが

まだココまでは感づいていないようだ。

しかし、尾山の様子が変だ。キーを挿して回しているのになぜかエンジンがかからない。

「どうしたんですか?!」

五郎が普段あげることの無い大声を上げ、尾山に話しかける。

「エンジン部分に異常な負荷がかかっている・・・? すまん、降りて車の下に何か無いか見てくれ」

五郎に指図すると即座に五郎はドアを開けベンツの車体後部下部分を見る・・・。

そこにはエンジン部分に食いつく化け物の顔があった

「ギャ・・・アア・・・アア・・・アアア」

顔面は赤い血液に覆われ、あごから鼻にかけて化け物の顔が引き裂かれる感じで

エンジン部分に食い込んでいる。火傷と思われる頬の黒い煙りがモーターとの

摩擦熱を感じさせる。

少し弱弱しいうめき声が、よりリアルな恐怖を五郎に掻き立てさせた。

「うわああー!」

思わず声を上げる五郎を見て、尾山もドアを開け、車体の下部分を

見る。

「ちっ！こりやだめだ！」

エンジン部分の焼ききれ消耗した感じを見ると、動かないと悟った
尾山は

さっきまでキーを回していた右手を即座に車の後部座席のファイル
へと伸ばした。

「とにかく逃げる！」

ファイルを手につかんだ瞬間、恐怖におびえる五郎に指示する尾山。
表情には焦りの色が見え隠れする。

「は、はい！」

五郎は言葉を聴くなり、駐車場近くの店に走り出した。
手に持ったニューナンプを再び強く握りながら……。

「くそっ、ワシのベンツが……！」

尾山も、それを見るなり後に続くように走り出した。

- P M 9 時 1 8 分 ガンショップ【千手】店内

駅前大通りの街灯にポツンと照らされる『GUNSHOP』の文字。
大通りでは、悲鳴や怒声、化け物たちのうめき声が風に乗って流れ

てくる。

店内は外の状況に比べ静かで、さっきまでの暗い通路の電灯より明るい

蛍光灯の明かりが店内を照らしている。

展示用のガラスケースや、太い針金を組み合わせて壁に張ってある軍隊の

レプリカ軍服。商品であろうモデルガンや、BB弾を射出できるさまざまな

タイプの銃器が並んでいる。

入り口付近には高そうな銃がショーケースのバックライトに照らされ、その重厚さ溢れる存在感を物語っている。

通路から階段を上がって、このガンショップに来た健二たち六人は何か使えるものは無いか、脱出路は無いかと散策している。

どうやら奥にドアらしきものが見えるが、銃器の空箱などがあって思うように進めないようだ。

「おい、これカッコいいじゃん！」
飛鳥がガラスケースから銃を持つてくる。

ついていた札には『コルトAR15A2』と書いてある。
その突出したフォームから見ると、どうやら攻撃力の高い突撃銃のモデルガンのようなのだ。

「子供の玩具としては良く出来ているな」
恵が興味津々にモデルガンの数々を手に行っている。

会社で管理職として働く恵にとって、子供の玩具に触れる機会などまったくといって無いのだ。あったとしても子供の玩具だ、興味を

そそる

はずも無いと思っていた恵だが、精巧に出来た数々のモデルガンを見て

少しずつではあるが、その価値を再発見したようだ。

「こ、これは・・・」

智弘が少しばかり興奮しながら、ガラスケースからとある銃を取り出す。

札には『H&K MP5』とかいてある。

多くのアメリカガンアクション映画や、海外の警察の特殊班などに配備される銃で

モデルガンとは思えないその精巧な作りは、智弘でなくとも目がいってしまっただろう。

「しかし、なんでまた居酒屋の裏通路がガンショップに通じてるんだ？」

飛鳥が銃を肩越しにかけて、またケースの中を物色しながら疑問を投げかける。

「さっきのメモを見ると、元々あの居酒屋は、このガンショップの別店舗だったらしいんだが、居酒屋に買収されたのか何かして、居酒屋になっただけらしい。あそここのオーナーが何かやったんじゃないのかな？」

健二が物色している智弘と飛鳥に目をやりながら淡々と説明する。

「しかし・・・このままここに居ても、奴らの餌食になるだけだ。どうする」

恵がハンドガンを持ち、すっとその場に立ち上がる。

「バリケードでも築ければ、いいんですがね・・・」
まだシヨックから立ち直れない貴美子をなだめながら、綾香が周囲を見回す。

ガチャッ！

その時、急に入り口のドアが開いた。

警官の服を着た男と、白衣を着て右手にジュラルミンケースを持った男が

ドアを思いつきり開け、店内に駆け込んできた。

「ば、化け物かつ!？」

銃を入り口付近に構える飛鳥。急に騒然となる六人、そして店内。

「はあはあ・・・はあ・・・」

警官が息を荒げている。極度の緊張と疲労のあまりその場に倒れてしまったようだ。

「ま、まてワシらは人間だ」

白衣の男が手を上げて銃を向ける飛鳥たちに抵抗の意思はないと伝える。

左手に持ち抱えてるファイルが持ちにくそうだ。

「まだ生きている人がいたのか!」

健二は人に出会えた喜びの表情を見せる。

他の人も同様に少し浮いた顔を見せる。

- 十分後

少し落ち着きを取り戻しつつある八人。

バリケードを築く代わりに、壁際にあったスイッチを使って格子シャッターをおろした。

これで時間が稼げるだろう。

シャッターが下り終わると、全員の顔に余裕が戻り

まるで長い時間の悪夢が取り払われたように

今まであったことを少しずつではあるが淡々とした口調で会話し消化していく。

「そうですね・・・駐車場はダメですか・・・」

健二ががっくりと肩を落とす、唯一の脱出手段だった車での脱出が不可能となったのだ。シヨックも相当なものと言える。

「下の通路は外に通じているのだろうか？そこから逃げ出せないのか」
尾山がレジカウンターごしに話しかける。

「電子ロックがかかっていて、脱出不可能なんですよ・・・それに・・・」

智弘が貴美子をチラチラ見ながら言う。

通路には、もしかしたら『彼』のなきながらあるかもしれない。
それを今の貴美子に見せるのは酷だと思ったからだ。

「どつすればいいんだ・・・」
五郎が、少しぼやき気味に言う。

ガチャン・・・キーッ

その時奥の扉が開き、空箱を押しつけて何者かが出てきた・・・

シナリオ【慟哭】 - 5 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【慟哭】 - 5

- P M 9時32分 ガンショップ【千手】 店内

ガサツ ガサツ

開封してあったモデルガンの空箱の山を押しつけて作業用のつなぎを着た男が

健二たちのほうへ歩いてくる。

また化け物か？

それとも人間か？

男の足音と店内の無機質な空調の音だけが、ただ店内を響かせている。

少々の疑問と沈黙に秘められた多大な焦燥感。

ドアから出てきた男が、健二達の目の前に立った。

「おいあんた人間か？」

沈黙を破り、飛鳥が恐る恐る声を発する。

「警官に・・・医者か・・・。良かった・・・」

男は足を引きずり、左腕の中間を右手で抑えている。良く見ると患部から出血しているようだ。

つなぎの胸についているネームプレートには『店長 栗木具志』と書いてある。

「と・・・とにかく奥の部屋へ・・・」
息苦しく健二達に語りかけると、アイコンタクトで
全員に奥の部屋に来るように指図した。

・【千手】オーナー部屋

空箱を掻き分け、ドアの中に入ると栗木が大型の南京錠でドアを閉める。

中には簡素なテーブルと、メンテナンスを行う作業用の台が見える。すわり心地の良さそうな黒塗りのソファードとパイプイスが何個か置いてある。

外が見える窓ガラスには全て木製の板がボルトで打ち付けてある。ソファードの奥には簡易キッチンのような場所がある。

奥には外に出るためにドアが見えるが、栗木がやったのであるうかドアノブには大きなチェーンがグルグル巻きになっており
冷蔵庫やタンスなどでバリケードが築かれて簡単には通れなさそうだ。

ドサツ

栗木はソファードの手前に立つと、そのまま倒れるように横になった。

「大丈夫ですか？」
綾香が倒れた栗木に近づく。それに気づいた健二や智弘が救急箱の中を

効き目のありそうな薬剤やガーゼをガサゴソと探り出し
傷口を見て、どうにか治療しようとしているが

まったく知識の無い二人は手際が悪い。

「チツ・・・そこをどきたまえ」

見かねた尾山がジユラルミンケースを置きソフアーに近づいてくる
軽い舌打ちを二度、三度しながら少し表情を曇らした。

「傷は浅いが、出血がひどいな」

尾山がジユラルミンケースから応急処置の道具を引っ張りだし、
傷口を見るや消毒液とガーゼと包帯で処置していく。

尾山が処置道具を動かすたびに、栗木が苦しそうな表情とうめき声
をあげる

いつの間にかソフアーの下には血溜りが出来ていた。

黒塗りのソフアーは血液の赤い線を引き

ポタポタと音をたててこぼれていく。

「この止血の遅さ・・・フィブリンか？血小板が元々少ないのか？
これでは持たんぞ」

尾山が処置道具を洗おうと簡易キッチンの洗面台へと向かい
洗面台の蛇口をひねり、少し熱い湯で洗浄を始めた。
ガスと水道は、まだ使えるようだ。

「これからどうする」

奥のバリケード辺りを散策していた恵が口を開く

「外は化け物、駐車場にも化け物、唯一の脱出路の地下通路も化け
物だらけ……」

飛鳥は中央の柱にもたれかかりながら下をうつむいてブツブツと独
り言を言っている。

「あんだ警官だろう？どうにかならないの？警察の応援とかさ？」

智弘は、うつむいて黙っている五郎へ目配せしながら話しかける。

「……応援は呼んでいる……もう向かっているはずだ」
智弘の質問にそっけなく答える五郎。

うつむいた表情から察するに、あまり他人と話すのは得意ではないようだ。

少しの沈黙の後、それまでうつむいていた貴美子が口をあける。

「……あの化け物……まるでホラー映画なんかに出てくるゾンビだわ」

崩れない暗く堅い表情。

やはりまだシヨックから立ち直れずにいるのだろうか、貴美子の口調は

予想以上に重たい。

「ゾンビだって？へっ、悪い冗談だぜ。じゃあなにかい？これは映画の撮影か何かで、俺達はさしずめ追い詰められる出演者ってところだよ」

飛鳥が嫌なものをあざ笑うような表情で貴美子を見る。

「くだらない事を言っていないで、これからどうするか考える」
恵が作業台にある引き出しを調べている。
四段目の引き出しが開かない。

どうやら鍵がかかっているようだ。

「……うう……こ、これを」

ソファーに横になっていた栗木が再度うめき声をあげながらポケット

トから

小型のキーを取り出す。

「引き出しの鍵か・・・開けてみるか」

恵が作業台の四段目の引き出しの鍵穴にキーを差し込んでみる。

ガチャ

「これは・・・？」

引き出しを開けると長方形のケースが二個と紙切れが2枚あった。

ケースには【HK G3】、【HK MP5】と書いてある。

ケースに鍵はかかっていない。

「・・・HK・・・MP5・・・銃の名前だ」

五郎が立ち上がり、ケースを恵からもらい

簡易テーブルの上に置いて開けてみる。

中には精巧な作りの銃が入っていた。

「これ・・・使っ・・・て・・・俺・・・を・・・くれ・・・そこ・・・
テーブル・・・スイツ・・・チ・・・を・・・うごか・・・し・・・て・・・
」

ドカツと大きな音がソファアあたりから聞こえる。

栗木が言葉を最後まで言い切らないうちに意識を失ったのだろうか
首をソファアにべたつとつけ、沈黙してしまった。

「栗木さん?!・・・気絶してしまったようだわ」

とつさに綾香が声をかけるが栗木の返事は無い。

…カタッ

奥で道具の洗浄が終わったのだろうか、尾山がこちらに来て栗木を見る。

なにやら不思議そうな顔を浮かべている、栗木の容態のせいだろうか。

「む・・・？血が固まっている・・・それにこのかさぶた・・・この短時間に？」

自分のジュラルミンケースに道具をしまいケースを手にとると何か疑問でもあるのだろうか、やはり不思議そうな表情でつぶやいた。

「メモか・・・」

健二が引き出しに入っていたメモを手に取り読んでみる。

メモ一枚目

『依頼されたG3とMP5が、やっと完成した。』

古くからのお客だから仕方ないが、こういう改造はしたくないものだ。

弾までコピーしてくれといわれたが、この弾は日本では違法すぎる代物だ。

銃とあわせたときの貫通能力が高すぎる。これで何をやる気なのかは知らんが

日本のガンマニアもおかしくなったものだ。となりの居酒屋のオヤジといい

まったく近頃の奴には困ったものだ。病院から【血小板減少症】と言われた。血液中の血小板がたりないらしいが出血すると大変らしい、

気をつけよう。帰りにエンジェルキャットで医者指定された薬剤

を買ったが、
どうも風邪気味だったので風邪薬も一緒に買っておいた、
これで明日には動けるはずだ。』

どうやら日記のようだ……。

メモ二枚目

『隠れた通路の謎は、商売人らしいパスカルが解いた。
…財宝の部屋へと着いたはいいが、テーベとブルーが喧嘩をしだした。

…のぼらの咲いた階段の下へ降りると、持ってきたにもつがずっしりと肩へ食い込む。

…スイッチを動かすと地上への階段が続く扉が現れた。』

謎の文章だ……小説の1ページであろうか？

「ふうん。このケースの中身かな」

メモを覗き見していた智弘がケースに目をやる。

中身が気になっっているらしく、目は少し横のケースへチラチラと動いている。

「とにかくあけてみよーぜ！そらっ」

飛鳥が勢いよくケースを開けるとそこにはメモにかいてあった銃器がケースの衝撃吸収剤に囲われて入っていた。

銃の横には弾倉であろうものが二本置いてある。

「へへっかつこいいだろ！な？な？」

飛鳥が銃をケースから出し、壁に向かって構えている。

どうやら映画か何かで見たアクション俳優のかつこいいポーズをとっているようだが、飛鳥がやるとどう見てもはしゃぐ子供にしか見えない。

「まるで玩具の兵隊だな」

恵が冷やかな目で飛鳥に皮肉めいた言葉を言い放つ。

「へっ、なんとでもいいやがれっ」

飛鳥はまったく気にして無いようにポーズを続けていた。

その次の瞬間、ソファーに横になっていた栗木が起き上がった。

「意識が戻りましたか？」

綾香が栗木に近寄る、だが栗木は答えない。

まだ調子が悪いのだろうか、下にうつむいて何か口をモゴモゴしている。

「……ア”……アア”ア”！！！！」

ドンッ！

栗木がうめき声を上げながら綾香を手で払い、異様な表情でソファ
ーから立ち上がった。

シナリオ【慟哭】 - 6 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【慟哭】 - 6

- P M 9時51分 ガンショップ【千手】 オーナー室

「きゃあっ！」

奇妙なうめき声を上げながら栗木が起き上がり

それまで容態を見ていた綾香の肩に触れると

そのまま物凄い力で綾香はバリケードのあるドアの床へ
体ごと吹っ飛ばされた！

「大丈夫か?!」

智弘と健二がお互いに声を揃えて綾香のほうへ駆け寄る。

ドタドタと音を立てて走る二人の横にはソファァーから立とうとして
いる

栗木の姿が横目で見えた。

「おい！貴様、なにをする！」

栗木の胸倉を掴もうと手を伸ばす恵。

店内中に響き渡るような恵の怒号が、さっきまで銃を構えて
ナルシズムの境地に至っていた飛鳥の耳に入ってきた。

ソファァーから完全に立った栗木の胸倉を恵が掴む。

栗木は下をうつむいている。

「どうしたってんだい・・・おい！」
飛鳥が銃を肩からぶら下げながら、さっきまで倒れていた栗木の襟を掴む恵を見て少し驚いた表情で言い放つ。

「こいつが起き上がったらいきなり、あの子を吹っ飛ばしたのよ！」
パイプ椅子に座っていた貴美子が立ち上がり栗木に指を指し言い放つ。

立った勢いで、パイプ椅子が倒れ、後ろの銃器のパーツが何かの部品にあたり
オーナー室にプラスチック音が響く。

「おい、なんとか言えよ。おい！」
恵が、再度栗木に詰め寄る。

しかし恵は言い放ちながら、疑問にぶつかっていた。
何故かおかしい、& amp; # 2 5 6 8 1 ; んでいる手に当たっている栗木の肉体が
やけに冷たい・・・。これはまるで死体・・・。

「・・・ニツ・・・」
栗木がスウィツと手を上げながら、うめき声ともつかない声をあげる。

「・・・はなれる」
尾山が少し口に空気を含んで、しっかり聞こえるように小声で恵に言う。

「なんだと・・・？」
まだ疑問と怒りが心の中で入り乱れ続けている恵が
栗木の胸倉を& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; みながらゆっくりと尾山の
声のほうへ振り返る。

「ソイツはもう手遅れだ・・・はなれるーっ！！！」

尾山の声が部屋中に響くと、ふつと後ろを向く恵に
栗木の手が、恵の手を人のそれを超えた力で強く握り締める。

「くっ、なにをする！」
握られた栗木の手の冷たさに少し恐怖を覚え、
すぐさま手を解こうとするが、さっきまで倒れていた怪我人とは思
えない
ほどの力が、恵の手を捕らえて離さない。

「おい、その手を離せ！」
飛鳥が栗木に近づいて栗木の片方の腕を掴むと
ブーン！ドーン！バキッ！

次の瞬間飛鳥は作業台のほうへ吹き飛ばされていた。

物凄い音が部屋中に響く。

「いつてえ・・・くそっ、なんなんだよ」

幸い怪我は負ってないようだ。どうやら吹っ飛ばされた拍子に窓ガラスに張ってあったベニヤ板がクッション代わりになったらしいベニヤ板が真つ二つに割れて外のバックライトの光りが差し込んでくる。

「は、はなせ！」

恵が再度必死に強く握られた手を振りほどこうとするが栗木はうんともすんとも言わない。

「うづう・・・二・・・ク・・・ヲ・・・」

うつむいていた栗木の顔が、ゆっくりと電灯と窓から入るバックライトに照らされて鮮明になっていく。

「うわああ！」

思わず『栗木であつたであろう顔』に声を上げる恵。

その目は光りを失い、まるで白目をむいたような縮小した瞳孔。色黒で健康的な肌色を保っていた肌は、緑色に変色し腐食したようにポタポタとその肌であろう物体を床にたらしめている。

「ニク・・・ア”ア”ア”！」

ゆっくりと口を開く栗木であつたモノ。
開くと同時にだらしなく唾液がボタボタと床に落ちる。
その口からは嫌悪感すら覚える腐臭と
まるで空腹時に食事を目の前にした犬のような
獰猛な牙とも思える歯をむき出しにしている。

口から出される腐臭と目の前の恐怖の光景に嘔吐の感覚を覚える
恵の目は恐怖の色に染まっている。
恵の唇は震え、塗られた薄いピンクのルージュの色は
見る見るうちに血色を失っていくように青くなる。

「おい！誰か助ける！」
作業台から飛鳥が大声を上げる。

ガンッ！

それと同時に今まで恐怖に怯いていた貴美子が
さつき拾った玩具の突撃銃をバレルの部分 forcefully 強く握り締め
化け物に近づぐと思いつきグリップの部分をぶつけた。

「このおおおおお！！」
目の前に起こる恐怖に歪んだ表情を見せる飛鳥に対して
必死に恐怖を押し殺そうとする貴美子の表情は必死である。

ガンッ！ガンッ！ガンッ！

「このっ倒れなさいよ!」

2、3度、栗木の後頭部をなぐりつけると

栗木であったものは少しゆらゆらとよろめいたが

恵を& amp; ; # 2 5 6 8 1 ; ; んでいる手はまだ強い力で押さえつけられている。

何度か殴打していると、当たっているグリップの部分が歪み始めた。

ガンッ！ガンッ！パキッ

「倒れなさいよ!」

グリップ部分が栗木の腐った肉体を抉りどうやら骨の部分に当たったらしく

耐久度を越えて、強化プラスチックのグリップに亀裂が入ったようだ。

ガンッ！バキッ！ガシャーン！

「うおっ?!」

余りに勢いがつきすぎて、持っていたバレルの部分が

すっば抜けて、飛鳥頭上を通過しベニヤ板のある窓のほうへ飛び板をつきぬけ窓にあたり、ガラスが壊れたようだ。

飛鳥の付近にまでガラスの破片がパラパラと落ちている。

「ア”ア”ア”!!!!!!」

咆哮をあげる栗木であった化け物が、貴美子の一撃などお構いなしに恵の手を払い、恵の肩を& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; むとノド元に顔を近づけ、ギラギラしたその牙を突き立てる！

「・・・体を横に倒して！」

それまで黙っていた五郎が大声を上げる。手にはホルスターから取り出した

ニューナンプが構えられていた。

とっさにその声に気づき体を横に倒した恵。

恵が体を横にすると丁度化け物の口と頭が見えた。

「ッ！」

ドオン！ドオン！

「ギヤアアアア！！！！！」

次の瞬間、銃声と共に化け物の口と頭のご真ん中に10円玉ほどの穴があく！

化け物が咆哮を上げよるめくと、恵は簡易テーブルの方へとっさに逃げる！

ドオン！

「・・・終わりだ！」

化け物の全身が見えると、さらに一発打ち込む五郎。正確な射撃は化け物の胸に当たり、化け物はよろめきながらバリケード付近の壁へ血を撒き散らしながら倒れる。

栗木であった化け物は完全に沈黙し、おびたしい血を床に流し再び深い眠りについたのであった。

「助かったぞ警官・・・いや五郎・・・とか言ったか」

いつも強気な恵らしくもない調子で、そっぽを向きながら礼を言い貴美子の方へ向かう。

「貴美子、お前にも一応礼を言っておくぞ」

柱によっかかりながら、いまだ顔に余裕の現れない貴美子の肩を
& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; み、力をほぐすようにもむ。

「あ、あんな化け物。ホラー映画で何度も見てるから平気よ！」

必死に強張った顔を解こうと、笑顔を作ろうとするが体全体が震えて、笑顔にもまだ余裕が生まれない。

「助けてもらったのにその態度かよ？しかしあんたの銃の腕には驚

いたぜ！」

飛鳥が工作台から立ち上がり、そっけない態度で応対する恵に対して少し皮肉ぶりながら、安堵の表情を浮かべ五郎に話しかけてくる。

「・・・昔からよく・・・やってみましたから」

少し表情の暗い五郎。化け物は倒せたのに何故だろう。うっすらと顔には悲壮の表情さえ見える。

「まさか化け物に・・・なってしまうとはな」

尾山が栗木の近くにより、イロイロと調べている。

「このままココから脱出できませんよ、どうしましょう」

智弘が貴美子のほうへ歩きながら、全員に問いかける。

たしかに、外の化け物がいつ中へ入ってくるかわからない、

地下通路の電子ロックドアだっていつ破られるか・・・

ここが安全かというところではないのだ。

「ここで待っててもはじまらねえ、思い切って道路へ出てみねえか？」

飛鳥がふと思いついた案を言ってみる。

たしかにここで待っていても、いつか化け物に襲われてしまうのだ。思い切って道路に出て車でも拾えればめっけものだ。

「けど、この店が化け物に囲まれていたら・・・リスクが高すぎませんか」

健二に肩を借りていた、綾香が発言する。

「・・・もう銃の弾も残ってないしな」

弾倉が空になったニューナンブを見つめて、そのままホルスターへしまっ五郎。

顔は余り明るくない。

「おい・・・これは」

尾山が栗木の死体から何かを見つけたようだ。

「なんですか？」

健二が尾山の近くに駆け寄る。

「コレなんだが・・・」

尾山が栗木のポケットから何かを取り出し、手に持っているものを健二に見せた。

【自動車のキー】と【ブラックライト】のようだ。

「ブラックライト・・・まさか」

ブラックライトとは肉眼では見えない特殊な蛍光塗料を塗りそれを映し出すことのできる装置だ。

健二が何かひらめいたらしく、ふと簡易テーブルのほうを見るとベニヤ板を打ち付けたのである。う金槌とクギそして蛍光ペンがおちていた。

「・・・俺の予想が正しければ・・・」

簡易テーブルの上にある蛍光ペンを手に取ると
さっき拾ったメモの一枚に字を書いて蛍光灯の当たらない暗い場所
に行き

ブラックライトを当ててみる。

ブラックライトを当てると、さっき書いた字が浮き上がってくる。

「やっぱりだ！」

健二の声が部屋中に響き渡る。

なんだなんだと皆が集まると、健二は息を大きく吸い込み
淡々と説明していく。

「このメモ。実は、この蛍光ペンで書いたものなんだ」
メモを見せ、ブラックライトを当てている健二に
少し疑問に思ったのか智弘が声を上げる。

「でもブラックライトに映る文字って、たしか肉眼で確認できない
んじゃない」

たしかにメモの文字は黒いサインペンで書いてあって
全員の肉眼で確認できる。

「最近の蛍光塗料には優秀なのがあつてね。この塗料は、サインペ
ンと同じ色を出せてブラックライトに照らすと、普通のサインペン
で書いたところは消えて、塗料を塗ったそこだけ光るように細工さ
れてるんだ」

健二はメモの二枚目を取り出し皆に見せる。

メモ二枚目

『…隠れた通路の謎は、商売人らしいパスカルが解いた。
…財宝の部屋へと着いたはいいが、ターベとブルーが喧嘩を
し
た。

…のぼらの咲いた階段の下へ降りると、持ってきたにもつがずつし
りと肩へ食い込む。

…スイッチを動かすと地上への階段が続く扉が現れた。』

次にブラックライトのスイッチを入れ、照らしてみる。

『…隠し

部屋へ は、テーブル

の 下

…スイッチを動かすと地上への階段が続く扉が現れた。』

「テーブルの下にスイッチ!？」

早速、恵が簡易テーブルの下に手を伸ばし手探りで触ってみる。

カチッ!

「あ、あった!」

恵が声を上げると同時に、スイッチを押してみる。

ズズズ・・・ドオン・・・

簡易テーブルが変形し、隣の壁に収納されていく。

「あれはドアノブじゃねえか！」

壁の色と同化して今まで見えなかったドアノブが簡易テーブルをどかした

今ははつきりと見える。どうやら隠し部屋への入り口らしい。

「こんなもんがあったなんて・・・」

五郎が栗木の死体を少し横目で見ながら言う。

「とにかく中へ入ろうぜ！」

ガシャン！！

飛鳥がドアを開けようとした瞬間。さっき割れた窓ガラスから何かが部屋の中へ飛び込んできた。

・・・化け物だ！

「はやく行くんだ！」

そう恵が叫ぶと、飛鳥、健二、綾香、智弘、尾山、貴美子の六人が中に入る。

「さあ！あんたも早く！」

栗木の死体を見ていた五郎に激を飛ばす恵。

ハッと我に返った五郎がドアの中に駆け込んだ。

「ア”アア！！！」

「くっ！」

恵に襲い掛かろうとしていた化け物をすんでのところで避けてドアの中に入る恵。

鍵を閉めると、その場を逃げるように走った。

- P M 1 0 時 1 1 分 【千手】 隠し部屋

隠し部屋の中に入ると、部屋の中に黒塗りのワゴン車がぼつんと置いてあった。どうやらここはガレージのようだ。

「早く乗り込め！」

運転席に乗った尾山が最後に入ってきた恵に催促するように声をかける。エンジンは、すでにかかっているらしく車体がアイドリングで少しゆれている。

「わかっている！」

ワゴンのサイドドアに乗り込むと、尾山がハンドルの前にあるスイッチを押した。

「まったくんだたダ働きだよ！」

全員にそういつとガレージのシャッターがあがっていく。
後ろのドアからガンッガンッ！と大きな音が聞こえる。

「は、はやくしてくれよ！」

ワゴンの後部座席に座っていた飛鳥が尾山に催促をする。
まだシャッターは半分ほどしか開いていない。

ガン・・・ガン・・・

ガタン！

後ろのドアがついに開き、化け物が数匹ワゴンめがけて襲ってくる。

「おいドアが破られたぞ！！おっさん早くしろ！」

飛鳥の声がさらにでかくなる。言葉遣いもあらあらしい。

「シャッターが開いた！いくぞ！何かに捕まっている！」

尾山はシャッターが上がるのを見ると

アクセルを思いっきり踏んだ！

…ブウウウン！！！！ブウウウン！！キユウウ！！

道路に出て住宅街のほうへ車を向かわせる尾山。

「どうやら助かったみたいだぞ・・・おい？」

尾山が助手席に座っている五郎を見ると、少し不思議そうに五郎の顔を見た。

五郎は、うつすらと涙を浮かべていたのだった。

シナリオ【慟哭】 - 終了 -

シナリオ【変化】 - 1 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【変化】 - 1

- PM10時36分 S県 国道463号線

間一髪、ガンショップから脱出した8人は、黒いワゴン車に乗り道なりに続く繁華街を抜け広い国道に出ると疾走する。悲鳴とも奇声とも言える狂気の声が町中を包んでいた。

ビルの窓には火の手が見え、黒と白の煙が延々と空にのびている。路上に駐車してあった車は、正面のガラスが破壊され運転手の成れの果てであろう死体がボンネットにのし上げられまるで餌に群がるカラスのように、何人もの化け物【ゾンビ】によってその屍骸をついばまれている。

実際に感じたことの無い恐怖に襲われながら、今現実に見えている恐ろしい出来事を、自分の感情を押し殺すように少しずつ認知していく八人。

ワゴンという乗り物を得たことで、今までの緊張状態の連続で強張っていた顔が少しずつ緩み、表情に余裕ささえ伺える。

「そうか・・・あそこの店主とはそういう関係かね」
車のハンドルを中央に固定させながら、アクセルを吹かし運転席に座っている尾山が、今まで悲しそうな暗い表情を浮かべていた五郎に向けて二、三目をやる。

「・・・はい」

助手席でシートベルトを締めた五郎。手は驚くほど震え、未だ表情は暗い。自分が日ごろ懇意にしている人を撃った気持ちの整理がつかないのである。

助手席の足のほうには、千手で手に入れた銃器が入っているガンケースが転がっている。

「君のせいではない、むしろ君があの時撃ってなかったら、我々全員助からなかっただろう」

五郎をなだめるように、珍しく優しい言葉を吐く尾山。

尾山は、照れとも言える表情を浮かべ、年甲斐も無くやけにむず痒そうだった。

金のためには他人を落としいれるのもいとわなない生活を続けてきた尾山にとって

久しく忘れていた『他人を思いやる』という気持ちを思い出して少し己の台詞にニヤつきながら、ワゴンがカーブに差し掛かるところで

ハンドルをきりアクセルを踏む。

「そういえば、どこへ向かって走ってるの？」
貴美子が後部座席から尾山に向けて声をかける。

「ワシの病院だな。正確には近くに自衛隊の補給基地があつてな、そこから県外へ脱出しようと思うんだが・・・」

尾山が言い終わる前に後ろに座っていた健二が少し重たそうな口を開く。

「もし、他の街で同じような事件が起こっていたら県外に脱出しても・・・」

「さつきから考えていたんですが、駅の出来事や、居酒屋での出来事、あのガンシヨップの店主が化け物になった理由が、傷や血による接触感染や空気感染するウイルスだとすると……」

「我々にも……感染者がいるかもしれないということか」
健二の話に一番後ろの座席に座っていた恵が体を乗り出して話を割ってはいる。

「……その可能性は否めないですね」

「そうでない事を……信じたいところだがな……」

「まったく！揃いもそろって暗い顔しやがってよ！脱出経路が明らかになったんだから明るくいこうぜ？な？な？」
冷静な考えを健二や恵を見て、飛鳥が話の間を割って入るようにつた。

「物事はもつとポジティブに考えなきゃいけないぜ！」
二人の話に苛立ちを隠せない飛鳥であったが、たしかに彼の言うことも一理ある

車という移動手段を手に入れた今、事態はさつきまでより好転していると考えていい。

「まあ脱出できたら俺様が今回の事件をまとめて本にして、ベストセラーにして、テレビに出て一躍大スターの予定だからよろしくな！」
飛鳥がけたたましい声を張り上げると、ドカツと大きな音を立ててその場の椅子に体ごと座り込む。

「お前に文才があるかどうかは怪しいものだがな」

「いえてるいえてる」

恵が耳障りな飛鳥の声に苛立ちを覚え皮肉を込めて罵ると貴美子もその尻馬に乗って飛鳥を罵る。

「うるせーな！今に見てやがれ！」

飛鳥が二人にそういわれるとスネた子供のようにそっぽを向いて不貞寝するように座席を倒し、その場に寝てしまう。

「まあ、せめて気持ちだけは明るくいくかつ」

「ま・・・気持ちだけでもね」

「そうね・・・今はココから脱出するほうが優先だわ」

健二と智弘と綾香が、恵と貴美子に詰められてる飛鳥を見ながら少し笑みを浮かべる三人。

ぎこちなさは残るものの、少しずつ表情にも余裕が見て取れるほどになり

車内にはお互いについて他愛もない会話をし始める声が響く。

外の景色を見ると、いつの間にか都市部からは大分離れた郊外に來たらしい

街灯の数も少なくなり、窓の外には畑が点々と見え、民家が数軒見えた。

煌々と明るい光りを放つガソリンスタンドを過ぎると山道へと続く住宅地らしき場所が見えてくる。

住宅街に入ると、ポツンと光る小さな療養所が見える。

- P M 1 0 時 5 0 分 S 駅前大通り

駅前にはパトカーが十数台止まっており、そのパトランプの光りで暗闇で見えなかった化け物の屍骸や化け物に食われた警察官の死体が照らされる。

どうやら駅前交番から最後に送った無線が届き、警察車両が集まったようだ。

パトカーは、まるで何かから逃れるためのバリケードを築くように並べてある。

銃声と悲鳴と唸るようなうめき声が絶えず聞こえる。

ドオン！ドオン！パシユツ！

「ぶ、部長！東口A班からの連絡がとれません！」
無線機を持った警官が慌てて、銃を撃つ警官に話す。

ドオン！

「くっ・・・A班がやられたか、東口のB班はどうした？」

近づいてくる化け物の頭を銃で撃ち砕くと、パトカーのフロントガ

ラスに赤色の液体がばら撒かれる。
不快感を覚えるほどの異臭に耐えながら、
空になった弾倉に弾を補充してゆく警官。

「B班はけが人の回収が終わりしだい・・ぐわっ！」
無線機を持っていた男が化け物の牙にかかり
無数にのびる化け物の手に引き込まれ、血を流しながら悲鳴をあげる。

「くそっ！おい援護しろ！」

「は、はい！」

何人かの警官が引き込まれた警官を救うべく銃を撃ちながら突撃する。

ドオン！ドオン！ドンドン！グシャ！

飛び散る血液や体液が警官の制服にベタベタとだらしなくくっつく。
噛み付かれていた警官がその場に力なく倒れる。

「おい！巡查生きてるか！」

「・・・ううう・・・」

駆け寄る警官をよそに数人のゾンビの群れを掻き分け
何か巨大な人影のようなものが接近してくる。

「あ、あれは・・・？」

辺りを見張っていた警官が指を指すと、その影の全貌が明らかになる。

腕と足と胸部が異常に肥大化し、

内臓がむき出しの胸部からは何か長い鞭のようなものがシュルシユルとのびている。

化け物の肩には警察のマークが見える

「オ”オ”オ”・・・アアアア”！！

化け物が咆哮をあげると、その異様なさまに

それまで巡査を介抱していた警官は、その姿形に恐怖と共に嫌悪感を覚え

周りの警官に声を張り上げる。

「う、撃てーッ！」

ドオンドオン！ドオンドオン！

恐ろしい銃声と共に化け物に向けて数十発の弾が化け物の胸部頭部に当たる。

「ナ`・・・アアアア・・・ゼ！！！！！！」

まるで銃弾が利いていないかのように咆哮を上げ、警官たちのほうへ突進してくる化け物！

ズン！ズウン！

「グハツ！」

突撃してきた化け物のタツクルで空中に吹っ飛ぶ警官。

化け物がギリリと周りを見回すと、銃を構えた警官を見る。

「うわああ・・・！」

警官の前に化け物が立つと

肥大化した腕を思いっきり上に上げて、警官の頭めがけて思いっきり振り下ろした！

ズガンツ！グシャ！

まるでスイカが割れるように、その場に無残な残骸を撒き散らす警官だったモノ。

ドオン！

「ば、ばけものが・・・！」

化け物の頭部を狙って銃弾が飛ぶ！

「き、効いてないのか・・・うわあッ?！」

頭部に当たった弾を気にもせず撃った警官の体を腕でつかむとそのまま両腕でサバ折りするような形で警官を羽交い締めにする化け物。

すると胸部のシュルシュルと伸びている鞭のようなものがまるで鋭利なナイフのようにギリリと光る。

次の瞬間、警官の体に何本もの触手が襲い掛かり
まるで内部の血液を吸うかのように警官の体は見る見るうちに痩せ
細り
触手はドクドクと波打っている。

「ギヤアアアアア!!・・・アア・・・」
警官の悲鳴がそこらじゅうに響く。

ドサツ!

ミイラのように干からびた警官であったものが、その場に力なく横
たわる。

触手から血液がポタポタとこぼれ、その場に赤い点々を残していく。
化け物は次の獲物を見回すと、這いずりながら逃げようとしている
警官を発見する。

「・・・ウウ・・・た・・・たすけ・・・て」

その声を聞いた化け物がニヤリと笑うように口元をゆるめる。

ガンツガンツ!

「うわ・・・ああああ」

逃げ出そうとする警官に覆いかぶさるように化け物がかがむ。

シュルシュル・・・ブシュッ!!

「たすけ・・・て・・・く・・・ギャアアアアア!!」

化け物の胸部から触手が伸び、何度も警官の体を突き刺した!

ドクッ・・・ドクッ・・・

「ア”ア”ア”ア”!!!」

化け物の恐怖の鼓動が街に響く。

シナリオ【変化】 - 2 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【変化】 - 2

- PM 11時04分 尾山療養所

ワゴンは郊外の住宅街に入り、ポツンとライトの光る建物の前で停車する。

さっきまでの都会の喧騒が嘘のように静かな周辺に少し違和感を覚えながら

車内から降りる八人。

建物には少し薄汚れた木製の板がはめ込んである。

『尾山療養所』と書かれた表札が見える。

無言で建物の柵の南京錠を開ける尾山。

うっすらとライトに当たる尾山の白衣には今まで見えなかった血や何かで汚れた部分があるのがわかる。

柵を開け、少し周囲を警戒しながら進むと建物のドアの前で尾山が止まる。

ガチャツガチャツ

「……???. 鍵が開いている?」

怪訝そうな顔をして一言尾山がつばやくと、ドアノブを回転させ建物の中に入っていった。

「さあ私達も行くぞう」

恵と尾山を先頭に靴も脱がずに建物の中に入っていく八人だった。

- P M 1 1 時 0 6 分 院長室

廊下を少し歩き、診察室を通ると、太い墨字でプレートに院長室と書かれた

部屋へと入る。

尾山が中に入り、壁にあるスイッチをカチツと押すと

それまでの暗さが嘘であったように煌々しい光りを放つ蛍光灯がつく。

照らされた部屋には黒塗りのテーブルとソファ、それにテレビがあった。

黒塗りのテーブルにはカルテや意味不明の計算式が書かれたメモ書きが

山を作り散乱している。テーブルの奥には、よほど型の古いモノであろうか

黒くアナログな電話が置いてある。

「ここで少し待っていてくれい」

尾山がそういうと全員を中に入れて自分は診察室のほうへ行っただ。うだ。

ガチャン。

「何かつかえるものはないか、探すぞ」

ドアが閉まるとあたりを散策し始める恵。

「散らかってるわね、どういう神経の持ち主かしら」

綾香が部屋のいたるところの散らかりようを見て少しあきれたように腕組をする。

「俺の部屋もここまでひどくは無いやな？」
健二が少し綾香のほうを身ながら言う。

「まあ・・・同じくらいかな。何に使うのかわからない機材多いし」
「・・・ッ」

綾香にそういわれた健二は、少しショックだったのか
床に落ちている紙くずやゴミを掃除し始めた。

「ガラクタだらけだなあ、貴美子さんそっちはどうですか？」
智弘がガラス棚を調べていた貴美子に声をかける。

「本が多くてあんま使えるものはなさそうね、やっぱりお医者さんだからかな」

棚に隙間なく積んである本の合間をくまなく探す貴美子。

医学用本や製薬知識の本、およそ医者であるべき知識の書物が並べられていた。

貴美子が、とつた本を棚に戻そうとした瞬間、少し力が強すぎたのか
隣の本が勢いに負けて棚から転がり落ちていった

ガタガタガタンッ！

「だ、大丈夫ですか」

「ええ・・・大丈夫だけど・・・また散らかっちゃったね」
心配する智弘をよそに貴美子は、床に散らばった本を見て
尾山に怒られるかもという思いが脳裏をよぎった。

とりあえず今ある現状から目をそむけ、棚の中をまた調べる貴美子。

「これは・・・？」

貴美子はギュウギュウに本をつめられていたガラス棚の奥に

何かが挟まっているのを発見すると、少し力を入れて取り出そうとする。

バタバタバタッ

また何冊かの本が落ちるが、気にせず奥のものを取ろうとする貴美子。

一つのことをやると他のことが見えなくなってしまう貴美子らしい性格の現われだ。

「何か使えるいいものでもあったか？」

恵が机の引き出しを調べるのを止め、貴美子のほうへ近づいてくる。

「これは！？・・・いい物には違いないけど・・・」

貴美子が棚の奥から取り出したのは尾山秘蔵の酒瓶二本だった。

ラベルには【I・Wハーパー・101ブルーフ】と【玫瑰露酒】と書いてある。

「こっちはI Wハーパーゴールドメダルっていうのをより熟成させたバーボン、パワーがあつて美味しいのよね！あとは中国酒のようだけど・・・あまり名前を聞かないお酒ね」

酒の強い貴美子は、強いだけではなく知識も豊富である。

淡々と力強く説明する貴美子に智弘は聞き入っているが

恵は少しあきれた表情で再び机の引き出しを調べ始めた。

貴美子は酒を持っていくようだ、何かの役に立つかどうかは別のよ
うだが・・・。

「・・・」

五郎はその光景を見ながら何も言わずに柱に横たわっている。

「しかし高そうなソファーだな、どうれすわり心地は・・・と」
すわり心地の良さそうなソファーに飛鳥がドカッと座り、
まるで自分の家にいるようにソファーにあったテレビのリモコンを
とり

テレビをつける。

「・・・引き続きS県S市で起きている暴動事件の情報です」
テレビをつけるとアナウンサーが淡々とニュースを読んでいる。
まだ電気やテレビは正常に動くようだ。

「S県S市・・・俺達がさっきまで居たところじゃねえか！」
飛鳥がニュースの字幕スクリーンを見て、少し驚いたようにテレビ画
面を
食い入るように見つめる。

するとニュースを聞いていた恵が大声で部屋全体に聞こえるように
言う。

「おい！テレビの音量を上げろ！」

「お、おっ」

恵に指図されるた飛鳥がとっさにリモコンを手に取り

ポリウム調整ボタンを押す。

テレビから流れる音がしだいに大きくなっていく。

「八時ごろから続くS市での暴動は、さらに過激化し、警察の車両や人員にも

被害が出ている模様です。付近の住民の皆さんは十分注意して、外出を控えるようにしてください。なお現場に局スタッフが向かっておりましたが、自衛隊の検問によりS県全体が通行不可能となっていたため現場の映像は確認できておりません」

「・・・暴動？へっ、あんな化け物が徘徊する街が暴動とでもいうのかよ！」

テレビの電源を消すと、少し怒気をはらんだ声で飛鳥が言い放つ。

「自衛隊が検問？どういうことだ・・・」
それまで黙っていた五郎が飛鳥の怒気に反応するかのようには声をだす。

「良くテレビのニュースとかで国からの指示で情報を必要以上に流さないようにする・・・緘口令でしたっけ？そういうのがあると聞きました」

「だとすればとんだ欺瞞だな。しかし自衛隊が動いているとなると・・・やはり国が一枚絡んでそうだな」

綾香の質問に答えるように恵が疑問を抱きながら言う。

「とんでもないことに巻き込まれてるようだ・・・」

健二が重苦しい口調で言うその後ろのドアがガチャッと開く。

尾山が目的のものを手に入れたらしく、さっきまでつけていた白衣と違う

真新しい白衣をつけジュラルミンケースと共に赤いファイルを持っている。

白衣のポケットには何か入っているようだ。少し膨らんでいる。

「さあ、急ごうか」

尾山の合図に従って院長室を出た七人は診察室のドアを開ける。

「ああ、そうだこれを・・・」

診察室に入ると尾山が思い出したように綾香に向かって何かを差し出す。

「浅い傷なら大体塞げるから救急箱にいれて持って行くといい」
白衣から小さなスプレーを四本差し出す尾山。

「はい、じゃあ入れておきますね」

綾香は【救急スプレー】を手に入れた。

救急箱にスプレーをしまうとさつさとドアを開け、診察室に続く廊下を通り、玄関のドアを開け外に止めてあるワゴンに乗り込む八人。

- P M 1 1 時 2 2 分 尾山療養所前

「・・・しかし妙だな、自衛隊の検問とは・・・」

後部座席に座った恵が再度疑問を覚えつつ、車が発進するのを待つ。

「まあ考えるのは後からでもできるだろ、とにかく脱出が先だぜ・
フワァ」

飛鳥が楽天的な台詞を言いながらあくびをすると、少しシートを後ろに倒す。

どうやら少し眠くなったらしい、目をつぶっている。

「では自衛隊の補給基地に行くぞ」

キーを回転し、エンジンをかける尾山。

ワゴンは軽快なエンジン音をたてて、不気味な静けさの住宅地を抜けていった。

5分後

住宅街を抜け、また暗く寂しい背景が広がる道路に出るワゴン。

車内でピーピーという電子音が鳴る。

少しずつ大きく聞こえる電子音と共に尾山が焦燥感たっぷりの表情を浮かべた。

ワゴン車のスピードがだんだん落ちてくる。

エンジンの音に少し違和感を感じる。

「・・・どうかしたんですか？」

助手席に座っていた五郎が違和感を感じるエンジン音を聞き取って尾山にゆっくりと尋ねる。

ガンツ！！

「くそっ！……ガス欠だ！」

ハンドルを思いっきり叩く音と、尾山の怒号が車内に響いた。

シナリオ【変化】 - 3 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【変化】 - 3

- P M 1 1 時 2 8 分 山道前道路

山道前住宅地を抜けたところでワゴン車は急に減速し、
ついには道路の端に止まってしまった。

乗車している八人全員に脱出できないという結論が浮かび
生きるということに絶望を与え、再びあの不快感にも似た恐怖が脳
裏をよぎる。

「くっ、本格的にダメだ！このままじゃエンジンもかからんぞ・・・」

「苛立つ尾山はもう一度ハンドルを叩くと、ハンドルにそのまま
少しもたれかかるように顔をしずめる。」

「おいおいどうするんだよ・・・このまま俺達化け物の餌にされちま
うのかよ！まったくツイてないぜ・・・」
さつきまで寝ていた飛鳥が、尾山がハンドルを叩いた瞬間に目覚め
目の前で起こっている不運に呆れたような落胆したような感じで肩
をがっくりと落としている。

「・・・何か予備のものを使って車を動かさせませんか」
助手席にいた五郎が運転席でうつむいている尾山に向かって話す。

「さつき調べたが、バッテリーや予備のガソリンは積んでないよう
だぞ」

後部座席から恵の声が聞こえる。

「脱出は絶望的だね・・・一難さつてなんとやらだわ・・・」
綾香が少し自嘲気味に悲観的な台詞を口にする。
曇った表情は焦燥感に変わり、余裕の表情を浮かべた健二にも移った。

「歩いて基地に行くには遠すぎるし・・・しかも危険すぎる」
車にあったS県の地図を見ながら、健二は焦燥感を募らせていく。

「アルコールが燃料とかになるって聞いたことあるけど、コレ使えないかな」
貴美子がバッグから先ほど尾山の病院から持ってきたバーボンを取り出すと
皆に見せる。

「車のこと何にも知らないんだな、そんなもんじゃエンジンが空回りするだけだぜ」
飛鳥が嘲笑するように貴美子を見下した態度と口調で話す。

「・・・じゃあどうすればいいのよ」
案を否定され、貴美子は少しふくれるようなそぶりで言い返す。

「近くの民家とかにガソリン置いてないのかな？」
しばしの沈黙が続く中、健二の後ろの席に居た智弘が案を出す。
たしかに道路の周りには民家があり、畑を耕すための耕運機などで使う
ガソリンがあるかもしれない。

「たしかにあるかも知れんが、ここは確実性を求めたい」
恵がそういうと、焦燥感に包まれる周りの表情とは違い、余裕の笑みを浮かべる。

「ここに来るまでにあつた物を一応メモしておいたんだが、まさかこんなときに役に立つとはな」

スーツの胸ポケットから白いメモ書きを取り出すと、表紙の一枚目をペラつとめくる。皆が会話している間にメモをとっていた恵に、その場の全員が尊敬とも感謝とも取れる眼差しを浴びせる。

「メモによると・・・ここから400mくらい先にガソリンスタンドがあつたはずだ」

恵は自信満々の表情を浮かべ、少し得意げな口調で皆に言う。

「・・・(うわっ細かッ!)」

飛鳥が恵の持つているメモ書きをちらつと見ると、簡略化された道路と建物がびっしりと描いてあつた。

「わーい！これでガソリンが手に入るわね！やったね！」

貴美子が喜びの余り隣に座っていた智弘の手をつかんでガッツポーズをとる。

「あ、憧れの貴美子さんの手が！手が！・・・死んでもいい顔を真っ赤にして興奮してその場に倒れる智弘。」

「ちよ、ちよつと大丈夫？」

貴美子が心配して智弘の体を起こす。

まだ智弘の顔は赤い。

「へっ、おいおい。まったく、まだ手に入れてないのにいい気なもんだぜ」

飛鳥がにやけながら卒倒している智弘を見て喋る。

「・・・これで、いけそうですね」
助手席の五郎の顔も緩み、車内は和やかなムードに包まれた。

恵の意外な一面を見た驚きと、脱出できる可能性の幅が増えたことに
八人の顔と空気は少しずつではあるが温和になっていく。

「では早速行こうか・・・のう」
さつきまで沈んでいた尾山がドアを開け、運転席を降りる。

「そうだ、荷物は必要最小限にしておけよ。ガソリンを運ぶのは最
終的には人間の手だからな」
恵が後ろのドアを開け外へと出る。

「・・・これは一応もっていこう」
助手席から降りようとしていた五郎はガンケースを持ち出した。

「じゃあ俺も・・・つと！」
ガンケースを持つと後ろのドアから出てゆく飛鳥。

「何もなければいいけれど・・・」
綾香が心配そうな顔で救急箱を持ち、外へ出る。

「いつまで赤い顔してるんだ？いくぞ、智弘」
健二が智弘を引っ張って車外へ出る。

「皆まつてよー」
一際重そうなバッグを持って外へと出る貴美子。
どう考えても酒瓶二本分が見た目にも実際持っても重たい。

街灯の少ない暗がりの道路を進む八人。
人影や自動車のライトはまったく無く、その静けさは不気味だ。
季節の変わり目に良く吹く風が少し肌寒く感じる夜道であった。

- P M 11時47分 ガソリンスタンド前

暗い夜道に煌々と光るガソリンスタンド用の大型のライトが
不気味なほど車道を照らし、歩いてくる八人の恐怖感を煽る。
ガソリンスタンドには、無機質な機材や洗車用の機材が置かれてい
る。
化け物の影は見えないようだ。

「車から見たときはわからなかったが…ガソリンスタンドにしては
妙に大きいな」

恵が大きさに疑問を抱きつつ、スタンドの中へと入ってゆく。

「おい…ここは…」

「何か気になることでも？」

飛鳥が、眉間にシワをよせてガソリンスタンドの名前を見ていたので
疑問に思った健二が飛鳥に質問する。

「いや…。なんでもないぜ」

飛鳥は何かを言いたそうであったが、足早に恵と共に機材を調べに
いった。

「どう健二？何かあった？」

「別に何も無いけど・飛鳥さんの気に触ったのかな？」

健二は訝しそうな顔をしつつ綾香と共に洗車機の方へと向かう。

「どつやら鍵はかかってないようだが・中に誰かおるのかな？」

「・・・行ってみますか」

尾山と五郎はガソリンスタンドの室内のドアを開け、中に入っていた。

- P M 1 1 時 5 3 分 ガソリンスタンド 室内支払い所

支払い所と書かれた薄汚れたプレートが青と白のカウンターにポツンと置いてある。部屋の奥には自販機が置いてあり、奥の部屋へと繋がるドアと2Fへあがるための階段が続いている。

観賞用植物がいくつも置いてあるが、どれもなぜか枯れている。

「・・・ガソリンは置いてなさそうですね」

「ポリタンクくらいあると思ったんだがのう」

階段近くまで移動して散策してみるが、何も無い。

まるで今まで閉まっていたかのように店は綺麗に片付けられている。

「くっ、奥のドアは鍵がかかって開かないな」

「・・・上に行くしかないですかね」

奥のドアを調べていた尾山が、階段近くにあった五郎に近寄ってくる。

その時

カツツカツツ・・・

金属の階段の上から、まるで杖を地面に突くような音がした。

シナリオ【変化】 - 4 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【変化】 - 4

- P M 11時55分 ガソリンスタンド室内 料金支払所

2Fへと上る金属の階段の上からカツカツと革靴が床を叩くような足音がする。

「・・・化け物か!？」

とっさにガンケースをその場に下ろし、銃を組み立てだす五郎。MP5と書かれた銃は、カチャカチャと音をたてながら組み立てられあっという間に黒く無機質な美しいフォルムをさらしだす。

その組み立ての素早さは、まるで何度も組み立てたことがあるような感さえある。

カチャン!

弾倉が小気味いい設置音を立てながらセットされ、

銃用の電動バッテリーを銃の後部に設置すると、電動銃が完成する。セーフティレバーを解除すると、カスタマイズされた銃のサーチライトが

点灯し、すぐに撃てる状況になる。

カチャ!

階段の中央から上を狙いますようにライトを当てる五郎。冷や汗であろうか。額には少量の水滴がついている。

カツン・・・カツン・・・

足音が次第に近づき、階段の中腹くらいに革靴を履いた足が見える。

「おい！誰かそこにいるのか？」

尾山が緊張感に痺れをきらして言う。

カツン・・・カツンカツン！

階段から降りる足音は速くなり、五郎は構えた銃を強く握り締め降りてくる人影らしきものへサーチライトを当てる。

黒いスーツを着た男が見えた。

「まで！撃つんじゃない！」

男はこちらに手を上げて、階段を降りてくる。

カチャッ

「・・・どうやら化け物じゃないみたいだ」

銃口を男から下げ、再びセーフティレバーをロックする。

「我々以外に生きている者がおるとは・・・な」
階段から降りてくる男を少し目を細めながら確認すると、
尾山の張り詰めた顔が少しほぐれる。

「ここにも生存者が居たか！よかった！」

茶髪の長身で少し顔に特徴がある。青い目はハーフであろうか？
黒いスーツが良く似合う男が興奮気味に尾山と五郎を見て言う。
たしかに何もかも『変わってしまった』この現実では、生存者に会
えることは

この上も無い安心感を得れる喜びではあるのだが
何か、少し、男の喜びが変だと思った尾山は質問を投げかける。

「おいあんた、何者じゃ」

まるで信用していないかのような尾山の目を見て男は一冊の手帳を
見せる。

「これは・・・」

五郎は警察手帳と書かれたその青黒く見慣れた手帳に懐かしさすら
感じた。

それは彼も同じものを持っている『仲間』だったからだ。

『刑事課 ガイアユム 賀居歩』と書かれた文字が

写真付きで手帳には載っていた。

「どうだ？これで信用してくれるか？」

写真を食い入るように見つめている二人に向かって賀居が問いかけ
る。

「・・・疑ってすみません。しかし、まさか同職の人とめぐり合えるとは・・・」

「なーに当然さ。こんな非常識な事が起きているんだからね
刑事にしては豪く気さくな口調で語りかけてくる。」

ガチャ

その時、店内と外を繋ぐドアが開く。
ドアの外からは智弘と貴美子が中へ入ってきた。

「尾山さーん、ガソリン見つかりましたか？」

「ポリタンクなら見つけたんですが・・・」
貴美子と智弘は一つずつ【ポリタンク】を手に持っている。

「でかしたな。これでガソリンさえあれば車が動くぞ」
尾山が二人が持ってきたポリタンクを見て安心したようにニヤリと笑う。

室内に入り、貴美子と智弘にも賀居を紹介する尾山。

「・・・そう言えばさっき、ここにも生存者がと言っていましたか？
五郎が思い出したように賀居に質問する。」

「ああ。君たち以外にも生存者がいるんだ」
賀居は階段の上を指差しす。

「本当なのか？」

尾山がまた疑問の顔を浮かべる。

「疑い深いお医者さんだなあ、まあとにかく上の休憩室へ行けばわかるさ」

カツンツカツンツ

再び金属の階段を上り始める賀居と尾山達だった。

- AM0時02分 ガソリンスタンド 外

綾香が携帯電話の時計に目をやる。

日付は新しい今日が始まったことを知らせるのだが、まだあの時の恐怖は鮮明に覚えて頭に焼き付いている。

携帯のデジタル時計で見る数字を見る限り、あの居酒屋での一件から数時間しかたっていないのだが

綾香には長い長い時間をさまよっていたように感じる。

「とても・・・長い夜になりそうね・・・」

ポツンとつぶやく綾香に、洗車機を調べていた健二は心配そうに綾香を見る。

「どうかしたか？」

「なんでもないわ、少し感傷に浸りたかっただけよ。」

ガソリンスタンドの煌々しいライトが綾香を照らす。

健二は、なんとなく違和感を感じていたが、まあこんなことが起きているから

仕方ないと自分に言い聞かせるように黙々と洗車機の周りを調べる。

ガソリン補給機材前

恵と飛鳥が、スタンドにあるホースが繋がれたガソリン補給機材を調べている。

やけに使い込んでいる機材ではあるが、まだ十分使えそうだ。

「こりゃ中身が空だな・・・」

機材に電気は通っているようだが、モニターにはEmptyというランプが

点灯している。どうやら肝心のガソリンが入っていないらしい。

今までの飛鳥とは打って変わって熱が入ったように懸命に機材を動かそうと

周辺をくまなく見ていた飛鳥だが、さすがにあきらめたらしい。

「随分熱心だな、そういうのをいじるの好きなのか？」

飛鳥の行動に少し違和感を覚えた恵が、飛鳥に他愛も無い質問をする。

「好きって程でもねえけどな・・・」

いつも大きな飛鳥の声が、今は少し気弱に感じる。

「何かワケありそうだな」

恵の声に対して、深く息を吸い込み淡々と語り始める飛鳥。

「俺・・・昔、ここでバイトしててさ。ここの人たち気のない連中ばかりでさ、オーナーは爬虫類好きの変な人でさ、休憩室の屋根裏

にトカゲを飼ってるなんて噂もあつたくらいだぜ。そんな事無いのにな、笑えるだろ。まあここで、車のことも教えてもらったし、整備作業も一通り習ってさ。免許取ってから益々車の事が好きになつて本格的に整備士の免許とろうとしてたんだ・・・」

話しながら少しずつ暗くなる飛鳥の表情。

「そこで・・・ヘマやっちゃまってよ。給油用のガソリンを引火させちゃまって、お客の車を燃やしちゃったんだ。その客が運悪く政治家とかでさ、スタンドは閉鎖、オーナーは責任感じて自殺しちゃうし、仲良かった連中は散り散りだ・・・俺にとってここは、二度と来ちゃいけない場所だったんだよ」

「二度と来ちゃ・・・いけなかつたんだ・・・よな・・・」

だんだん表情を曇らせる飛鳥に、恵が口を開く。

「過去は過去、今は今だ。ここに来たことだつて今を生きるためだろ？落ち込んでいる暇なんてないはずじゃないのか？今の足かせでしかない過去なんてクズカゴに捨ててしまえ。さあ、ベラベラ喋るのはおしまいだ。さっさと目的の物を探すぞ」

らしくない彼女の精一杯の心遣いの言葉に、飛鳥の表情は緩み少し気恥ずかしそうに言い放つ。

「へっ、人が感傷に浸ってるのに相変わらずカワイくないやろうだ

ぜ・・・おい、こつちだよ」

目の周りを手で拭うと、飛鳥がその手をこまねいて恵を呼び寄せ。その先にはガソリンスタンドから独立した小さな建物が見える。

- AMO時13分 ガソリンスタンド内 2F休憩室

階段を上るとすわり心地の悪そうなパイプ椅子と白いテーブルが置いてある。薄汚れたガラス張りの窓がスタンド内を見渡せるように設置してある。

自販機が二台置いてあるが、商品はどれも売り切れだ。天井から下がっている蛍光灯は煌々と室内を照らす。

室内の隅にはホコリやゴミがたまっており、歩くごとに少量のホコリが舞い上がる。

奥のドアはどうやらトイレらしい、男子用と女子用一室ずつある。

「・・・で、何処に居るんだね。その生存者とやらは」
尾山が周りを見て少し怒張を込めた声を上げる。

「さっきまでここに居たのだが・・・おかしいなトイレにでもいるのか」
トイレのほうへ歩きだす賀居。

「・・・なんか変な匂いしない？」
貴美子が部屋のかすかな異臭に気づく。

この不快感と嫌悪感は何かに・・・そう何かに似ている。

「これは・・・血の匂い？」

智弘が貴美子に向かって言う。

「・・・！」

智弘の言葉に何か気づいたように再び銃を取り出し、構える五郎。その表情には余裕はない。

「こ・・・これはッ!?!？」

賀居が室内を歩くとトイレのほうから赤い色の水滴が流れてくる。

「ウワァ・・・アア・・・ギャアアアア！」

男子トイレの向こう側で人間の断末魔が聞こえた。

シナリオ【変化】 - 5 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【変化】 - 5

- AM0時15分 ガソリンスタンド2F 休憩室

男子トイレの前で断末魔の悲鳴が聞こえる。

トイレのドアの下からはおびただしい赤い血の色が煌々と照りつける室内の蛍光灯に映る。

色は光りに反射し、生きているものへ恐怖を煽る。

賀居がスーツの内ポケットから銃を取り出す。

シグザウエルP226。賀居がアメリカ研修の時から常に最前線で重宝してきた頼れる相棒だ。

弾倉には撃ちかけの11発の鉄鋼弾が搭載されている。

銃を構える賀居を尻目に、しばらくするとトイレの中が静かになる。

「俺が見てくる、全員そこにいるんだ！」

賀居が静かになったトイレのドアの近くへと歩き出す。

何度も潜り抜けた修羅場、難事件を解決するのはワケの違う任務。目の前で起きる恐ろしい現実に向面しながらも、

どこか余裕のある表情は、賀居の潜ってきた場面の凄惨さを伺わせる。

「・・・」

おびただしい血液の流れるトイレのドアノブの前に賀居が近づくと後ろの居た五郎は銃を再び構え、周辺に化け物がないか周囲をうかがう。

カチャン

ドアノブに賀居の手がかかる。ドアの下に広がるおびただしい血の川がさらに鮮明さを際立たせ、見るもの全てに恐怖を煽る。

ガチャン！

次の瞬間まるで閤を切って溢れる水のように物凄い勢いでドアを開け、トイレの内部に入るや否や即座に銃を構える賀居。

「?!」

トイレの中をくまなく見回す賀居。しかし『何も』いない。

断末魔の悲鳴をあげていた『生存者』すらないのだ。

トイレの中には四つの洋式、男子用の小便器が6つ並んでいた。床には大量の血液が流れ、壁や洗面台には血飛沫がドロドロと付着している。

「・・・む、これは」

床に撒かれた血液を目で追うと何かを引きずったような後がある。まるで力任せに運んだような血痕を追うと、洋式便所へと続いている。

目で追っていくと、洋式のドアが真っ二つに割れて破片がその場に無造作に散らばり、ドアノブが転がっている。

血は壁を伝い、天井へと続いている。

天井には人が三人は入れるであろう大きな穴が開き、そこから生々しい血がポタポタとこぼれている。

「まさか、この穴から他の部屋へ・・・？だとしたらヤバイ！」
賀居は銃を下ろし、体の向きを変えて反転するや否やトイレから走り出す

ここに居てはいけないという彼の本能と呼ぶべき賀居の刑事としての勘がそう告げていた。

「おいどうした！」
血相を変えて走って出てきた賀居を見るなり、尾山が声をかける。

「早くココから出るんだ！ここはヤバイ！」
さっきまでの余裕を見せていた表情とは違い賀居の顔は焦燥感に満ち溢れていた。

「走れ！早くここを出るんだ！」
賀居の言葉と共に階段へと走り出す尾山、五郎、智弘、貴美子の四人。

- AMO時21分 ガソリンスタンド1F 料金支払所

階段を降りる五人の足音がガタンガタンと激しい音を立てる。
無機質な金属音を叩く靴の音が違和感を感じるほど静か過ぎる室内中に伝わる。

「出たらとにかくこの建物から離れるんだ」
1Fに全員が降りると、賀居の声に従い再び走り出す。

ガタアン！ガタアン！

さっきまで鍵がかかっていた開かなかったドアが、まるで内側から恐ろしく強い力をかけられているかのように鈍い金属音を立てて前へ後ろへと振動している。

ガタガタンツ！！

ドアは今にも破られそうな勢いだ！

「はやく……早く外へ！」

賀居の押し殺すような声が全員の緊張感を余計に煽る。

「なんだっていうのよ！まったく」

貴美子が恐怖感と苛立ちから不満そうな声を上げながらも外へ出る。

「ま、待ってくださいよ」

智弘が続いて外へ出る。

「ガソリンも手に入れてないと言っに……」

尾山が誰にもわかるような不機嫌そうな顔を浮かべ外へのドアを開ける。

「……」

三人が出る中、五郎だけは銃を持って踏みとどまる賀居の後ろに立っていた。

ガタアン！ガチガチッ！

扉が鍵の抵抗を失いつつある、今にもこじ開けられそうだ。

「どうしたんだ！？早くしないか！」

「……自分もお手伝いします」

動かない五郎に対して声を張り上げる賀居、それに対して微動だにしない五郎。

「気持ち嬉しいが……君は警官だろ！彼らを守れるのは君だけなんだぞ！」

「……！」

銃を構えつつ、五郎に怒声とも思える言葉を投げかける賀居。

五郎は何かに貫かれたような衝撃を体に覚える。

自分は成り立てとは言え警官なのだ。守らねばならない人が居る限り守るといふ『責務と義務』『その気持ち』に間違いはないはずだ。

ガアアアン！ズウウン！

その時、ドアがついに破られる。

金属の板が宙を舞い、賀居の足元で床との摩擦に引きずられるように止まる。

部屋の中から出てきたのは

二本足で立ち、背中の後部からは尻尾のような長いモノが出ている。顔は爬虫類系をそのまま大きくしたような感じで、口には鋭利な牙が生え、皮膚は緑色と青色が入り交ざり、嫌悪感を示すには十分過ぎるほど口からおびただしい唾液と血液を流している。二足歩行で歩くトカゲのように見える。手には、まるで棒切れでも持つかのよう人間足であるうモノが血液をヒタヒタと流しながら、ぶらついている

「グギャヤオオオオオオオオオ！」

その化け物の咆哮が室内中にこだまする。

「早くいけ！行って彼らを守るんだ！」
銃を再び構え、トリガーに手をかけた賀居が
目の前に居る恐ろしい化け物に怯むことなく五郎へ声を上げる。

「・・・は、はい！」

自信と恐怖が入り交ざった複雑な表情の五郎は
体の向きを変えると外に向かって無我夢中で走り出した。

「グギャツ、グギャツ」

化け物が手に持っていた人の手であろうものを口に運び
まるで餌に食いつくようにグチャグチャと汚らしい音を立てて
丸呑みにする。化け物の顔には笑顔とも思える笑みを浮かべる。

「化け物が……！！それがてめえの最後の食事だ！」

ドオン！

銃声が室内中に響いた。

- AM0時26分 ガソリンスタンド敷地内 オーナー室

ガソリンスタンドの奥のほうに、スタンドの休憩室がある建物から独立した小さなプレハブ小屋がある。

恵と飛鳥が中に入ると、中には小さな机と椅子が一脚だけポツンと置いてあった。

人が住んでいたような雰囲気はあるが
ところどころに小さなゴミやホコリが見える。

机の横のところには何かボンベのようなものが置いてある。

「ケホツ……こりゃひどいな」

飛鳥が余りのホコリの多さに咳を上げながら、室内のボンベを見る。ボンベにはホコリが被っており、プレートが見えるがホコリでなんなのかわからない。

「ここは何をするための部屋なんだ？」

恵が飛鳥に問いかける。たしかに何のために建っているのかわからないほど部屋には何も無いのだ。

「ここは死んだオーナーの部屋さ。そうだ、その机も調べてくれよ、何かわかるかもしれない」
飛鳥が恵に対していつもより少し優しく言いながら、ホコリの被ったボンベの
プレートのホコリをとる。

「引き出しには・・何もないか」
恵が机の引き出しを調べていたが、何もない。
ふと机の下を見ると、何か紙のようなものが転がっている。
美しい模様が描いてある。どうやら便箋のようだ。

「ゴミにしては随分立派な便箋だな」
ホコリを手でスツとはらうと、便箋に書かれた文字がくつきりと
浮かんでくる。

オーナーの便箋

『もうこのスタンドともお別れだ。信頼できる部下にも別れの手紙を送っておいた。これが私がこの世で書く最後の手紙だろう。明日には睡眠薬が届く。ゆっくり寝れそうだ。心残りは配電室屋根の裏で飼っていたトカゲのエリーとジョニーだ。
そういえば彼らがココにやってきたのもスタンドが出来て間もない頃だったな。

いい節目とはいわないが、スタンドと共にやすらかな永久を彼らに・
』

ここで手紙は終わっている。

「・・・ほんとに飼ってたのかよオーナー」
後ろから盗み読みしていた飛鳥が声をあげる。

「そっちは何か見つかったか？」

「ああ、大当たりさ」

飛鳥がクイツと親指をボンベのほうに向けると
久々に見る飛鳥の嬉しそうな笑顔を見て一安心する恵。

「大当たりとはどういうことだ」

「ガソリンさ・・・それも純正のね」

飛鳥の笑顔は、益々輝きを増していった。

シナリオ【変化】 - 6 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【変化】 - 6

- AM0時27分 ガソリンスタンド洗車機付近

狂気の銃声と化け物の咆哮が、スタンド全体を震えさせる。

洗車機付近に居た健二と綾香にも、その音は聞こえた。

「今の音は何だ!？」

この台詞を言うのは今日何度目だろう。心の中でそう健二が呟きながら

強張る綾香の顔を見て、半ば興奮気味に綾香の手を強く& amp; #25681;む。

「ちょっと痛いわよ。一人で走れるから・・・離して」

「あ・・・ああ、ごめん」

綾香が眉をひそめ振り払うように健二の手を離す

思わず強く握り締めてしまったことを謝る健二。

そんなことを気にすることもなく、綾香は再び張り詰めた表情を浮かべる。

健二には、綾香のとったその行動が少しショックだったのだろうか、表情に恐怖とは違う呆然さが伺える。

以前の綾香ならいくら強く握り締めたとは言え健二の手を振り払う事も無く

手を握り返し、一緒に走り出していたはずだが、この数時間の間に起きた

『思わず目を背けなくなる現実』に綾香自身の心境の変化があったのだろうか？

健二は『こんな事が起きているのだ、無理もない』と自分に言い聞

かせ

呆然としていた表情を直し、いつもの冷静さを取り戻そうとする。

「尾山さん達が心配だわ、早く行きましょう」

「え……？あ、うん」

自分を取り戻す事に必死な健二は綾香のいつもと違う積極的な言葉にあっけにとられて綾香に手を握られ休憩所のほうへ走り出した。

- AMO時28分 店内給油機材前

煌々としたスタンドのバックライトに照らされて

四つの影が料金所から走って出てくる。

尾山、貴美子、智弘、五郎。

貴美子と智弘の手にはポリタンクが一個ずつ握られている。

「健二と綾香はどこに……それに飛鳥さんたちも」

智弘が走りながら周りを見回し健二と綾香、飛鳥や恵が居ないか確認する。

「それより早くこの場所から離れることが先決だ！」

白衣を振り乱しながら先頭を突っ走る尾山に、後方から五郎が追いつく。

「……尾山さん！待ってくださいまだ他の人が！」

五郎が銃を肩からさげながら先頭の尾山のところまで追いつくと、

尾山の腕を& amp ;#25681;む。

「ハアハア……なにをするんだ！早く逃げなければ」

スタンドの出口付近で五郎に腕をつかまれ、

足をブレーキ代わりに進む勢いを殺し、その場に急停止する尾山。久しぶりのダッシュに肩はあがり、息切れを起こしている。

周りに居た貴美子と智弘も同じように走るのをやめる。

「早く健二達を探さないと・・・」

「飛鳥さん達にも早く知らせないと、心配だしね」

智弘と貴美子が周辺を見回し始める、まだ後方からは銃声が聞こえる。

「おい、あれは？」

尾山が指をさす方向には、二つの影がこちらに向かって走ってくるのが見える。

「・・・さっきの化け物か！」

五郎がMP5のセーフティレバーを解除し銃を構える。

「おい！尾山さんー」

聞いた事のある声が、かすかだが聞こえる。

ライトが逆光して見えにくくなっているが、背格好から健二と綾香だと見える。

「健二！綾香！」

智弘が二人の姿を確認するや否や駆け出すと、尾山が周囲を見回す。

「やったわね！」

「感動の再開もいいが、どこから化け物が襲ってくるかわからんぞ」
二人と合流した嬉しさの余り貴美子がガッツポーズをするのを見て、
尾山がクギをさすように言い放つ。

たしかにまだあの化け物が、いつ襲ってくるかわからないのだ
油断は禁物と言えよう。

「さっきの銃声は何なんですか？」
健二が四人と合流した早々、口を開く。

「・・・今まで見た化け物とは違う・・・まるで二本足で歩くトカゲの
ような・・・」
五郎が化け物の外見を端的に言っていく。

「とにかく今は飛鳥さん達を探しましょうよ！」

「化け物にやられてなければ良いが・・・」
綾香が口を開くと同時に尾山が不吉な言葉を漏らす。

「鬼が出るか蛇が出るか・・・案外二人ともガソリンを手に入れ
てたりしてね」

尾山の台詞を聞かなかった事にしようと智弘が向きを変えて走り出
す。

「あ、待ってよ智弘くん」
貴美子がバッグを片手に持ちながら智弘の後を追う。

ドンッ！

その時、出口付近で何か重いものが降り立った音が聞こえた。

「うっ」

音が聞こえたほうを尾山を見ると、体が一瞬凍る。

まるで蛇に睨まれたカエルのように、その場から動けない。

ガソリンスタンドのまぶしすぎるライトに照らされて出てきたのは五郎の言っていた牙がギラギラしたトカゲの化け物だったからだ！

「ギャオオオオオオオ！」

化け物の咆哮がスタンド中にこだますると、化け物は50mくらい先で話をする尾山たちを発見し、そっちに向かってドタドタと音を立てながら走ってくる。

不自然に伸びた牙からは、血液と唾液が入り交ざって地上にポタポタとたれる。

「キヤアアアアア」

「に、にげるッ！」

恐怖に引きつった貴美子の悲鳴と尾山の声と共に闇雲にスタンドの奥の方へ走り出す五人。

だが五郎だけは、その場に突っ立っていた。

「おい、早く逃げないか！」

まだ走る体勢にもなっていない五郎を走りながら確認した尾山が

五郎に向かって声を上げる。

「・・・自分が助けなきゃ・・・やってやる！」

持っていたMP5をこちらに向かって走ってくるトカゲの化け物に
向けると

発射をフルオートにしてトリガーを引く。

ブルルツ・・・ドガガガガガガッ！

玩具とは思えない音と反動に五郎は少し驚きながらも
直径9mmの改造された金属製弾が化け物に向かって
恐ろしい速度の元に無数に放たれる。

ドガガガガガガッツ・・・ブシュ！ブシュ！

「ギャツ！ギャツ！」

化け物の皮膚に金属弾が足から胸にかけて何十発も命中する。

化け物の走る勢いが少し止まると、そのままフルオート射撃をする
五郎。

いくら玩具とは言え、貫通に特化した金属弾に加え、銃自体もより
強い弾を発射できるように殺傷力を持つカスタマイズをされている
のだ、化け物に利かないはずはない。

おびただしい緑の皮膚と青い血があたりに撒き散らかされ、化け物は一旦足を止める。

45発あつた弾倉は空になり、五郎はマガジンを抜くとポケットから次のマガジンを銃につめる。

カチャツと小気味いい音を立てて収納されるマガジン。電動銃特有のうなる音が五郎の手に伝わると、五郎は銃のトリガー近くについているセレクターをセミオート射撃に切り替える。

ドガガツドガガツ！

「・・・ギヤア・・・ギヤア」

化け物に追い討ちをかけるように10発程度の弾があたると、トカゲの化け物はその場に倒れるように仰向けに倒れた。

「・・・倒したか」

五郎がその場を立ち去ろうと体の向きを変え、尾山たちが居るほうへと

走り出す。

その時、五郎の後ろから何か嫌な予感がした。

ブーン！ドガーン！

「うおっ！？」

五郎はとっさに体を避けると、今まで五郎が立っていたコンクリートの場所には大きな穴がぼつかりとあいている。

よく見るとコンクリート付近に緑色の皮膚がベシャッとくっついて
いる。

「・・・くそつたれ！」

横目で後方を確認すると、何かに気づいたらしく軽く舌打ちをする
五郎。

そのコンクリートには、さっき倒したはずのトカゲの化け物の長い
尻尾が刺さっていた。

「ギャツギャツ！ギャギャ！」

まだ化け物は生きているという現実には少し恐怖を覚えながらも
再び体勢をかえ、MP5のトリガーをひき、化け物めがけて撃つ五
郎。

ドガガツドガガツ！

しかし金属弾は化け物の皮膚ではなく、コンクリートの床をはじく。

ビュン！ビュン！チュイン！チュイン！

トカゲの化け物は体勢を変え、手を床につけて足を二足から四足に切り替えて、まるで這いずるように銃を避けているのだ。撃った弾の跳弾がカラカラと床に散らばる。

何より驚くのはその避ける化け物の速度が余りにも早いことだ。

動物的でも容易に当てられる五郎が、動きを予想して撃っているのだが

銃口が向いた瞬間には、化け物はもうそこにはいないのだ。

「くそつ、追いつかれる！」

どンドン距離を詰められる五郎の焦りは確実になっていく。

ドガガッ！ドガガッ！

化け物との距離が5mほどまで近づくと、五郎は狙いを付けて化け物の

頭部に向けて弾を放つ。

チュイン！チュイン！

銃弾は化け物の皮膚をかすめる事もなく、むなしくコンクリートの

床に散らばった。

「ギャギャギャッ！」

同時に化け物はさらに間合いを詰めると、五郎めがけて大きく床を蹴り

2 mほどのジャンプをした。

「うっ！」

飛んだ化け物を目で追い、恐怖におののきながらも五郎は再び狙いを頭部さだめ銃を放つ。

ドガガツドガガツ！

「ギャオオ！ギャオオア！」

弾は化け物の眉間から目の部分に当たり、青い血が空中で飛沫をあげる。

しかし、飛び上がった勢いそのまま五郎を押し倒すようにその大きすぎる化け物の体が五郎の体の前にのしかかる。

カチツカチツ

「は、はなれる！」

引き金を引く五郎であったが、マガジンの弾はもうない。思いつきり力をいれて抵抗するが、化け物の体は重過ぎて押しつけようとしても、まるで逃れる事が出来ない。

「ギャオオアアア！」

目をやられた化け物の右腕が五郎の肩を思いっきりつかむと
ギラギラした牙から唾液のようなものが床にだらしなくポタポタと
落ちる。

「くそおおおお！」

死という言葉が五郎の脳裏をよぎる。
目をつぶって必死に化け物のあごを押さえる五郎。

ドガガッ！ドドドドッ！

その時、五郎の後方から銃声が聞こえる。

「ギャオオオオオア！！！」

五郎が目を開くと、化け物が自分の体を離れ横で苦しそうにのた打ち回っている。

「へっ！俺の腕もたいしたもんだろ？」

「大丈夫か！五郎！」

もう何度も聞きなれた飛鳥の調子のいい声と共に、尾山が五郎に近寄ってくる。

「みんな、こつちだ！」

「早くしろ！」

尾山が五郎に肩をかし起こすと、健二と恵が出口を指して走り始める。

「これ、結構重たいよう」

「ちよつと智弘くん情けないわねえかしてみなさいよ!」

ガソリンの入ったポリタンクを持って走っている智弘と貴美子。

智弘が重そうに抱えているのを見て、貴美子がしびれをきらして智弘のポリタンクを奪うようにもち、走り始める。

「ギャ!ギャオオオ!」

「きゃあ!」

最後尾を走っていた綾香が後ろで再び息を吹き返した化け物の姿を見て悲鳴をあげる。

「はやくいきな!」

銃を撃ちながら綾香に先に行くように指示する飛鳥。

ドガガツドガガツ!

綾香が走り出すのを確認すると、飛鳥の放った弾丸を無視するように助走をはじめ再び高くジャンプする化け物。

恐ろしい跳躍力は飛鳥の頭上をかるく超え先頭を走っていた健二と恵の前に現れる。

「くそつ、だめだこつちへ!」

健二の指差す方向に再び走り始める八人。指し示した方向には洗車機が見える。

- AM0時39分 洗車機前

洗車機前につくと、先頭の健二と恵を追いかけるようにトカゲの化け物が襲ってくる。

ブーン！ガアン！

「うおっ！」

トカゲの長い尻尾がまるで狙いすましたかのようにコンクリートの床を叩き

健二と恵の恐怖心を煽る。

「このままじゃ追いつかれるぞ！」

恵の声が聞こえると共に、洗車機の前に到着する二人。

「そつだ！あそこへ！」

健二が洗車機の中へ入るように恵に指図すると、二人の後ろには化け物がすぐそこに迫っていた。

「ギャツギャツ！」

「うおおお！」

二人が洗車機の中を通り抜けると化け物の頭が丁度洗車機の中へ入り始めた。

「いまだ！」

健二が洗車機のスイッチを押す。

カチツという音と共に洗車機が轟音を上げながら動き始めると

化け物を体を包むように洗車機のブラシが恐ろしい力で化け物に襲い掛かる。

「ギャア！ギャア！」

今まで受けた銃弾のあとにブラシが激しい勢いで食い込むと、化け物は悲鳴をあげる。

「ポリタンクのふたを開けて投げて、こっちに投げるんだ！」

洗車機を横の通路から通りぬけながら、ガソリンを持っていている貴美子に合図の声を送る健二。

「は、はい！いきますよー」

貴美子がポリタンクのふたをあげ、まるで床にスライドさせるように思いつきり洗車機めがけて投げる。

ポタポタと周囲にガソリンをまきちらしながら、洗車機にガンとあたるポリタンク。口からはまだガソリンがでていて、床に広がってゆく。

「だれかライターでもなんでもいいから火を！！」

それを見た健二は、全員に火をつけれるものを要求する。

「な、ないわ！」

「電動銃じゃ床に当たっても、火はおこせないし」

だが、健二の言葉に反応してポケットなどを探すが、誰しもがライターやマッチなど火をつけれるものを持っていなかった。

「グギャオオオ！」

バキバキと洗車用ブラシを内部から恐ろしい力で壊していくトカゲ

の化け物。

今にも突破されそうだ！

「あ・・・そういや！」

何かを思い出したように飛鳥がポケットから何かを取り出す。居酒屋で使えなくなったはずのライターだ。

「カミサマ！一生のお願いだぜ、ついてくれー！」
飛鳥がそう叫ぶとライターの火をつけ始める。

チツチツ・・・ボツ！

飛鳥の願いが通じたのかわからないが、ライターの火がつく。

「や、やったぜ！・・・ほらよ！」

ガソリンの導火線にライターをもってゆき、引火させる飛鳥。

火は撒き散らかされたガソリンを伝い、洗車機の下まで伸びてゆくとゆっくりと化け物の体を焼き始めた。

「ギヤギヤギヤアアアオオオ！！！」

化け物の断末魔と共に洗車機が燃え盛る火炎に包まれる。

「へっ・・・カミサマ・・・今度はつかしは助かったぜえ」
ヘナヘナとその場に座り込む飛鳥に、八人が駆け寄ってくる。
乗り切れたことと危険が去った事によって全員に少しではあるが歓
喜の声があがる。

居酒屋の事件から数時間、八人の心は少しずつだが連帯感を帯びて
いた。

シナリオ【変化】 - 終了 -

シナリオ【絶句】 - 1 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【絶句】 - 1

- AM0時53分 ガソリンスタンド給油機材前

巨大な爬虫類の化け物の屍骸がひどい腐臭を放ちながら洗車機と共に燃えている。

いつの間にか慣れてしまった普通の世界では感じる事の出来ない異臭。

八人の行き着く先々で確実に襲ってくる化け物の恐怖。

かすかな希望と圧倒的な絶望を感じながら、八人の中にはいつの間にか、何とも言えない連帯感が生まれていた。

尾山と綾香と五郎と恵がスタンド給油機前にたたずんでいる。

「・・・あと一匹いるはずだ」

五郎はキョロキョロと目を盛んに動かしている。

室内料金所で賀居を襲ったトカゲの化け物が万が一生きていたらと考えると

まだ気は抜けない。

さっき撃った時の反動で未だ震える指が

銃のセーフティレバーに手をかけたまま、

五郎はガソリンを取りに行った四人の帰りを待っている。

五郎の手には飛鳥から受け取ったHKG3。ライトに当たりまるで本物の銃であるかのような鈍い光沢を放っている。

まだ銃の弾倉には少量だが弾が入っているようだ。

五郎のポケットにはマガジンが一個入っている。

「もってきたよー！」
ガソリンスタンドの奥から人影がスタスタと走ってくるのが見える。スタンドのバックライトに当たると顔がうつすらだが見えはじめる。・・・声の感じからして、どうやら貴美子のようだ。手にはポリタンクがゆらゆらと腕の運動と共にゆれている。男性でも重く感じるそのガソリン入りのポリタンクを軽々と持ち上げ驚くべき速さでこちらに向かってくる。

「ちよっ、ちよっとまっってくださいよ」

「あの人・・・力ありすぎ・・・」
後ろから智弘と健二がポリタンクを一つずつ持ってこちらへ歩いてくる。

しかし貴美子のように軽々とは持てない様子で、引きずり気味に早歩き程度の速度でこちらへ向かってくる。

「はあはあ、あの女化け物が・・・」
飛鳥がその後ろからポリタンクを押すようにして追いかけてくる。タンクの重さに少々息切れしながら、前列を走る貴美子が軽々と担いでいるのが不思議でたまらないといった表情を浮かべる。

「これで、ガソリンは手に入ったわけだ」

「・・・なんとかなりましたね」

「早く車へ急ぐんじゃ、いつあの化け物が出るともかぎらんしのう」

「そうね、急ぎまじょう」

「急ぐって言ったって、これ車の所までもっていくのに一苦労だよ」

「またこれ持ってくんですか・・・トホホ」

「智弘くん、泣き言いってると化け物に襲われちゃうよ?」

「へっ、チヨロイチヨロイ。化け物ぐらい俺がやっつけてやるよ」

八人が合流すると、それぞれ声を上げて言う。

ガソリンを手にしたこと、自分達で化け物を倒したこと
その事実が彼らを勇気付けているのだろうか
彼らの口ぶりからは、随分と余裕を感じさせる。

全員の足がスタンド前道路へと向かう瞬間、その時だった。

ドガアアン！ガン！ガンガラ・・・

後ろの室内料金所のドアが大きな音を立てて破られる。

「ギャツ・・・ギャツ・・・」

壊されたドアの中から不気味な声が聞こえると

さっき見たあのトカゲの化け物に良く似た影が入り口に立っていた。
影はゆらっと前に歩きだすと健二達の方に向かって走ってくる。

「お、俺のせいじゃないぜ！」

「クッ！」

さっきまで冗談を言っていた飛鳥が血相を変えて道路側に逃げ出すとすると

五郎が銃のセーフティを解放し、トリガーに手をかける。

ドオン！ドン！

「ギヤヤツ！ギヤギヤ・・・」

銃声がガソリンスタンド内に響き渡り、

化け物は断末魔の声を上げその場に倒れる。

緑色の腐った皮膚と血液と思われる液体が、その場にだらしなく広がっていく。

どうやら化け物は死んだようだ。

化け物の顔面から即頭部にかけて二発の弾痕が残っている。

「・・・？」

五郎が不思議そうにトリガーを確認する、自分の指は

まだ銃のトリガーに触れていない。

つまり撃ったのは自分じゃないのだ。

五郎が不思議そうに料金所のドアを見たその時

ドアの近くにドアを支えていた柱にもたれかかるようにしている人影が見える。

「あれは・・・人か？」

「まさか・・・」

恵が指を指すと同時に五郎が化け物の屍骸を飛び越えて室内料金所の人影に向かっていった。

「ッ・・・よ、よお、生きてたか」

室内料金所のドア柱にもたれかかっていた影が口を開く。

・・・賀居だ。

賀居は片手で腹部を押さえ、自慢の銃を握り力が入らないのか腕をだらんと下へたらしている。

「賀居さん！」

五郎が満面の笑みを浮かべると、賀居はその場に崩れるように座り込んだ。

座り込んだ勢いで賀居のスーツの袖口から床に少量の血が流れる。

「・・・うつ・・・怪我を？！尾山さん！」

五郎は尾山を呼ぶと、他の六人も集まってきた。

「傷は浅いが・・・こりゃいかな、とにかく車まで運ぶんだ」

尾山はガソリンを抱えると道路に向かって歩き出した。

五郎は賀居をおぶさると、尾山の後に続いた。

- AM 1時21分 山道前道路 ワゴン車内

キーを挿しこむとまわすとエンジン音がキュルキュルとうなる。ガソリンを補充したワゴンは息を吹き返したようにアイドリングを始めた。

運転席には尾山と変わって飛鳥、助手席には恵が座っている。

後部座席前列には健二と智弘、綾香と貴美子が座っている。

後列には五郎と、応急処置を終えた尾山が賀居の容態を見ながら座っている。

「う・・・くっ・・・」

アイドリングの振動が傷に響くのか、賀居がうめき声をあげる。

「大した体じゃよ、普通なら意識を失うほどの激痛が伴う処置なんだが」

処置を終えた尾山が声をあげる。

「アメリカじゃ・・・怪我なんて日常茶飯事だったからな・・・」

少しうつむいた感じで尾山の問いかけに答える賀居。

修羅場をくぐってきた鍛えられた体と

鉄の意志力は彼の強さを確固たるものとしていた。

「おい尾山さんよ、終わったなら早速自衛隊の補給基地へ向かうぜ」
運転席の飛鳥が尾山に問いかけると、アクセルをゆっくりと踏み出す。

・・・ブウウン

ゆっくりとスピードを上げて走り出すワゴン。

道路を走ると、さっきまで居たガソリンスタンドが窓からみえる。煌々としたライトがまだつき、めらめらと洗車機近くで炎が見える。

「・・・」

バックミラーでスタンドを見ている飛鳥。少し寂しそうな表情を浮かべ、いつもの調子はどこへやらといったような寡黙さをつかがわせる。

長い沈黙が車の中を占領していた。

十分後

道は国道に入り、尾山の言っていた自衛隊の補給基地まであと1時間といったところだろうか。

「そういえば、貴美子さんって昔何かやってたの？」
綾香が重い沈黙を破るように声をあげる。

「んんー？なんで？」

急に綾香に話しかけられたので少々驚きながら、質問がまったく疑問だったので

質問で返す貴美子。

「あんな重いガソリンの入ったポリタンクを持ちながら、どうしてあんなに走れるのかなーって思ってた」

「あー、あれねえ。私タレントになる前は国体の選手だったのよね

）。これでも国体選手の中では1、2を争う速さだったのよねー」

「へえ・・・意外や意外ね・・・」

それを聞いたとたん綾香をはじめ、健二や智弘まで表情が変わり驚きの色を隠せないでいる。

「それに実家が漁師でねー、よく漁も手伝ってたから・・・あんな重さのタンクくらいじゃへこたれないわよ！」

健二と智弘へ目配せをするように視線を浴びせる。

少しづつが悪い感じで、そっぽを向き窓の外を見る健二と智弘。

「まっ、そこらの頼りない男どもよりは強いわよ」

「ええ・・・そうね、ハハハ」

健二と智弘はさらにはづが悪そうに食い入るように窓の景色を見ている。

窓の外には道路の明かりとはまた別のスポットライトのような強い光りが見える。

「なんだあれ・・・？赤いラントがくるくる回ってるけど・・・検問かいの？」

「尾山さん家のテレビで見たけど・・・あれが自衛隊の検問じゃないの？」

健二がライトの赤さに少し疑問を持っているが、綾香の言葉にたしかにと頷く。

「・・・け、検問？・・・まああのライトの色は・・・」
後部座席で賀居が体を起こし赤く光るライトを見ながら辛そうな声をあげる。

「何かあんのか・・・？」
賀居の声に反応した飛鳥がアクセルを踏むのをやめ、ゆるいブレーキをかける。

だんだんライトとの距離が近くなっていく。
するとうつすらとだが、人影が車のライトに映る。
影が動く気配はない。

「・・・?!」
賀居が目を凝らして人影を良く見ると、みるみるうちに表情が青ざめていく。

「車をUターンさせて・・・に、にげるんだ」

「・・・なんで？」

賀居が飛鳥に苦しそうな声で言い放つ。
まだ飛鳥には現状がわかっていなかった。

「は、はやくにげるー!!」
賀居の声が車内中に響くと、検問のライトにあまりに大きすぎる人影が見えた。

シナリオ【絶句】 - 2 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【絶句】 - 2

- AM 1時32分 国道463号線 自衛隊検問

暗闇があたりを包み、空に浮かぶ月でさえ怪しげな雲に隠れ始めた。そんな中、唯一の脱出経路を進む一台の黒いワゴンであったが眼前に広がるのは妙に赤い光りを放ちながら回転するライト
検問らしきバリケードが幾つか見え、封鎖用のブロックが積み上げられている

そしてその前に立っていたのは、あたりに響く咆哮を撒き散らす化け物だった。

キューーイツ！キキ！

化け物の咆哮を聞いた瞬間、運転手の飛鳥は思わずブレーキを踏んでしまう。

「な、なんだよあれ!？」

「・・・早く逃げる!!！」

今までの出来事で多少の恐怖には抗体が出来ていた飛鳥達にも目の前の余りに肥大化し人間の形をした化け物を見た瞬間、
二度とあつてほしくない恐怖。その感覚をついぞ呼び覚ましてしまったのだ。

「オ、ア”ア”」

ツ!!!」

再び化け物が咆哮をあげ、その大きすぎる腕らしき物を振り回すと何か大きな物体がワゴンの手前の道路に、ドガンと鈍く大きな音を

立てて
落ちてくる。

恐る恐る助手席にいた恵が、その物体を見ると
どうやら事切れてはいるが人間らしい。

迷彩服姿である事から、自衛隊の隊員だろうと思われる。
その男の肩には抉ったような大きな傷跡と何か鋭利なもので刺した
傷が数箇所見える。しかしおびただしい血が迷彩服のあらゆる場所
からこぼれている。

着地した拍子に道路の横へカラカラと音を立てながら隊員が被って
いた緑色のヘルメットが転がっている。

手足はありえない方向へ曲がり、首はひしゃげて、顔は道路を引き
ずったように赤い血の跡を残し道路を下に向いている。

「・・・！」

「と、とにかく道を戻るぜ！」

余りの恐怖に言葉をなくした恵を横目に、ハンドルを思いっきりき
って

アクセルを踏む飛鳥。

キュルキュルキュル！

その場でスピンするような動きをしながら後輪タイヤがすれる音を
出し

排気口から白い煙を上げながらワゴンが物凄い勢いでUターンする。

「うおっ！」

「キヤッ」

ワゴンの車内が急激にゆれ、同時に座ってる健二達の体も揺れ動く。

「・・・うつ！」

最後部の座席に居た賀居が車内の揺れでその場に倒れる。

「ぐっ・・・おい飛鳥！もう少しゆっくり曲がれんのか！患者の傷に響くだろうが！」

とっさに倒れた賀居を支えると、運転席に向かって尾山が声をあげる。

「そ、それどころじゃねえっての！」

飛鳥がバックミラーを気にしつつ、向きの変わったワゴンのアクセルを思いっきり踏み、助手席の恵は助手席のバックミラーから化け物が動いているかどうかしきりに見ている。

「・・・くそっ、ここにもか」

後部座席に居た五郎が、再び銃を組み立て始める。

その表情にさっきまでの余裕はない。

暗闇の国道を逆走するワゴン。

すでに検問から数百メートルは離れた場所に来たようだ。

ブウウン…

その時、後方からエンジン音と思われる爆音がワゴンの後方から迫ってくる。

「おい、あれは・・・!?」

音に気づいた恵が、見続けていたミラー恵を見つめ、異変に気づく。

光だ、後方から二つの目のような光り方から車のライトと見受けられる。

だが後方からという事は、今まであのデカイ化け物が居た場所から来たと

言う事になる。

「まさか生存者が？」

後部座席から恵の声に気づいた健二が後ろを見て、迫るライトに気づく。

誰もが健二の推測を信じたいところだったが、目の前に起こる現実は全員の願いを突き放すような結果でしかなかった。

「ア”ア!マ”デア!!」

闇夜に響く恐ろしい化け物の咆哮と共に、後ろからワゴンに迫るその車の全容が見える。

壊れたフロントガラスとへこんだボンネット、白と黒のラインと壊れた赤いパトランプから車種はパトカーと見える。その上にはさっきの化け物が悠然と乗っかけているのだ。

化け物のその巨大な体が街灯に照らされ、まるで点滅するように浮き出では消えてゆく。

その光景はワゴンの九人を再び恐怖の坩堝へと落とすのに
それほど時間はかからなかった。

「え?!あれなんなのよー!」

「な、なんで追ってくるんだよー!」

健二と恵の異変に気づいた智弘と貴美子が化け物の存在に気づき、
パニック状態へ陥ってしまう。

「オ”アア”ア”ア”ア”!!!」

ワゴンと少しずつ距離を狭めるパトカーから再び化け物が咆哮をあ
げる!

化け物の胸からは何かぷらぷらと触手が下に出て伸びており、触手は
フロントガラスの中にある何かに刺さっているようだった。

ワゴンとの距離は、もう100mもない。

「お、おいスピードをあげろ!追いつかれてしまっぞー!」

尾山が後方から迫るパトカーを見て

少し動揺するように飛鳥に向けて言い放つ。

「んなこといったって!これが精一杯だよー!」

飛鳥の悲痛な叫びがワゴン中に響き渡る。

いつにもない必死さが表情を包む、額にはつつすらと汗が浮かんで
いる。

ワゴンとパトカーの距離はもう50mを切り、化け物の全容が浮かんでくる。

「ご、五郎・・あれは!！」

尾山がパトカーの上に乗っている化け物を見ると、血相を変えて五郎を呼びながら、パトカーのほうへ指を向ける。

「・・・そんな、ばかな!？」

五郎も尾山の指差した方向を見て、再び青ざめる。

そこに居たのは自分達が交番で倒したはずの五郎の先輩だったからだ。

「・・・あの時倒したはずなのに、なぜ!？」

「まさかあの時のカーボレーン酸が化け物の遺伝子となんらかの結合を・・・？」

五郎の信じられないと言った顔がさらに車内の恐怖を煽る。
何か考え事をしているのか、尾山はブツブツと親指の爪を噛みながら口を動かしている。

「おい、もう後ろにいるぞ!！」

助手席の恵がバックミラーを確認すると、もうすでに化け物のパト

カーが
化け物の手の届く範囲まで近づいている。

「くっそおおおお！」

必死でアクセルを踏む飛鳥だったが、メーターは速度の限界を示していて

これ以上の速度は出ない。

「ニ”グウ！エ！！イ”イ”イ”イ！！”

ブーン！！ガシャーーン！

「うおっ！！」

恐ろしい咆哮と共に化け物の肥大化した手がワゴンの後部座席横の車体を

思いつきり叩く！！

横にあった窓ガラスがばらばらに割れて、頑丈な車体がまるでゼリーのようにグシャッとひしゃげる。

ワゴンがひとたびグワンと揺れると、化け物は少しバランスを崩したように

後方へ下がる。

「この・・・化け物め！！」

恐ろしい勢いで飛び落ちるガラスを避けるように、尾山が白衣を盾にガラスの破片をさえぎる。

「・・・ぐっ・・・こんなときに・・・」

賀居が傷ついた腹部を再び押さえ始める。

今の衝撃で傷が開いてしまったのか、苦悶の表情を浮かべる。

「尾山さん！賀居さんをこっちへ！」

周りの人間が慌てている中、賀居の苦しみようを見た綾香が声をあげる。

「そ、そうだな」

綾香に言われたとおり、前のシートを倒し

苦しんでいる賀居を前の座席へと滑らすように移動させる。

その時、また化け物のパトカーが近づき、後部のドアに一撃を加える。

ブーン！ズガアーン！ガシャン！

「ぐっ！」

殴りつけられた衝撃でバックドアのガラスが吹き飛ぶと、かがむように避ける五郎と尾山。

カチャン・・・

「くそっ！」

五郎が銃を構え、ガラスが無くなったバックドアのへりに銃を置き

安定させ

化け物に向けてフルオート射撃をする！

ズガガガガッ！ガガガッ！

「アア」ア・・・アアアア！！！」

弾は化け物の頭から右胸にかけて当たるが、まったく利いている様子がない。

のけぞることなく、さらに近づいてくるパトカーから、また一発バックドアめがけて化け物の手が飛んでくる。

ズガン！ズガッ！ガランガランガラン・・・

恐ろしい破壊力に耐え切れなかったのか
えぐれるようにバックドアが外の道路へと吹き飛ぶ。

車内に外の空気が勢い良く飛びこんでくると
五郎が再びマガジンを取替え、銃を放つ！

ドガガッドガガガッ！！

「くそっ！なんて奴だ！」

しかし、何処に当たっても、化け物には傷一つつけられず利いていない。

「も、もう一回こられたらやばいぜ！」
運転席で飛鳥が悲鳴にも似た声を上げる。
たしかに車体全体が衝撃のせいで微妙な揺れを起こしている。
次の一撃でエンジンがストップしてしまいかもしれない。

「尾山さん！さっきアイツを倒したとか言ってたけど！何かあいつを止めれる方法ないの!？」
痺れを切らした綾香が後部座席に体ごと移動する。

「利くかどうか・・・わからんが」
尾山はジュラルミンケースを開けると一つ液体が入ったガラス瓶を出す。

「これは・・・？」
綾香が尾山からガラス瓶をもらうと、その瞬間
また後方からパトカーと化け物が追いついてくる。

「い、いいからなげる！」

「わかったわ！」

尾山の声が聞こえるや否や、化け物めがけて
ピンを投げる綾香。

ガツツガシャン！・・・シュー

ピンは化け物の胸部分に当たり妙な煙を上げている。

「ギヤアアアオオオオオオオオオオオ」！！！！

化け物の叫びと共に、少しづつ化け物が乗ったパトカーの速度が下がっていく。

シュルシュル！

だがその時、化け物の胸から触手のような何かがワゴン車内に入るようにこちらに向かってくる。

「な、なに！？」

「！」

ガンッ！

綾香が触手に気づくと、それを見た五郎が銃のグリップ部分で触手を思いっきり叩いた。

触手は進行速度を弱めたが、まだ一本の触手が近づいてくる。

シュルシュル・・

「智弘！バーナーこっちに頂戴！」

「あ、あいよう」

綾香の声と共に智弘が持っていたバーナーを綾香に手渡す。

シュルシュル！

鋭利な刃物のようにとがった触手が綾香の眼前めがけて飛んでくる。

「こんのおおおお！」

綾香が迫り来る触手に向けてバーナーを放つ！

カチツ・・・ボオオオオオオ！

800度を超えるバーナーの炎が触手を焼き払い

まるで導火線のように化け物の方向へ炎を進め

焼き焦げた触手は道路にボタボタと力なく落ちてゆく。

「や、やったわ！」

綾香が歓喜の表情を浮かべると減速を続けていた化け物のパトカーが後方で炎上する。

バチバチ・・・バチバチ・・・

音を立てて闇夜に消えるパトカーを見て

五郎と尾山以外の全員が安堵の表情を浮かべる。

「やった・・んですかね」

「あれで終わったとは思えんが・・・」

五郎と尾山の言葉と怪訝そうな表情が車内の歓喜の声に紛れた。

シナリオ【絶句】 - 3 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【絶句】 - 3

- AM 2時05分 市街地手前道路

すっかり静まりきった道路を半壊状態の黒いワゴンが通る。

化け物に追われ、闇雲にハンドルをきった結果

どうやらどこかの市街地に入る道路を走っていたらしい

市街地の名前が書いてある電光掲示板が虚空を照らし

誰に見てもらってもなく、【全線通行止め】と書かれた文字にそって
むなしく光っている。

半壊状態のワゴンの車体はガタガタと震え

エンジンは今にもストップしそうな勢いだ。

壊された窓から夜風が車のスピードに合わせて勢い良く

飛び込んできて、その風は車内の人間を少し肌寒くさせる。

「やばいな・・・車体がガタガタで走るのも精一杯だ」
運転席の飛鳥がつぶやくように言う。

元整備士の飛鳥で無くともわかるほど化け物の一撃による損傷はひ
どく

後部座席の車体のゆがみ具合を見る限り、エンジンに損傷が無いのが
奇跡と思えるほど重態で、そう長くは走り続けられそうにない。

「・・・何故なんだ。あんな場所に先輩が・・・」

「あの化け物、前見たときより進化していたな。あの化け物の胸から

触手のようなものがパトカーのフロントガラスまで伸びていたとなると

「・・・ひとりでに車が走ることなんて無い。つまりあれは・・・」

「・・・『化け物が人間を操作していた』ということですか？」

「考えたくもないが、あれを見る限りでは・・・」

バックドアの吹き飛んだ後部座席で、尾山と五郎が話し合っている。何か考えている風な尾山と絶望と落胆に表情を歪ませている五郎。どちらも口調は暗く、時々吹き込んでくる風の寒さのせいか顔も優れない。

「いつたい・・・この世界はどうなっちまったんだ・・・」
カーブに差し掛かりハンドルをゆっくりと切り出す飛鳥。
いつもならジョークの一つでも言って場を沸かせる飛鳥だが
まるで表情に活力がない。ただただ迫る焦燥感にかられているだけだ。

「早くあんなのいない、どこか安全な場所にいこうよ・・・」
貴美子の声が後部座席から聞こえる。

飛鳥と貴美子、いつもは楽観的な二人の表情や声が極度の緊張で強張っている事が、より一層全員の沈黙の時間を煽ろうとしている。

だが貴美子の発言を聞いていた智弘が、憤慨したようにいきりたつて大声を出す。

「さつきも見てただろ！助けに来た自衛隊の検問が跡形も無く・・・
もう何処にも安全な場所なんてないんだ！もうこの街も終わりだよ
！」

すると智弘は狂ったように手をワゴンの車体にぶつけはじめた。

ドンッ、ドンッ、ドンッ

どんどん赤くなる智弘の手を見て、健二や貴美子が止めに入る。

「智弘君、やめてよ！」

「おいつ、智弘…よせ、よすんだ！」

パニック状態に陥っていた智弘を優しくなだめるように
健二が声をかける。同時にその場に崩れる智弘。

「フン、見苦しいな。そんなんじゃ本当に死ぬぞ」

助手席に座っていた恵が、後部座席の智弘を見ながらポツンと呟く。

「そんなこといわなくてもいいでしょ！？智弘君だって私だって怖
くて焦っているのは皆一緒よ！」

恵の言葉に少々の怒りを覚えた貴美子が、智弘をかばう様に発言す
る。

「皆一緒？くだらん仲間意識は捨てたほうがいい、いざと言う時に
迷いが生じるぞ。一瞬の迷いが命を落とす例なんて、世間にごまん
とあるんだ。人をかばう暇があったら考えるんだな。自分が助かる

方法を、だ」

恵の氷のように冷たい目と共に同じような口調が車内に響く。しかし、恵自身が言った言葉は恵にも言えることであった

「自分には迷いが生じていないのか？」

「いざと言う時は仲間など見捨てられるのか」

そんな言葉を自分に言い聞かせているような感じがしたのだった。貴美子に言われたように皆・・・いや、内心彼女自身も焦っているのだ。

しばしの沈黙が続く中、後部座席のシートを倒して寝ていた賀居がシートを起こし

少しきつそうな笑顔を浮かべ口を開く。

「・・・さっき言ってた安全な場所だが・・・安全かどうかは知らないが・・・この近くに警察署があったはずだ」

「おい起きて大丈夫なのか？」

尾山が起きるのを手伝うように賀居に手を差し伸べる。

「すまない・・・もう大丈夫だ」

「この辺の警察署ってまさか・・・」
五郎が怪訝そうな顔つきで賀居を見つめる。

「ああ・・・俺の忌まわしき職場さ・・・通称『警視庁の掃き溜め』だ」

賀居がそう言うと、運転手の飛鳥に指示をだしワゴンは警察署へと向かった。

- AM 2時21分 警察署前

ワゴンは大通りから市街地の外線を進むと、市街地からは少し離れた場所に

ポツンと存在する灰色の建物が見える。

およそ警察署には似つかわしくない頑丈そうな鉄製の門が開け放たれている。

門の前には警察署の名前が書かれているがよく読めない。まるで削り取られたような後がある。

建物の正面には警視庁のマークがデカデカと表門に貼り付けてある。

正面辺りにはパトカーを止めるための駐車場スペースがあるが一台もパトカーが無い。どのパトカーも出払っているようだ。

ワゴンが正面門を通り過ぎると、駐車スペースに向かってゆっくりとブレーキを踏み、ワゴンを止める飛鳥。

「おい、降りるぜ。さすがに車も限界だぜ」

キュルキュルと妙な音を立てて止まるワゴンにサイドブレーキをかける

飛鳥が勢い良くドアを開け、地上に降りる。

「安全なのかしらね・・・ここは」

綾香が救急箱を持ちながら後部座席のサイドドアを開けワゴンから降りる。

「フン、もとより安全など期待していないがな」
皮肉めいた言葉を口走りながら恵が助手席から降りる。

「鬼が出るか蛇が出るか・・・あんまり出てほしくないけどね」
冗談まじりに貴美子が車を降りる。

「はあ・・・もうイヤだ」

ため息をすると、智弘が後部座席のドアを開けて降りる。

「五郎、手を貸してくれ」

「はい・・・いきますよ・・・せーの！」

バックドアから傷ついた賀居をゆっくりと二人がかりで降ろすと五郎が肩を貸し賀居を警察署へと連れて行く。

その間に尾山はジュラルミンケースを手に取り、五郎の後についていく。

「ヘックシユ・・・風邪でも引いたかな」

くしゃみをしながら、自分の携帯を手に取り車を降りる健二。

九人は警察署の頑丈な鉄製のゲートを人力でしめると、玄関の中へと歩を進めた。

- AM 2時25分 警察署正面玄関

九人は玄関に入ると三本の通路がある。

薄暗い電灯があたりを少し照らしているが、左右の通路は暗くてよく見えない。

正面の通路には受付と交通課と書かれたプレートが天井から釣り下がっている
だが机にかすかに見える書類や受付案内用紙などが散乱してホコリを被っていて、

壁は良く見るとスプレーで吹きかけたようなラクガキや、何かをぶつけて穴があいている。

この様子からどうやら賀居の言う通り、ここは警察署というよりは「掃き溜め」であることは間違いないようだ。

署内には人の気配が無い、全員事件に出払っているのだろうか。

「まるで幽霊でも出そうな雰囲気だな」

「ホラー映画だと、怨念を持った悪霊がポルターガイスト現象とか起こしそうな警察署ね」

飛鳥の冗談に、ホラー映画マニアの貴美子が答える。

その目は例外とマジメで、冗談で言ったつもりの飛鳥は周りを見渡ししながら

少し身を構えるように前に進む。

「おい賀居とかいったな、辛いだろうが署内を案内してくれ」

薄暗い署内を見回しながら、散策へ乗り出そうとしている恵が賀居を呼ぶと

五郎の肩を借りて前に出る賀居。

「正面の通路は十字路になっていて、左右に二階へ上る階段が一つずつある

そのまま進むと取り調べ室と休憩室があってそこから裏門へ行ける。

左の通路はトイレと・・・あとは暴力団対策課だっけかな？
右の通路は電圧室と刑事課があったはずだ・・・あんま動いてないけどな

二階には更衣室とロッカー室とあと署長室と予備室があったはずだ」
たんとんと説明する賀居。傷は治っていないようだが
常人とまるで変わらないその口調の裏にはとんでもない激痛が伴っている事だろう。

「とにかく二階へいこう、そこにとっておきがある」
肩を貸している五郎の歩速に合わせることなく
ツカツカと正面通路を進む賀居。

「おい、もっとゆっくりと歩かんと傷がまた開くぞ」
尾山が賀居を心配するように前へ進む。

「とっておき？なんのことかしらね」
「とにかく行ってみましょうよ」

綾香と貴美子が前に行くと、後ろで少しモジモジしている智弘と健二。

「智弘・・・もしかして？」

「・・・健二もか」

二人は少し姿勢を前かがみにすると、ソレに気づいた飛鳥と恵が近寄ってくる。

「おい何をやっているんだ。早く行くぞ」

恵に声をかけられると、さらにモジモジする二人を見て飛鳥がこう

言う。

「さくあてと、漏れる前にトイレにいきましようか。おぼっちゃん達」

どうやら飛鳥にはバレていたようだ。

「こんなときにまったく……。仕方ない、早く済ませろ」

「俺もついてゆくよ、化け物にあつたらヤバイからな。トイレは左の通路だっけか？」

恵はヤレヤレと言いたそうな感じで二人を見ると、飛鳥と共に左の通路へ向かう。

「め、めんぼくない……」

健二、智弘、飛鳥、恵の四人は1F左通路のトイレへ向かった。

- AM 2時34分 2Fロッカー室

2Fへと上がると、1Fとは違い床の清掃が行き届いており乱雑に置かれた書類などは見当らない。

上がった通路から一本道で順番にロッカー室、更衣室、所長室と続いている。

どうやら奥の部屋は予備用らしい。人の気配はまったくくない。

賀居を先頭に、ロッカー室に入る五人。

ロッカー室には外の清掃具合とは違い、床に紙くずやプラスチックのゴミなどが

散乱している。

「なにこれ・・・警察署なの？ここ・・・」

綾香が流石におかしいと思ったのか、賀居を横目でみながら呟く。

「だからいったる・・・ここは掃き溜めだつて」

賀居はそう言いながら、ロッカーの一つを開ける。

その中には手錠とベルト、警官用の帽子があつた。

ごそごそと賀居がロッカーの中を調べていると奥から

大振りのガンケースを取り出すと、五郎に渡す。

「こ！？これFN P90じゃないですか！？本物ですか！？」

五郎がガンケースの中身を覗くとFN P90と書かれた短機関銃がしまわれていたようだ。

この機関銃は銃社会のアメリカにおいて数少ない市場に出回らない短機関銃で

その使いやすさ高性能ゆえに一部のエリート部隊にしか渡されないという代物だ。

「ああ、本物だよ。アメリカ研修の時に事件解決表彰された時に譲り受けた代物だよ。日本の警官は見たことないと思つてたが、よくしつてるね」

淡々と語る賀居はさらにロッカーの奥を探し鍵を発見する。

「電子キーは・・・あつたこれだ」

賀居はロッカーから電子キーを手に入れると、ポケットにしまい再びロッカーの上を探し始める。

「やれやれ元気だな・・・」
尾山はジュラルミンケースを地上に降ろすと、周辺のロッカーを開け始めた。

「やっぱりこれがないとな・・・」
賀居はロッカーの上から弾の入ったマガジンを一個取り出す。
それは自分の愛銃シグザウエルP226の予備マガジンだった。

「とりあえず武器が手に入ったのね！よかった！」
貴美子がそういって、尾山の真似をして、ロッカーの散策を始める。

「早く健二達を呼ばないと・・・」
綾香がそういってドアを開けようとした瞬間・・・

「うわあああ！・・・！」

1 Fから悲鳴が聞こえた。

シナリオ【絶句】 - 4 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【絶句】 - 4

- AM 2時38分 警察署1Fトイレ

薄暗い電灯が警察署内全体を照らす中

普通の警察署とは異質な感じがするこの場所で
狂気の含んだ悲鳴が建物中に響いた。

「け、健二大丈夫かい？」

智弘の何時にもない弱気で必死な声が建物に響く。

智弘の目の前にはトイレのドアを通り越して

その外にあった署内の木製の掲示板の下に倒れている。

「・・・ぐっ・・・」

腕と背中がひどく痛む。どうやら吹っ飛ばされた瞬間に
壁にぶつかった衝撃と同時に斬りつけられたのだろう。

その光景は外で待っていた恵と飛鳥の目にも映っていた。

「おい！！大丈夫かよ！」

「・・・やはりここも安全ではなかったか！」

傷ついた健二を起こしながら恵はトイレのドアの向こうを見る。

異質な物。そういえば例えられるであろうか？

そこには手が異常に長くまるでゴムのように力なくだらんと伸びた
男の化け物がいた。

「ガア・・・アア・・・ア・・・アア」

伸びた手が薄暗いトイレの中でギラツと光る。

赤黒く変色した細長くより鋭利な刃物のように磨がれたツメのよう
だ。

化け物の顔は変色さえしていないものの、その腐臭と伸びた腕
生前着ていたと思われる黒いスーツはところどころに銃の弾痕があ
る。

どうやら署内の人間と思われる人物が、この化け物と戦っていたよ
うだ。

トイレの奥には大きな穴が開いており、化け物が自力でぶち破った
のか

まるで掘削機でも使ったような抉り取った後がある。

そこから健二を襲ってきたのであろうか？

今それを考える余裕は無かった。

化け物はまるで狂気に満ちたように腕を振り回し獲物を探している
からだ。

「早く・・・にげる!」

恵が声を発すると一目散に通路を駆け出す四人。

「おい、いくぞ!」

「は、はい」

傷ついた健二の肩を飛鳥と智弘が抱えるように持ち上げると
二人で呼吸をあわせ、通路を走りだした。

(・・・いざと言う時か。落ち着け、私は冷静だ・・・)

後方で叫ぶ化け物を尻目に走り出す恵の心の中で
ワゴンの中で思っていた心の葛藤が深く鼓動していた。

- AM 2時42分 警察署1F 十字路

恵を先頭に十字路まで逃げてきた四人は後方で化け物が
襲ってこないか確認しながら逃げている。

逃げる最中にチラチラと目に飛び込んでくる壁の落書き。

さっきまで暗くてよく見えなかったが、今ならはっきりと見えた

壁のいびつな穴は化け物の戦闘中に飛び散った散弾の跡。

『助けてくれ』と書かれた赤いスプレーのラクガキにまぎれた
それは乾いて赤黒くなっている血液だったのだ。

そこでどんな事があったのか、にわかには信じがたい事実を目にして
恐怖を煽るには十分すぎる赤と灰色が混ざった壁が
まるで今にも襲い掛かってくる化け物を余計に予想させる。

ドグンッドグンッ！

十字路の通路を曲がり走り続ける四人。
恐怖による激しい動悸が全員を襲う中、必死で階段までたどり着い
た。

「早く走れ！」

恵が健二を抱える二人をせかすように声を張り上げる

その時だった

ドガアアアアーン！！

健二を抱えた二人の後ろの壁がいきなり破壊されて
粉塵を撒き散らしながら壁には大きな穴ができる。

その中から出てきたのは、悪夢のような化け物の姿だった！

「……ッ！！」

恵はそれを見るなり後方の三人を置き去りにするように階段を駆け
上がり始めた。

「お、おい待て！置き去りにする気かよ！」

それを見た飛鳥が走りながら階段を駆け上がり始めた恵に
怒号にも似た声を投げかける。

「……（私は冷静だ。迷いなど無い…今はいざと言う時だ！）」
無言で階段を駆け上がっていく恵。

その表情には決意を決めたような張り詰めた感じが見受けられた。

「あいつ……本気かよ！」

無言で階段を駆け上がる恵の表情を見て

何かを悟った飛鳥は、傷ついて苦しそうな健二を見た。

「……あ、飛鳥さん……置いていってください……このままじや」

健二が苦悶の表情を浮かべながら、かすかな声で飛鳥を見て言う。

ガンツ！！！！ガンンツ！！！！

「ガアアツ……ガギャアアアオオオ！！」

化け物がすぐ後ろで獲物を探すように壁ぞいに伸ばした手を打ち付けながら進んでくる。

「そんなことできるか！！僕達親友だろ！？」

恐怖の音が近寄ってくるにもかかわらず

智弘は健二を強く掴み、一歩でも多く前に駆け出そうとしている。

「へっ、昔の俺ならあんたを捨ててでも逃げたさ。だが今は違っぜ」

飛鳥の頼もしい声と共に力一杯健二の体を引っ張りながら階段へと進む飛鳥と智弘。

ドガッ！ドガッ！ガガッ！

決り取るような狂気の音がすぐ後ろまで迫る中
ついに階段まであと一歩というところまで来る二人。

「はあ・・・はあ・・・」

息苦しそくに息のあがる健二。

傷口が相当痛むのか、崩される事の無い苦悶の表情がその必死さを
伝える。

「健二、苦しいかもしれないけどいくよ！」

健二を勇気付ける智弘の表情に迷いは無い。

今までの弱気な表情が嘘のようだ。

「さあ早く上るんだ！一気に駆け上がるぞ！」

飛鳥の足が階段につくと、勢いよく駆け出そうとした瞬間。

ドオン！ガアーーン！

後方から恐ろしい跳躍力で階段の踊り場あたりに飛び出してくる化
け物が！

「うおっ！」

その衝撃音に驚いて前に出ている飛鳥がバランスを崩し
さっきまで強く掴んでいた健二の肩を解かれてしまった。

「ぐっ……!!」

「……うわっ！」

後ろに倒れた健二に覆いかぶさるよつに倒れる智弘。

飛鳥が立ち上がるや否や、化け物は蔓のように伸びた自分の腕を振り回して倒れた健二と智弘に近づいてくる。

「ガアアアア……ガギャッ！」

二つの獲物を見つけたように、化け物の狂気の声が建物中に響く。まじまじと化け物の顔を見ると、銃弾か何かが当たって目が潰れているようだ。

そこから垂れている緑色の液体が、さらに三人の恐怖感を煽る。

恐ろしさの余り動く事のできない二人を尻目に
飛鳥は周辺に転がっていたパイプ椅子を手に、化け物をけん制しようとしている。

「このやろっ!!」

近寄る化け物にパイプ椅子を思いっきり投げつける飛鳥。

ブーン！ドオン！ガシャーン！！

しかしパイプ椅子は化け物を捕らえる事なく、化け物の振り回している伸びた腕にはじかれ、壁際のガラスの掲示板に当たって力なく床に落ちる。

「早く・・・俺を置いて・・・逃げる・・・智弘ッ！！」
床に伏していた健二が、智弘に声をかける。

「嫌だ！おまえだけは絶対助けるんだ！」
恐怖の表情に歪みながらも必死に健二の体を引き起こそうとする智弘。

「ガア・・・ガアアアアア！！！！」

その声に気づいたのであろうか、化け物が健二たちの目の前まで走ってくる。

恐ろしく素早い速度に驚いた飛鳥は、すかさず二人の前に走り出すが化け物の走る速度は速く、まったく追いつけない。

ついに化け物は健二と智弘を捕らえ、その伸びきった腕を上へ振り上げる！

「うわあああああ！」
「も、もつだめか・・・」

智弘が健二をかばうようになかったここに抱き、絶望の表情で目をつぶる。

化け物の一撃が届くこうとした、その瞬間！

ドガガッ！ドガガガガガガッ！

「グガッ・・・ガアアアアアア！」

ズウン！

恐ろしい銃声と共にカランカランという葉莢が床に落ちる音と共に狂気のをあげてその場に倒れる化け物。

「・・・！」

飛鳥が銃声の聞こえた踊り場のほうを見るとそこには恵が煙がまだ出ている銃を持って立っていた。

「私なりに考えた生き残る術・・・『必ず助ける』これが私の答えだ」

踊り場の窓から月明かりがうつすらと恵を照らした。

シナリオ【絶句】 - 5 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【絶句】 - 5

- AM 2時56分 警察署2F更衣室

正体不明の狂気の姿を持つ化け物の登場に

絶体絶命の危機に襲われた健二達を助けたのは

三人を見捨てて逃げたはずの恵が撃ち放った銃だった。

化け物が打ち崩れた、その姿を見て走り出した四人は

2Fの階段近くまで来ていた尾山、五郎、綾香、貴美子、賀居と合流し

賀居の言う『とっておき』があるという更衣室まで来ていた。

意外と広いそのスペースには、壁にそって縦長のロッカーが整然と並んでいて

その奥には洋服掛けが設置しており、手前には白いテーブルが置いてある。

ロッカーの無骨な灰色と壁の綺麗なクリーム色が室内の広さとミスマッチさをもし出している。

この更衣室はどうやら女性専用のもので、

床やテーブル、ロッカーは整頓され、壁や窓にラクガキなどは見えない。

先ほどまで居た、汚れたロッカー室とは雲泥の差だ。

「こんな所にあなただと言う『とっておき』があるの？」

室内に入るやいなや、早速貴美子が疑問を投げかける。

いくら警察署とは言え、こんな場所に化け物に対抗できるような物が

あるとは、にわかには信じがたい。

「まあ待つてなさいって・・・何番目のロッカーだっけな」
賀居は先ほどより体調が良くなったのか、
いそいそとロッカーの周辺を調べている。

「ぐっ・・・いて・・・」

テーブルの上に打ち上げられた健二は尾山の診察を受けている。
上着を脱がされ、上半身の傷を尾山が見ている。

「傷自体は浅いが、皮膚の損傷が激しいな。このままだと破傷風になつてしまうぞ」

尾山は冷静に健二を診断し、背中と腕の傷を見て
自前のジユラルミンケースから処置道具を取り出す尾山。

「少し痛むかも知れんが我慢しろよ」

尾山が傷口に消毒用アルコールを吹きかけようとする
と急にポシュツという空気が漏れるような音が聞こえる。

「・・・こんなときに消毒液が切れるとはな」

尾山の表情が一変し、ジユラルミンケースの中に
予備の消毒液が無いか調べるが、予備も使い切つたらしく
少し落胆する尾山。

「あの・・・消毒液ってアルコールですよ？それじゃあ、これ
使えます？」

貴美子が、持っていた心霊機材の入ったバッグから尾山の療養所で
無断で持ち出したバーボンを申し訳なさそうに差し出す。

「お、お前これは！わしのお気に入りのIWハーパー101プルーフじゃないか！」

尾山が驚いた様子で貴美子を見る。

自分しかわからない院長室の本棚に隠し置いたはずのバーボンが目の前にあるのだ、さぞ不思議であろう。

「お、怒らないでー。い、いちお役立つたんですから」

貴美子のイイワケとも取れる一言を聞いた尾山は

少しあきれたような表情を一瞬浮かべると

バーボンの蓋をあけ、おもむろに口に運ぶ。

「あの尾山さん、バーボンなんかで消毒できるんですか？」

綾香が後ろから声をかける。

「うっ・・・げほっ！お嬢さん、消毒液といえどもアルコールはアルコールなんだよ。つまり、少なくとも酒には微量ではあるがエチルアルコールという消毒用アルコールが入っているんだ。心配ないぞ、わしに任せておけ」

バーボンを口に含ませようとしていた尾山は、綾香の質問に少し動揺しつつ、再びバーボンを口へ運びはじめ。

「グビグビ・・・（これはやはり利くのう）」

いつの間にか尾山の喉の鳴る音が聞こえる。

その音に気づいた他の人間が尾山を見つめると

尾山が少し「しまった」という顔をする。

「・・・うむ！なかなかいいアルコール濃度だ！」

飲んでしまったことをごまかすように、医者らしい台詞を吐く尾山。

「よし、次は本番じゃぞ」
再びバーボンを口に含む尾山。

「あの……」
しかし、その後ろで綾香が救急箱を持って尾山に何か言おうとしている。

「あの尾山さん……その……」
何か言いたそうなその表情、すうーと息を吸い込むと綾香はついに尾山に向けていいたかった言葉を放った。

「消毒液！救急箱にありましたけど……！」

「ブーーーーッ！」
今まで口に含んでいたバーボンが尾山の口を離れ、更衣室の宙に霧状にまった。

5分後

健二の処置も終わり、救急スプレーで傷を乾燥させていく尾山。

少し落ち着いた様子の健二を見て見守っていた綾香や智弘の表情も緩む。

「だいぶ・・楽になりました尾山さん」

健二が、自力でその場から起き上がり智弘の肩を借りて地上へ降りる。

「健二・・・大丈夫なの？」

まだ顔色の悪い健二を心配そうに見つめる綾香。

「ケホツ・・もう大丈夫だ、それより賀居さん・・とっておきつてのは？」

健二が智弘の肩を借りつつ、ロッカーを見ていた賀居に声をかける。

「ここにあるものでな・・ちょっと手を貸してくれ」

賀居は真ん中くらいにあるロッカーを指差すと、五郎に目をやりロッカーの横に立ってロッカーのドアを開けるように指示する。

「皆離れてくれ。五郎君、思いっきり引いてロッカーごと倒してくれ、こここの裏にあるんだ」

「・・・は、はい。いきますよー！」

賀居が指示するように、ロッカーの横に立つと思いつきりロッカーを倒す五郎。

ドン！ガタガタッ！

ロッカーを倒すと、そこには人為的に作った長方形の穴が空いておりその穴の中には横長の頑丈そうな黒い金庫のようなものが置いてあった。

「こ、こりゃなんだよ!？」

黒い金庫を見た飛鳥が声を上げる。

「フツ、隠し部屋ならぬ隠し穴か」

飛鳥の声に反応するように少し笑みを浮かべながら恵が言う。

「それは見てのお楽しみつと・・あけるぜ」

賀居がポケットから、さつき手に入れた電子キーのようなものを取り出し、黒い金庫の鍵穴にスーッと通す。

ピーッ ガチャン

電子音を立てて鍵が外れたことを知らせる黒い金庫。

「みてくれ・・これが俺のとおっておきさ!」

賀居が黒い金庫の扉を思いっきり開けると

そこには一般人が見たこともないような多くの銃が入っていたのだ!

「・・・これは凄い!全部ほんものですか!？」

八人の中で誰よりも驚いていたのはガンマニアの五郎だった。今までモデルガンやエアガンでしか手に取ることのできなかつた拳銃、突撃銃、自動小銃、狙撃者が持つようなライフルまであるのだ。

ガンマニアの彼の目には、まさに宝の山と言える。

「本物だよ。まったく疑り深い奴だな」

子供のように喜ぶ五郎を見た賀居は、ゴソゴソと金庫の中の銃を探り出した。

「しかしなんでまたこんな所に銃を隠しているんだ」

恵が冷静に質問をする。

「日本じゃ一応、こういうものにも銃刀法つてものが適応されるらしくてね

家に隠してたんじゃこっちが捕まっちゃうから誰にも見つからないような

女子更衣室のロッカーの裏に隠したのさ。丁寧に壁に穴までほってね」

質問に答えるように淡々と語る賀居の手には数点の銃が握られている。

「しかし・・・一介の刑事さんが持つコレクションにしては随分多いような」

健二が最もな意見を言う。

たしかにこの量、尋常じゃない。

まるでどこかのマフィアと戦争でも始めるのかというほどの数量だ。

「ほんのアルバイトさ・・・まあそれが一つの理由で、こんな掃き溜めに追いやられているんだが・・・とっ！」

喋り続ける賀居が金庫の奥から三つの拳銃を取り出す。

「気に入りの【S & W 36】一挺と【37】二挺だ、お嬢さんが持つには最適な銃だろう」

賀居の手に握られた三挺の小型拳銃、タバコの箱くらのサイズの銃弾が五発装弾できるリボルバータイプの携帯小型拳銃。

重量554gの36と415gの37、女性でも扱えそうなその銃を綾香と恵に渡す。

「ほ、ほんものの銃なんて・・・ボクは体力ないからこれでいいよ」
貴美子に36を渡そうとした瞬間、智弘が手を差し伸べ奪うようにして36を手にする。

「私、もつと重い銃でいいですよ。こう見えて力持ちですからー」
貴美子もつと重い銃をとせかすので、賀居は金庫の手前の棚からさっきの細身なりボルバー銃とは違い、黒く重そうな金属の塊をまとった怪物のような銃。その名も【デザートイーグル】

市場でも人気の高い44マグナム弾対応の作動が安定している銃だ。通称ハンドキャノンとも呼ばれ、マグナムピストルの一角を担う人気の一品だ。

「撃つときは気をつけるよ、多少の反動は軽減されているが、一発で肩が持つてかれかねないほどの銃だからな」

賀居は、貴美子にそう言うのと再び奥から銃を取り出す。

「飛鳥さん、あなたにはこれがいい」

賀居が飛鳥に差し出したのは【ベレッタM92】だ。

言わずと知れた安定拳銃。反動も少なく女性でも撃てるその安全性15発と装弾数も多いので、化け物相手には頼りになるだろう。

「こりゃいいぜ、なあ刑事さん。もう一つくれよ」

「二挺もつと重いぞ？まあ余ってるからいいが・・・」
飛鳥が賀居に要求すると、容易にもう一挺を差し出す賀居。

「へっ、これで二挺拳銃だぜ！」

喜び勇む飛鳥を尻目に、再び金庫の中から銃を取り出す賀居。

「五郎君、君の体格ならこの銃を扱えそうだな」

取り出したのは大きめのガンケースにしまわれた【HKG3】だった。

ガンショップ栗木で手に入れた改造エアガンの【HKG3】とは違い兵器としての匂いがプンプンする重量感。

いくつもの後継機を生み出した名銃が今、五郎の手の中に納まっている。

「わしはこれにする」

尾山が金庫の棚からとったのは【コルトガバメント】

正式名称は【コルト45オート】

世に出てもう100年、だがなお失せる事の無い風格は本当の実力を秘めている。

「さて、全員武器は決まったが・・・」

賀居が少し悩むような顔をする。

たしかにこのまま待っていても助けが来るわけでもない。

かといって脱出路が確保されているわけでもない。

化け物と戦う武器は手に入った、だが弾も無限ではないし

いつまでも無傷で戦えるわけが無い。

カリカリカリカリ・・・

その時、更衣室の壁から何か異質な音がした。

「なんの音だ・・・？」

沈黙していた九人の耳には、まるでネズミが木の柱をかじるような不快感を覚える音がよく聞こえる。

ガリガリ・・・ガリガリ・・・

「音は・・・壁から・・・？近づいてくる？」

少しずつコンクリートの壁から聞こえてくる異質な音。

ガリッ！ガリッ！ガリッ！ガリッ！ガッ！

・・・ガタガタガタガタ！

さらに大きな音を立てて壁から聞こえる何者かの音は
ついに室内の壁を振動させて、ロッカーを震わし
全員の感覚をとらえた！

「・・・全員・・・この部屋からでるんだ！！！！！！！！」

賀居がそういうと、とっさにドアを開けて
更衣室から出る九人。

その時だった・・・

ガリ・・・ズゴオオオオオン！

更衣室の壁を破って吹き飛ぶロッカーを後ろで見ながら
九人の目にちらりと見えたものは、どうしようもない絶望そのもの
だった。

シナリオ【絶句】 - 6 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【絶句】 - 6

- AM 3時07分 警察署2F中央通路

更衣室の綺麗なクリーム色のコンクリートの壁を打ち破ってきた化け物。

ギラギラとした爪を光らせ化け物の発する狂気の咆哮が闇夜の警察署内を包む。

その化け物を後ろで見ながら、九人は当てもなく通路を走りぬける。

賀居を先頭に智弘が傷の癒えていない健二に肩を貸し
ジュラルミンケースとガバメントを持った尾山と共に一番後方を走っている。

「さつき倒したんじゃないのかようー!!」

健二に肩を化しながら智弘が悲鳴にも似た声をあげる。

ポケットの中にしまったS&W36が走るたびに小刻みに揺れる。

「アイツに銃は利かないってことか・・・?」

智弘の肩を借りながら走る、健二が化け物の性質を冷静に考える。

「逃げた先逃げた先!化け物かよ!俺達まったくツイてねえよ!」
飛鳥が必死に走る中、二挺もったベレッタが重く感じる。
やっぱり一挺にしておけば良かったと少し後悔しながら

闇雲に通路をひた走る。

「一体何処へ向かって走ってるんだ！」
恵が先頭を走る賀居に声をかけると後ろで壁を削るような音が聞こえる。

ガリッ！ガリッ！ガリッ！バキッ！ドガー！ツッ！！

「更衣室のドアが破られたぞ！」
恐ろしい音と共に最後方にいた尾山が横目でさっきまでいた更衣室を見ると

ドアが物凄い力で抉られ大きな穴が開いたドアが化け物の恐ろしい力に
耐え切れなくなり、そのまま宙を待つて壁に激突していた！

「ウボウアアアアアア！！」

化け物は潰れた目で九人を探すように首をクルクル回し
壁にゴムのように伸びた両腕と鋭利な爪をたたきつけてまるで
除雪車が雪を掻き分けるように壁を削りながら九人に近づいてくる！

ガリッ！ガリッ！ガリッ！ガリガリガリガリ！！！！！！

化け物の爪の先から飛び散るコンクリートの破片が周辺にばら撒かれあたりをまるで深い霧のように包む恐ろしい量の粉塵が巻き上がる！！

九人の必死な足音をかき消す、化け物の壁を削る音が逃げている九人の焦りと恐怖を煽る。

「ちよつと！追いつかれそうよ！」
後ろを向いて走っていた綾香が

「いいから早く走れ！」
先頭の賀居が後ろを見ることなく通路正面の署長室へと傷を負った体でありながら、さらに加速する。

「ウボオオオア！ガアアアッ！」

ガッ！ガリッ！ガッ！ガリッ！ガッ！ガッ！

壁に突き刺さった爪を反動に、九人との間を詰める化け物の足はすでに宙に浮き、まるで飛ぶように恐ろしい速度で迫ってくる！

「そのこの部屋へ飛び込め！」
賀居が署長室と書かれたプレートのある場所のドアを開けると

化け物が健二と智弘を捕らえようとしていた！

「ウボオオイイイオオオオア！」

ギョルガリッ！ガツン！

「うわっ！」

化け物の爪が健二の足の一步手前に大きな穴を開ける！

粉塵と風圧が上着を捕らえ、恐怖の一撃が智弘と健二に迫る！

署長室までは、あと数メートルだというのに化け物は

すでに後ろで腕を上げ、更なる恐ろしい一撃を繰り出そうとしている！

「早く駆け抜ける！」

綾香と貴美子、恵が署長室に入ると賀居は後ろに迫る化け物の腕めがけて

すかさずシグザウエルP226を構えると、即座に発砲する。

ズドオン！ドオン！

鉄鋼弾は化け物の伸びきった腕を捕らえ、すかさず撃ち込んだ二発目は

化け物の長くとがった爪に着弾し、化け物の鋭い爪は通路の奥へ軽い金属音を立てて吹っ飛んだ！

「ギャオオオオウアアア！」

「今のうちに中へ！！」

賀居がそう言うとドアの中へと駆け抜ける5人。

ガガガガガッ！ガガッ！

撃たれた腕と指先の衝撃で後方へ少し体勢が後ろへ下がる化け物はもう片方の腕を壁にたたきつけて、崩れた体勢を最小限に食い止めた！

今までの化け物なら、そのまま地にふして倒れるはずの箇所に正確に銃弾を撃ち込んだはずなのに・・・化け物はその場から再び狂気の姿で

襲ってくる。

「ばかな・・・なんて反射神経だ」

今まで恐ろしい力だけだった化け物の、そのらしからぬ行動に少し手元が震えながら、さらに銃弾を二発三発化け物に撃ち込んでドアの中へ入る賀居。

キィー・・・ガタン！

重い金属のドアが閉じられると化け物が猛り狂うように腕を振り上げた！

ガンッ！

ドアの金属音だけが恐怖を煽るように室内に響いた。

- AM 3時10分 警察署2F署長室

署長室へ急いで入ると、壁はさっきの更衣室とは違い冷たく硬そうな灰色の金属で覆われていた。

中には署長がいくつものファイルが入った本棚があり黒塗りのテーブルには何枚かの書類と共に【署長】と書かれたプレートが置いてある。

誰かと争った後だろうか？とところどころに書類が散らばっている。

「おい！こんな所にいたらさっきの化け物がまた壁を破ってくるぞ！」

恵が少し額に汗を浮かべながら、いまだなり続けるドアの金属音に恐怖をかき立てられ、賀居に説明を求める。

「・・・安心しな、ここの壁はチタンで出来ているんだ。いくらあの化け物だつてそうやすやすとぶち破れるシロモノじゃない」
賀居はそういつと署長室の床をくまなく探し始めた。

「だけど、あの化け物・・・どうやって私達の場所を」
綾香が少し冷静にさっきの更衣室のことを思い出した。

化け物の目は戦闘で潰れていた、しかし1Fでは
健二や智弘の動きを見えてるかのように瞬時に見切り
一撃を加えようとしていた。

なぜだろう、と考えていると尾山がジユラルミンケースを
あたりに置き、少し悩み始めた。

「・・・尾山さん？どうしました」

「・・・」

五郎が話しかけると、無視というよりは聞こえないといった表情で
少し思いつめた顔を浮かべる尾山。

「・・・コウモリと同じだ」

尾山はスーツと空気を含むと、重たく閉ざした口を開きだした。

「コウモリ？」

「あいつの目は塞がれていた、化け物として失明した状況で獲物を探
すのは困難だ」

怪訝そうな顔をする智弘を尻目に、淡々と語りだす尾山。

「しかし化け物に嗅覚はほとんど無い、自分の腐臭と同じ多くの化
け物が居る中で人間を嗅ぎ分けられるはずがない。予測だが、あの
ただれた皮膚を見る限り触覚さえないだろう」

「後残るのは・・・聴覚？」

尾山の淡々と語る口調から予想して綾香が言う。

「その通り。奴は自分の声の中に特殊な音波を発生させて人間という物質に反響させて、その耳で我々を探しているのだ。ゴムのように伸びた腕や驚異的な跳躍力を持っている足は、それに合わせて進化したのだろう」

尾山の思いつめた顔は、さらに暗くなり

いつの間にか口調も淡々と言うよりは、一言一言暗く重くなっていく。

「尾山さん、ガンシヨップあたりから少し疑問だったが、なんであんなそんなに化け物に詳しいんだ？」

その時、智弘の肩を借りながら健二が発言した。

「・・・私が見た患者だからさ」

尾山がそう言うと、後ろの床を探していた賀居のスーツの中から音がする。

ピーッピーッ・・・!

耳につくような電子音が室内中に響き渡ると

音に気づいた賀居が、胸ポケットから小さな集音機材のようなものを出す。

「After a long time, and mate (久しぶりだな、相棒)」

「...good... You are alive (良かったわ、あなたが生きててくれて)」

集音機のスイッチをいれると電子音が止み

賀居は急に英語で誰かと話し始める。

「Maybe, though it is thought that it notices because of you. Come to the place that exists on the tip of drainge of whicheverything expands from underground in the interrogation room in the police station the rea and give to me. (たぶんあなたの事だから、この事件に気づいていると思うけど、その警察署の取調室地下にある下水の先にあるところまで来て頂戴)」

「It has under stood roughly. It goes straight. (わかった。直で行くぜ)」

この場にそぐわない異質な会話が二、三繰り返されると少しの沈黙が続く。

「智弘わかるか？」

「なんとなくは・・・」

健二と智弘が英語を聞き耳を立てて聞いていたが、内容までは聞き取れなかったようだ。

「ねえ賀居さん。出口は見たところ一つしかないし、これからどうするの？」

そんな沈黙を破るように、貴美子が賀居に話かける。

たしかに室内には外へ出る出口が、さっき入ってきたドアくらいしかない。

チタンの壁といい、署長の趣味なのであるうか？

普通あるべき窓や脱出できそうな排気口は、この部屋には無いのである。

「俺がなんでこの部屋に飛び込んだと思う？」

集音機から聞こえてきた会話で、少し余裕が出てきたのか賀居の口調や表情にはさつきまでの暗さはない。

「それは、この部屋の壁の材質がチタンで、化け物も打ち破る事が出来ないと踏んだからじゃないのかい？」

二人の会話に入ってくるように、健二を抱えながら智弘が発言する。

「半分正解・・・半分は・・・これさ」

賀居はそう言うと、署長室の机の横にあるスイッチを押すと床に敷

いてある
チタンが移動しはじめる。

ガタンガタン！

「?!また仕掛けか!?!」

驚く八人を尻目に、いつの間にか床は、まるでパズルのように移動し始め

床の一角には一つのとって付きの金属のドアが見える。

「これがもう一つのとっておきさ」

賀居はそう言うと、金属のドアをあけ

その下にある穴の中へタラップを伝って降りていった。

「とにかく、行くしかない・・・だろう」

健二がそう言うと中へ入ってゆく。

「ロッカールームの穴といい、警察署って言うより、まるでからくり屋敷ね」

綾香が健二に続くようにタラップを降りてゆく。

・・・カンカンカンカン

他の六人も穴の中へタラップを使い降りてゆく。

- AM 3時19分 警察署1F取調べ準備室

タラップを降りると、そこは灰色のコンクリートの壁で覆われた部屋だった。

白く塗られた床には何の用途で使うかわからないハッチが一つあり、ガラスではない透明の物質で出来た窓から白いテーブルと椅子が二個見える。

どうやら、ここは取調べの状況を見る部屋のようなのだ。

「ここは取調室・・・ということは1Fか」

最後尾から来ていた尾山がジュラルミンケースを降ろし、ようやく地上に降りる。

「ここからどうやって逃げるの？」

「その床にハッチがあるだろう、その下からさ」
「そういつと賀居は即座に床にあるハッチを開けて
下にある円筒の穴をタラップを使って降りてゆく。」

ハッチの下からは化け物とは違った異臭を放っている。

「・・・む（これは・・・？下水？）」

下のほうで、かすかに聞こえる水の流れの音を聞き、さつきより冷静になっていた恵が予想し判断する。

「くせえな、あの化け物といい勝負だぜ」

飛鳥が恵の次に文句を言いながらタラップを降りてゆく。

「ヘックシユツ！・・・寒いな・・・」

健二はさつき走ったときに若干汗をかいていたのか濡れている服にあたる風の寒さに、鼻をすすりながらタラップを降りていった。

他の五人も前の人に続くようにタラップを降りてゆく。

全員が降り終ったその時、準備室のコンクリの壁から何かの音がする。

カリカリ・・・カリカリ・・・

「ウボオオオオオ！ウガアアア！！」

ガリガリ・・・リ・・・リ・・・ツ・・・

下水に降り立った九人は、遠ざかる化け物の狂気の咆哮を聞いて絶句し再び沈黙すると、そのまま一斉に走り出した。

シナリオ【絶句】 - 終了 -

シナリオ【脱出】 - 1 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【脱出】 - 1

- AM 3時21分 警察署地下 下水

化け物の咆哮が響き渡る警察署から脱出を図る九人。

もう何時間この恐怖の中を走り続けてるか、わからない。

徐々に体を蝕んでいく疲労と強烈な臭気に襲われて

確実に近づいてくる死の音に怯えながら、九人は一縷の希望を胸に抱き

一歩でも多く、前へ前へと踏み出すのであった。

警察署の取調準備室のタラップから、地下へと降りた九人は

等間隔で電灯がつく薄暗い通路が続く、悪臭たまたよう下水へと歩を進めた。

通路の壁は薄汚れ、床はまるで泥地のようにぬかるんでいる。

「化け物の声が聞こえなくなった・・・どうやら逃げ切れたようだぜ」

通路の最後方を走っていた飛鳥が、今まで走ってきた通路を横目で見ながら

少し歩を緩め、肩で息をするようにゼエゼエと呼吸を荒げながら歩く。

「足元に気をつけるよ、ここは意外とぬかるんでるからな」

先頭を歩く賀居が、胸ポケットから拳銃を抜き取ると

その場に止まりながらマガジンに弾を補給していく。

「掃き溜めの警察署の下には下水か・・・ジョークにしては出来す

ぎだ」

尾山が皮肉めいたことを口にする。

考えてみれば、たしかに滑稽だ。

掃き溜めと呼ばれた警察署、化け物に占拠されたその異質な空間の下には

この世の終わりとも思えるほどの悪臭が漂う下水があったのだ。

尾山は、この事実には嘲笑するような表情を浮かべ、白衣にしまったガバメントのグリップを強く握り締めた。

「・・・」

そんな尾山を見て、五郎は警察署での尾山の話の思い出ししていた。

『私が診た患者だから』その言葉から想像できる最悪の状況を考えていた。

もしや、自分が守ろうとしている仲間の一人に、

この事件を引き起こした犯人がいるのかもしれないという事実がさつきまで満ち溢れていた五郎の正義感に少しずつ亀裂をいれられていた。

「暗い・・・汚い・・・臭い・・・」

「もうウンザリだわ・・・早く帰りたいたい・・・」

智弘と綾香は鼻が曲がるような下水の悪臭と、靴越しでもわかるまるで粘液のような床の汚れ具合に不快感をあらわにしている。

潔癖症の智弘でなくとも、その汚さには不快感を煽られるものだ。

「この下水はいつたいななんだ？普通の下水と比べて清掃具合から言ってあまり使ってなさそうに見えるが…それと、さっきの無線の意味はどういうことだ」
先頭を歩く賀居に恵が問いかける。

「この下水は、十年も昔に警察署の要望で作られたものでね、一帯の通常区域の水路とは独立していて普段は立ち入り禁止なんだ。だから指定の清掃区域にもなってなくてこの汚れっぷりさ。掃き溜めの下にあるには丁度いいだろ？」

拳銃の弾丸を補充しながら、少し嘲笑気味に話す賀居。

「ちなみに独立したこの通路を通ると、この先の建物と直接繋がっているんだ。さっきの通信はその先でアメリカ研修時代の俺の相棒が待ってるって話さ」

淡々と語るその口調の奥に喜びの表情が見える。
相棒と呼ばれたその人が、よほど懐かしい人物なのだろうか？

「その先にあるものは・・・なんなんですか？」
健二がぬかるんだ床に気をつけながらこちらに向かって話しかける。

「・・・聞いて驚くなよ・・・？自衛隊の基地さ！」

プーッ！プーッ！

下水管の空洞の中で電子音がエコーとなって鳴り響く。

賀居はポケットから機材を出すと、呼応するように口元へもってゆく。

「噂をすればなんとやら・・・How did you do?」
「どうした?」

「Let's join in that it is not possible to wait toward the know with the boat.」(待ちきれなくて今ボートでそっちに向かってるから、そっちで合流しましょう。)

「・・・OK・・・waiting・・・」(OK、待ってるぜ)

ピッ

流暢な英語が飛び交う下水の中、不安な八人をよそに

余裕の表情さえ浮かべ始めた賀居は機材を再びポケットにしまいこんだ。

「・・・さて、迎えが来る前に少しでも化け物から離れておくか」

下水の異質な雰囲気と共に再び、ぬかるんだ通路を歩き出す九人だ

った。

- AM3時35分 下水 区域結合部

ぬかるんだ通路を10分ほど進むと、下水の奥から轟音を立てて勢いよく流れる水の間が聞こえる。

どうやら区域同士の下水を一箇所に集めて流す結合部のようだ。通路から見ると、一箇所に流れる下水はまるで滝のように流れている。

通路から結合部までの高さは数メートルと言っているところだが、その水流の勢いから

落ちたらまず助かる見込みは無いだろう。

ぬかるんだ床を慎重に進む九人。

その表情は悪臭に歪み、すでに全員の疲労はピークを達している。

「はあ・・・はあ・・・」

健二が荒々しく呼吸し苦しそうな声を上げる。

「健二、大丈夫？」

心配する綾香を尻目に前に進み続ける賀居達。

「そろそろ来てもいい時間だが・・・」

賀居がポツンとつぶやく、どうやらここが合流地点らしい。

・・・オオオオン・・・ブオオオオン！

その時、前方からエンジン音が聞こえる。
どうやら賀居の言う相棒の乗るボートが来たらしい。

「やったー！これでこんな場所からはオサラバできるのね！」
貴美子の元気な声が、疲労困憊の全員の耳に届き
暗く、やつれた表情に少しだけゆとりをさせた。

ブウウン・・・ドツドツドツド

水路の奥から、下水を書き分け
軍用ボートであろうか？少し幅のある大きめのモーターボートが
水流がなるべく少なくなっている幅の広い下水通路の横につけるよ
うに止まる。

ボートの運転席には重圧そうなガスマスクをかぶり
黒いライダースーツに身を包んだ人間が乗っていた。

「After a long time . Ayum (久しぶりね、
アユム)」

ボートからライダースーツの人間が英語で話しかけてくる。
ライダースーツの上から見る体格と声の感じから女性であると思わ
れる。

やはり、先ほど賀居と連絡を取り合っていた相棒だろう。

「Kelly . . . indebted . . . (ケリー、お世話になる

よ)」

親しそうに声をあげる賀居。

英語でよくわからないが、その落ち着いた声からよほど信頼している相手らしい。

「The talk is a back . Everyone gets on . (話は後よ、皆乗って頂戴)」

ケリーと呼ばれたライダースーツの女性は皆に手招きするとボートに乗るように指示する。

言われた通りに、ボートに乗る九人。

ボートの中は外から見るとより広く、九人が座っても案外余裕があるようだ。

黒を基調に赤いマークの入った船体には、けたたましい音を立てながら後部エンジンがアイドリングしエンジンの横には黒く輝く1mほどの散弾銃であろうものが二挺転がっている。

女性が持つには大きく無骨すぎるが、どうやらケリーの愛銃らしい。

ケリーは全員が乗ったことを確認すると

ボートのハンドルをきり、幅の広い水路をUターンする。

ドッドツ・・・ブウウン！

けたたましいエンジン音が下水の中でエコーするように響いてゆく。

数分後

ボートは下水を走り続け、乗船している九人にも落ち着きが出てきたようだ。

「ケリー、そろそろこの街がどうなっているか、話してもいいだろう?」

賀居がそう言うと、まるで知っている事柄のように

ケリーは暗い顔をする。相当辛い事らしい。

「いったいこの街で、何が起きているんですか」
すると健二が、そこに居る誰もが聞いたかった一言の質問を投げかける。

ケリーは少しためらうように息を吸い込み、口を開き始めた。

「It is awful and frightens it.
It is not about hope. Hopeless
nightmare)ひどく恐ろしくて、希望の無い、絶望的な悪夢よ」

「・・・?」

英語に疎い健二には内容がよくわからなかった。

その場に居た賀居に目配せすると、賀居も気を使うようにケリーに言った。

「Kelly . It plainly asks every one in Japanese . (ケリー。皆にわかりやすく日本語で言ってくれ)」

賀居がそう言うと、ケリーはガスマスク越しに少し笑ったように見えた。

「・・・フツツそうね、ここは日本だもの。郷に入れば郷に従え、良くアユムに言われたわ」

ケリーが賀居を見ながらマスク越しに高らかに笑い始める。

アメリカ人らしいその笑い声は、この恐怖の現状に対しては少し異質に感じる。

「まず・・・そうね、普通の市民が化け物になってしまった理由から話そうかしら」

話しながら、少し曲がった水路を見事なハンドルさばきで直行していくケリー。

「あれは・・・ウイルス性特異身体成長がもたらした、人間のなれの果てよ」

少し口調がゆっくりになるケリーを尻目に、少し目をそらす尾山。
『耳が痛い』と聞いたげな表情だ。

「ウイルスの名前はEvolving horrific killer virus (進化する殺人鬼ウイルス)。通称Kウイルス。」

厄介な事に空気感染するタイプよ」

「空気感染するのか・・・」
「がつくりと肩を落とす恵。」

予想はしていたものの、自分自身もあんな化け物と同じになってしまうという絶望感が彼女を包んだ。

しかしケリーは気にすることなく、淡々と話し続ける。

「Kウイルスは体内に入ると、二、三週間の潜伏期間を経て発症するんだけど、ある一定の条件で爆発的に増殖するの」

「・・・ある一定の条件？」
五郎が質問する。

駅前での出来事や、自分の先輩の巡査がああなってしまっにはそれなりの理由があると思っていたからだ。

「それはね・・・体内の温度変化よ」

「温度変化って・・・？どういうことなの？」
貴美子が、眉間にシワをよせて質問する。

「それは、体温が38度を超えると・・・」

・・・カリツカリツ・・・ガリガリツツ・・・

その時、後ろで何かが削られるような音が聞こえた。

「……ッ？今、何か聞こえた？」

何かに気づいたケリーはボートのバックミラーを覗き込む。

「……お、俺にも聞こえたぜ」

音を聞き、少し焦りの表情を浮かべる飛鳥。

まさか。と自分の心に言い聞かせながらも、どうしても警察署のこ
とを思い出してしまう。

あの化け物が、近づいているのか？

320

カリカリツツ……ガリガリガリガリツ……

音は次第に大きくなり、まるで何かを削り取っているように聞こえる。

バックミラーを覗き込んだケリーは、少し息を詰まらせると

皆に聞こえるように叫んだ。

「皆！！！！何かにつかまっていて頂戴！！！！」

そう叫ぶと同時に、さっきまで静まっていたボートのエンジンは再び爆音を上げてうなるスクリュー音と共にボートを前へと進ませだした！

ガガガッ！！！！ガリガリガリガリガリガリッ！！！！！！

「ウボオオオオオオ！ウボッオオオオオオ！」

再び、狂気の声が下水中に響き、恐怖の鼓動を刻み始めた。

シナリオ【脱出】 - 2 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【脱出】 - 2

- AM 3時40分 下水路

下水路を突き進む幅広のモーターボートのエンジンが爆音を上げて
うなる

けたたましいエンジン音と共にスピードを増したボートは
迫る化け物から必死で逃げようと、異臭のする下水を走り続けた。

後ろから迫る化け物が放つ狂気の咆哮と壁を削るような、異質な掘
削音。

それは九人の顔を再び恐怖に引きつらせていた。

ブオオオオオン！

「こんなときに・・・くそっ・・・！」

スピードを上げたボートの縁に手を置きながら

衝撃で傷口が広がらないように片手で腕を押さえる健一。

「化け物め！来るなら来てみる！」

激しく波打つ水路の下水をバツクに、賀居が拳銃をかまえると

薄暗いライトが照らしだしている後方に

化け物が出てきてもいつでも射撃できるように狙いをつけている。

「・・・ここまで来てやられるわけにはいかない」

ボートの前方からくる風の抵抗を体で感じながら

五郎が素早く両手でHKG3を安定させるように構えた。

何か吹っ切れたような、まるで覚悟とでも思えるような張り詰めた表情からは、微塵の迷いも感じられない。

今は、誰がこの事件を引き起こしたなんて関係ない。守るべき人が目の前に居る限り、このゆるぎない正義感をただただ襲い掛かる恐怖へとぶつけるだけだ。

ガッ……！ガッ……！ガッ……！ガッ……！

「ッ？！あの壁を蹴るような音は……！？」

先ほどまで聞こえていた掘削音とは違う、まるで壁に物体を打ちつけ、その反動で得て飛び跳ねるような音。

数時間前の化け物とは違う予想を超過した行動、壁に打ち付けられるような音の間隔が短くなっている事それがどういふことか、尾山はわかっていた。

化け物は今なおその形状を進化させ、より効率的な移動方法で我々を迫撃しているという事だ。

ガッ！ ガンッ！ ガンンッ！

「音が近い……来るわよ！」

運転しているケリーが、バックミラーを覗き込むと

下水の暗い電灯に照らされて黒い影が壁と壁を恐ろしい速度で

飛び跳ね、何かを壁まで伸ばし、打ち付けた壁を伝い、うごめきな

こちらのボートとの差をつめている！

暗い電灯に映し出された化け物の姿は、体はより動きやすくなるようにまるで魚のように流線型になり、手がゴムのように長く伸びて、鋭利な爪のついた手のひらからは何本もの鋭利な突起物が生え、足首は逆関節に折れ曲がり、つま先から足指にかけての部分は、大型重機のフックのように折れ曲がっていた！

「ウボオオオオオ！ウボオオオオオ！」

化け物は咆哮を再び水中に響き渡らせると
不快感と疲労、そして恐怖に歪んでいた人間たちを発見した！

ドガガツドガガガガガガガツ！！！！

「うおおお！」

再び壁を蹴り上げ、その速度を上げる化け物を見て思わず五郎が両手に抱えていたHKG3発砲する。

今まで扱っていた玩具のエアガンとは違う本物の兵器の反動が体にしみこみながら、装弾数20発全てを暗がりの化け物の体めがけて撃ち放った！

チュイン！チュイン！

外れた銃弾が、壁を直撃し、勢いを失っていないかった銃弾が跳弾する音が聞こえる。

さすがに動きの早い化け物相手に全弾命中とまではいかなかったが五郎の正確な狙いをおびた弾丸は化け物の体めがけて飛んでゆき、化け物の右肩から左手にかけて横一線になぎ払うように着弾した！

「やったの！？」

貴美子がボートの縁に手をつけながら、五郎に言う。

「・・・手ごたえはありましたか？」

五郎がボートから身を少し起こし、目を細め暗がりの奥に目をやる。

・・・ッ！・・・ンッ！・・・ガンッ！

「・・・どうやらまだのようです！」

化け物が一瞬眼前から消えたような気がしたが、後ろから再び鳴り響く掘削音が、それが錯覚だったことを教えた。

「出口までまだあるぞ・・・こりゃヤバイな」

少し焦った顔を浮かべる賀居。

眼前で飛び回る脅威の進化を遂げた化け物を見て

再び強く銃のグリップを握る。

「ウボオオオオオ！ボオオオオオ！」

ガッツ！ガッツ！

化け物はボートから1、20m先の壁をすでに捕らえている。

水路の先を見る限り、ストレートな直線が続いている。

ここで追いつかれてしまったら、逃げる場所など彼らにはない！

「くそっ！なんて速さだ！狙いがさだまらねえ！」

飛鳥がベレッタを片手に持ちながら、化け物をけん制しようと

狙いを定めようとしている。だが、化け物の速度は

肉眼で追うのもやっとで、その黒い影が壁を突き放ち

宙に浮くたびに見ているもの全員に恐怖を与え続ける。

「うわああ！もうだめだ追いつかれる！」

「泣き言いわないの！ココまで来たんだから！」

智弘が悲壮な声を上げると、付近にいた綾香が声をあげ体を起こしポケットにしまってあった銃を握らせる。

目から涙を流し、悪臭のために出てきた鼻水をすすりながら智弘はS&W36を手に化け物に狙いをつける。

「くっ！」

ドオン！ドオン！

智弘たちの隣で沈黙し、ただ迫る化け物の姿を目で追いかけていた
恵が

構えていたS&W37のトリガーを引き、化け物めがけて発砲する！

チュイーン！チュイーンッ！！

「ギャボオオオオオ！」

「・・・？当たったのか？」

放った銃弾は化け物の顔面の近くの壁に着弾するが
なぜか化け物は飛ぶのを辞めて、壁に張り付いたまま苦しんでいる
ように見える。

「当たっていないのに・・・コウモリのような化け物・・・まさか
！？？」

健二は何か思いついたように賀居の近くまで移動する。

「オボオオオオツ！オボオオオオオ！」

苦しんでいた化け物が再び体勢を立て直し、ボートに向かって飛んでくる。

「賀居さん！ヤツの耳か、付近の壁を狙ってください！」
健二が、銃を構えている賀居に叫ぶような大声で言う。

「耳？どういうことだ!？」
賀居が一瞬健二のほうへ振り返ると、化け物は一瞬体全体をかがませ身構えると、こちらに向かって一直線に飛んできた！

ブーン!!!ブーン!!!!バキッ!

化け物は二本の腕を振り回すと、威力を高めて横なぎの一撃を繰り出した!

「ぐっ!!!」

「うおっ!?!」

最後に座っていた飛鳥と尾山が間一髪で
化け物の長く伸びた腕から逃れるように身を一瞬かがませ、一撃を避けた!

しかし、化け物の手のひらの鋭利な突起部分が船体の縁に当たり
まるでオガクズのような粉塵を上げ削られる!
どうやら化け物の突起部分は鋭利な上にドリルのように高速で自転

していたようだ
削られたところは、見るも無残な惨状を残している。

その光景を見て避けるのが後一步遅かったらと考えると尾山と飛鳥はゾツとした表情を浮かべた。

「何やっているの！撃つのよ！」
運転席でケリーが叫ぶように呆然とする飛鳥と尾山に言う。

「くらえ！」
そう言われた貴美子が、化け物めがけて持っていた
デザートイーグルのトリガーを引く！

ズドオオオン！

「ツッ！」
恐ろしい爆音と共に銃を撃った驚愕の反動が貴美子の腕にのしかかる。

「ウボオオオ・・・！」

銃弾は化け物の胴体に着弾すると
さすがの化け物も体勢を崩し、水路に音をたてて落ちてゆく。

だが化け物は下水路に落ちると、まるで何事も無かったように今度は水を蹴るようにして、こちらに向かって泳いでくる！

モーターボートの速度を超えるほどの速さで再び近づいてくる化け物は

手足に伸ばした突起部分を再び回転させる！

異臭のする下水の中で気持ち悪く回転するそれは

異質とも思われる波紋を水の中に生み出している。

「おい！？当てるのは耳といったな！？」

賀居がそう言っていると、泳いでくる化け物の顔面めがけて銃を構え深呼吸をし、ボートに乗る誰より冷静さを取り戻していく。

「頼むぜ・・・俺の相棒！」

そう言っていると、愛銃シグザウエルP226を化け物目掛けてまるで願掛けでもするように発砲する！

ドオン！ドオン！

数発の銃弾が轟音を響かせながら水上の化け物の体に向かって発射される！

だが、化け物はまるで狙った位置がわかるように体を回転させ顔面に着弾させるのを避けたのだった！

「くっ！なんて反射神経だ！」

警察署からうすうす勘付いていた化け物の異常な反射神経

それが、銃弾の軌道さえも見切れる段階だったならと少し考える間にも

化け物は、すぐ手前まで近づいてくる！

ガンン！ズガンン！

「ぐおっ！」

化け物がついにボートの船体に、杭のように鋭利な自分の腕を突き刺して

ボートにのし上がるうとしている。

そのショックで船体が少し揺れ、銃を構えていた賀居は体勢を崩し手から離れた愛銃が床にゴロゴロと金属音をたてて転がってゆく。

「ウボオオオオオオ！！！」

化け物は水路の底にフックのような足をつけると、それをブレーキ代わりに

突き刺した腕を使って物凄い力でボートのスクリーンの勢いを殺してゆく！

「こいつ！ボートを沈める気か！？」

尾山がジュラルミンケースを抱えながら叫ぶようにそういった。

「ボオオオオオオ！！」

再び咆哮をあげると、化け物の体が水中から上がり恐ろしい体の全容を表した！！！！

ドオン！！！！

その時、一発の銃声が下水内に響いた。

化け物を見ると、顔面の横あたりに小さな穴が開いている。すると化け物のそれまで活発だった動きが、まるで嘘のように静まり返った。

「・・・グスツ・・・」

銃弾を放ったのは、銃を持ちながら泣いていた智弘だった。

「と、智弘・・・お前がやったのか？」

健二が少し驚いたように、智弘の肩に手をやる。

「ボギヤアアア！！ギヤボオオオ！！」

静まっていた化け物がまるで断末魔の声をあげるように再び暴れだした！

「きゃっ！」

激しく揺れる船体に貴美子が体勢を崩して倒れる。

その時、化け物が突き刺した腕を離れた瞬間、化け物の回転する突起部分が

ボートの縁目掛けてとんだ！

「ッ・・・！！！！！！！！」

その時、震えながら銃を構えていた智弘が叫ぶのを押し殺すような、声をあげた。

「アユム！運転変わって頂戴！」
そういつと運転席に座っていたケリーが運転席を抜け出し
後方座席にあった二挺のショットガンを手にする。

「It is gloomy. Do not be!」(鬱陶しい
んだよ、居なくなりな!)」

ズドオオオン！ズドオオオン！

暴れだす化け物めがけて、半自動装填散弾銃の弾が撃ち込まれた！

「グボヤオオオオオツオオオ・・・!!」

ビタッ！ビタビタッ！・・・ズウウウツウウン・・・!

化け物は臓液や血液を撒き散らし断末魔の悲鳴を上げ、水中に沈んだ。

「ケリー！流石だな」

「お褒めの言葉、ありがとう。もうすぐ出口よ、そのまま真っ直ぐ行って頂戴」

賀居が運転席に座ってスイッチをおすと、再びエンジンは動き出し損傷したボートは先ほどと同じ速度で走りだす。

「・・・」

「これで・・・逃走劇も終わりか・・・」
五郎と尾山が静かに会話を重ねる。

「助かったな」

「へっ、間一髪ってところだけだな」

飛鳥がまたいつものように冗談めいて恵に話かける。

「しかし智弘くん、よくやったわね!」

「私も驚いたわ、いつもの智弘じゃないみたいね」

「おいどうしたんだ智弘?・・・智弘・・・?」

ドサッ・・・

智弘は健二に肩を揺さぶられると、力なく重力に負けたように無言でボートの船底におびたらしい血を流しながら倒れた。

「お、おい冗談はよせよ智弘・・・と、智弘？・・・智弘ッ！！！！」

健二の悲鳴と共に、壊れかけのボートは出口へと向かっていた。

シナリオ【脱出】 - 3 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【脱出】 - 3

- AM 3時58分 下水出口通路

酷い悪臭と電灯の薄暗い光だけで長く続く下水路をボートは進みついに自衛隊の基地へと繋がる出口の前のタラップまでたどり着いた。しかし、出口について誰一人として明るい表情を浮かべる者はいない。

智弘が死んだ。

彼は臆病だった、だが彼ほど内なる勇氣のある人は居なかっただろう。居酒屋の地下通路では力強く武器を取り戦い、ワゴンでは誰もが思っていた非常な現実との葛藤を素直に声で示した。

それも今思えば彼の純粋な実直さ故の行動だったのかもしれない。

だが、いつの間にか彼の存在に助けられた場面もあっただろう。

もう物言わぬ抜け殻となった智弘を見て、生きている九人はボートから降りる。

最後まで救急スプレーで必死に傷跡を塞いだ健二と綾香は突然すぎる親友と

別れを惜しむようにボートを降りた。

「智弘……」

健二はボートから降りる時に智弘手に握られたS&W36を外し自分のポケットにしまう。

思わぬ形見となってしまう銃に再び意識を切り替える健二。

「迷ったら死ぬ」と言った恵の言葉が重く胸に突き刺さる。

「さあ行こう、ココを上げれば基地に出るぞ」

賀居の声が聞こえる。

「さようなら智弘……」

綾香が智弘に別れの言葉を告げると、ボートは誰の力で動くともなく水流の力で水路を進んでゆく。

カンツカンツカンツカンツ

それを後ろで見ながらタラップを上ってゆく九人。

悲しみ、怒り、不安、恐怖、苛立ち、焦り。

さまざまな感情とそれぞれの思惑を胸に抱き、タラップの先にある地上へのドアが開かれた。

- AM 4時05分 自衛隊基地 射撃訓練室

重く硬い地上へのドアを開くと、下水からは想像も出来なかった異

様な明るさと

奥行きのある広い空間がある部屋へと繋がっていた。

部屋の壁には防音用の仕様であろうか、等間隔に穴の開いた灰色の防音素材が

タイルのように敷き詰められて使われている。

部屋の奥にはドアを塞ぐように置かれた荷物用コンテナが一台ある。やけに耳に轟くグォングォンという大型換気扇の音が絶えず室内に広がっている。

「やれやれ、これでやっとこの街から脱出できるってわけだ」

飛鳥が下水から解放された気分を口にする。

それは、あの地獄のような錯綜からの解放を意味していたのかもしれない。

表情には、やや緊張感が残るものの軽いジョークを言える余裕さえ出てきたようだ。

「まだ安心するのは早い、油断は禁物だ」

飛鳥を制すように恵が銃のグリップを握ったまま、部屋の周りを見始めた。

グォングォンと少しけたたましいとも思える音を放つ換気扇に目をやりながら

まだ銃を撃った時と同じくらいの緊張度を保ち続けている。

「……尾山さん手を貸しますよ」

「すまん、このタラップは老体には応えるのう」

五郎が、ジュラルミンケースを持ちながらタラップを上っていた尾山の手を握り、室内へ持ち上げるように引っ張る。

五郎の表情は暗く、まだ尾山のことを心から許せるほど余裕は無いが今は『仲間』という言葉信じ、ただ前へ進むしかなかった。

「貴美子さん、肩大丈夫？」

「へへ、平気平気。でも結構きついもんね、銃を撃つ時の反動って」綾香が、先ほどデザートイーグルを発射して少し腕を押さえている貴美子を

心配するように近づいてくる。

貴美子は、智弘の死んだことに内心ショックを隠しきれないが悲しんだところで現状は打破できない事を悟っていたようであえて強がって、綾香に対して笑顔を作って見せた。

時々見せる痛みの表情は、肩の痛みだけじゃない心の痛みもあるのだろう。

「・・・ケホツケホツ」

健二の咳が室内に小さく響く。

少し苦しそうな表情を浮かべながら、賀居のほうへ歩いてゆく。

「ジェイムズが居ないわ、何処へいったのかしら・・・」

「ここで誰かと待ち合わせだったのか？」

マスクをかぶったケリーが周りを見回し、少し異変に気づく。室内に一個しかないドアを塞ぐように配置されたコンテナ。

さっきまで自分の部下のジェイムズという男と、ここで待ち合わせのはずだったのだが、ケリーが下水に潜っている間に、いつの間にか居なくなっている事・・・全てが不安材料にしかならなかった。

室内のまぶしい電灯に照らされたドアの前のコンテナに少し目を狭め良く観察すると、ドアノブになにかの液体が付着しておりドアからぐるっとまわるように血痕らしきものが床に落ちている。

「まさか・・・!？」

血相を変えるようにショットガンを両肩から外し腕に抱えながらコンテナのほうへ近寄っていくケリー。

「ッ・・・ジエイムズ!？」

コンテナの近くまで来ると、さっきまで見えなかったコンテナの裏にまるで力なく倒れている戦闘服を来た男がいた。

おびただしい血を流しているが、微弱だがまだ息があるようだ。

「・・・うう・・・ケリー・・・？」

声にならないうめきを上げながら、何かを伝えたいようなそぶりです手をケリーのほうへ差し出す。

「ジエイムズ!何かあった!」

大きな声と共にショットガンをその場に置き、ガスマスクを取ったケリーは

ジエイムズと呼ばれた男の体を力強くゆする。

「・・・お、俺はも・・・もう・・・だめ・・・だ。奴が・・・襲って・・・きて・・・援軍に来て・・・いた・・・米軍・・・兵士・・・ガッ・・・向かッ・・・だが、帰って・・・きた・・・奴らは・・・豹変ッ・・・して・・・」
苦悶の表情を浮かべながらも、ジェイムズが必死に口を動かす。
良く見ると傷を受けた箇所は、まるで獣に襲われたように
深い爪で裂かれたものや牙で噛み付かれたような跡がある。

「ジェイムズ！しっかりしなさい！」
ケリーが声を張り上げる。しかしジェイムズは一層苦しそうな顔を
浮かべ
肩で大きく呼吸し始める。

「地・・・上は・・・ダメだッ。奴・・・ら・・・が徘徊して・・・最上・・・
階・・・の・・・予備ヘリポートを使・・・うん・・・だ・・・ゴホッ！！！」

「も、もう喋るなジェイムズ！」
ケリーの言葉もむなしく、苦悶の表情を浮かべ
ジェイムズと呼ばれた男はケリーの体に力なく倒れた。

「や・・・っ・・・ら・・・は・・・仲・・・間の・・・ふりを・・・する・・・
きを・・・っけ・・・」
ジェイムズはそういうと、苦悶の表情を浮かべながら息を引き取っ
た。

「ジェイムズ・・・。いったい何が・・・まあ悩んでも仕方ないわ行

きましよう」

「おい、これは」

ジエイムズの死体の横には安全装置の外れていない突撃銃【H&K G36】が置いてあった。

特殊加工された透明な弾倉を見るに弾は使っていないようだが、彼ほどの兵士が使う暇も無かったのであるだろうか？

どうやら銃は二点バーストに設定されているようだ。

「死体には勿体ない装備だな、しかし安全装置も外れていないとは・
・不自然だ」

賀居が突撃銃【H&K G36】を手にする。

G3、フランスのFAMASに変わりドイツ国防軍が正式採用している

生産性の高い突撃銃で『ジャムを死語にした』と言われるほど動作不良のない、シンプルながら高性能の銃だ。装弾数は30発。

345

「とにかく屋上のヘリポートに行きましょう」

ケリーがそう言うと、再びショットガンを肩に負ぶさるようにつに背負いコンテナをどかし、颯爽とドアを開ける。

「へっ、これで化け物どものうめき声に怖がる事もないぜ」

「脱出できると思ったら元気になる、まったくゲンキな奴だな」

「……尾山さん、行きましよう」

「登るのか、やれやれ年寄りにはキツイ仕事だな」

「健二動ける？いくわよ」

「ケホツ・・・ああ・・・今いく」

「・・・（智弘君・・・バイバイ）」

他の七人も、それぞれの思惑を胸にドアを開けて歩みだした。

- AM 4時11分 自衛隊基地1Fフロア通路

射撃訓練場から出ると、射撃訓練場から部屋をすべるように長い一直線の通路が明るい電灯に照らされて続いている。床や壁には、それまでの戦闘の激しさを物語っているようにおびただしい血飛沫や事切れた兵士の死体がそこら中に転がっている。

空葉莢が床に転がっている。

「おいおいまた化け物の犠牲者かよッ！」

飛鳥がドアを飛び出ると、兵士の死体が転がっているのを見る。さっきまでの楽観的な考えは消え、再び強張った顔を浮かべる。

『もう何処にも安全な場所なんて無い』

ワゴンで智弘が言っていた言葉が今になって嫌なくらい納得出来てしまう。

「見慣れたものだな。驚きもしない」

恵が自分の心情を冷静に言い放つ。周りの明るさに照らされている兵士の死体に

眉一つ動かさない。非常事態の連続に慣れている自分に

少々の嫌気がわいたものの、それはそれとして考える強さが恵にはあった。

「早く行きましょよ」

綾香がせかすように前に行く。通路の奥は三つ又に分かれており電灯が煌々と通路の奥まで照らしているのがわかる。

赤い光が点々と見えるのは、壁の血飛沫が電灯にまで飛び散っているからだろう。

「・・・」

五郎が死体に目をやると、転がっている兵士は日本人、西欧人さまざまだ。

着ている戦闘服には自衛隊の迷彩服や特殊部隊が着る

青黒地の軽い防弾チョッキなど、あまり統一性が無い。

どうやらこの基地に救援として来た外人部隊らしい。

「ヒドいな・・・これは」

通路に転がっている兵士の死体を見ながら、賀居は一つの事に気づく。

戦闘服や防弾チョッキは、どれも傷つくことなく今までの化け物に見られた

乱暴で粗雑な食い破るような形跡は無い。

首や頸動脈、いずれも人間の急所を狙って一撃で葬り去られている。

戦闘服を着た兵士に握られた突撃銃は安全装置が外れていない。

この兵士は化け物に急襲されたのだろうか？後ろから首の骨ごと折られている。

「おかしいわね。ここの兵士達は特に訓練された部隊だったっていうのに」
ケリーが疑問の表情を浮かべる。確かに訓練された兵士達が首や手の頸動脈を簡単に取らせるだろうか？
ショットガンをライダースーツの金属と皮のベルトに引っさげるとガスマスクをはずしたケリーの長いプロンドを両手で束ね始める。

「さて行くわよ、通路の奥に最上階まで行けるエレベーターがあるわ」
束ねた髪を後ろでまとめ、ショットガンを再び手に持つと通路の奥のエレベーターのほうへ走り出した。

「・・・この殺し方・・・確実に進化しているようだの」
尾山が死体を見ながらそういうつぶやくと
ジュラルミンケースを強く握りしめ、崩す事の無い暗い表情を浮かべながら
通路の奥に向かって歩き出す。

- AM 4時16分 自衛隊基地 1Fフロアエレベーター前

通路を進むと、兵士の死体は見えなくなり
目の前に金属製の重厚な扉で出来た大型のエレベーターが現れる。
血飛沫は、床や壁に付着しているが犠牲者の死体は無い。

「何も出なければいいが・・・」

賀居がエレベーターのボタンをおす。7Fとかかれた電光板にマ
ークがつき

エレベーターが作動し下降する音が聞こえる。

ブオンブオン・・・

「これで最上階まで行けるわ。でも化け物が何処から出てくるかわ
からないわ注意して」

ケリーがショットガンを構えながら三つ又に分かれた通路の周辺を
見回している。

持っている二挺の散弾銃。その名も【ベネリH&K M4 スーパ
ー90】

アメリカ軍の次世代散弾銃で海兵隊にも採用された半自動散弾銃だ。
片手で扱うには衝撃も重量も余りある代物だが、訓練されたエー
ジエントである

ケリーにはどうやら丁度良いらしく、先ほどの下水路でも両手で射
撃していたように4kg近い銃を二挺も軽々と扱っている。

「・・・ケホツ・・・ゲホツゲホツ！」

健二がひどく咳き込む。

下水の水と空気、走り続けていた疲労が彼の体を蝕み始めていた。

「ちよつと大丈夫なの？健二」

綾香が声をかける。健二は非常に辛そうだ。

エレベーターの隣の壁に寄りかかるように体を預けている。

「風邪か・・・」

尾山が小さく呟く。強張った表情は解けることなく
白衣から出した手に握られたガバメントのグリップを再び強く握り
締め

健二の容態を横目で気にしながら周辺を見回す。

「エレベーターかあ、パニック映画とかだとエレベーターの中とか
屋根の上とかに化け物が潜んで襲ってきたりするんだけどね」
貴美子が重厚なエレベーターのドアに目をやる。
パニック映画によくある密室での惨劇を彼女は思い出していた。

「・・・よしてください、縁起でもない」

五郎が貴美子に押し殺したような低い声で言う。
たしかに縁起でもない。化け物に遭遇するなんて誰もが望んでいな
い事だった。

ポオン

「どうやらついた見ただげ」

そついうと飛鳥は両手持っていたベレッタをエレベーターに向けて
構える。

信じたくは無いが、貴美子の言うような事があつたらと思つたから
だ。

グワン……

エレベーターの重厚なドアが開いた。

「……んな出来すぎたこと、あるわけねーか」

エレベーターのドアの中には乗員も乗ってなく、もぬけのからだだった。

今まで真剣に構えていたベレッタを下ろすと、ちよつと恥ずかしそうに

そそくさとエレベーターに乗り込んでいく。

「最上階は9Fだな、全員のつたな。行くぞ」

賀居が最後に全員乗ったことを確認すると

エレベーターのドアがしまり、エレベーターは上へ向けて動き出した。

グワングワン……

「やれやれ、エレベーターがあつて助かったわい」
尾山がエレベーターの壁に体をまかせるようにのせる。

「このまま無事に最上階まで行ければいいがな・・・」
恵がポツンと呟く。

2F、3Fと登っていくエレベーターの電光掲示板を見ながら
冷静に握った銃の残弾数を確認している。

グワン・・・グワン・・・

エレベーターは大きな作動音をたてて上昇してゆく。
しばしの沈黙が、九人を包んだ。

・・・チーンッ！

エレベーターが指定階に止まる音がする。
しかし止まったのは屋上ではなく7Fだった。

シナリオ【脱出】 - 4 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【脱出】 - 4

- AM 4時19分 自衛隊基地7Fエレベーター前

エレベーターは最上階9Fで止まることなく、7Fで停車した。
非常事態の今では異質とも思える軽快な電子ベルが鳴り
重厚な密室を囲う金属のドアが開かれた。

「・・・？7Fのエレベーターのスイッチを誰かが押したのかしら」
ケリーがエレベーター内部の『閉』のスイッチを押す。

・・・しかし反応がない。まるで誰かが操作しているかのように
エレベーターの重厚な扉は開き続け、各階の操作パネルは
まるで電気が通っていないように何度押しても無反応だ。

ガチュン！

その時エレベーターの上から、妙な機会音が聞こえた。

「何の音なの・・・」
動揺する貴美子を尻目にエレベーター内の電灯が急に消える。

「・・・明かりが!?!」
急に暗くなるエレベーター内は、五郎の焦燥感を煽らせた。

化け物に何時襲われてもおかしくない状況で、
周りのものが見えないという事実の重大さを五郎は知っていたから
だ。

『まったくツイてない』

この夜中ずっと聞いていた飛鳥の口癖が頭に浮かび、五郎の心を一
層曇らせる。

「主電源が落ちたのかもしれないぞ」

後ろから尾山が前に立っている五郎と飛鳥をどけるように
前に歩き、エレベーターパネルを触って見ている。

やはり反応はない。

「こりやダメだな。動きそうもない」

尾山の後ろでパネルを見ていた賀居も、開いたエレベーターの
ドアの先から見える暗闇の世界を見て主電源が落ちたことを確信し
た。

・・・さっきまで煌々と点いていた通路を照らす電灯までも消えて
いるのだ。

「おいおいどういことだよ。動かないってのはよ！」
暗闇の中で飛鳥が叫ぶ。

エレベーター操作パネルの前にいる賀居に向かって
声を張り上げる飛鳥のその姿は、エレベーターに乗っている他の
八人の動揺をさらに激化させた。

「うるたえるんじゃない！とにかく外へ出よう。このエレベーターのワイヤーが何時何かの衝撃で切れるかわからないからな！」
恵が動揺の声を上げる飛鳥に向けて、飛鳥のそれより大きな声を放つ。

飛鳥はまたバツが悪そうに沈黙し、ケリーや賀居も恵の意見に納得しエレベーターの重厚なドアの外へと続くフロアへと出てゆく。

「ケホツ・・・しかし何も見えないな」

「そうね。まだ夜明けにはもう少し時間がかかるし・・・」
健二が綾香の肩を借りてエレベーターから降りる。

ポケットから出した携帯のバツクライトを頼りに外へ出るがそれでも携帯のライトでは見える範囲は限られている。

「ねえねえ、ちょっと銃持っててよ」

貴美子が何か思い出したようにデザートイーグルを五郎に渡し、持っていたバッグの中身から何か色々取り出しはじめた。

出てくるもの出てくるもの、如何わしい御札や十字架、琥珀で出来た数珠や

銀製の杭、いびつな形の水晶玉、ガラスの瓶に入った無色透明の液体。

どれも高価な心霊物品なのだろうが、現状で仕えそうなものは見えない。

「あ。あつたわ！これよこれ！」

そうして貴美子がバッグの底の方から取り出したものは

【LEDライト】と呼ばれるライトの明るさが強化された懐中電灯

であった。

バッグに二本入っていたライトを取り出すと飛鳥が話しかけてくる。

「心霊タレントがなんでこんなもんを」

「商売道具よ、商売道具ー。．．．なによ不思議そうなの顔．．．あー今！顔を照らして心霊解説するんだと思ったでしょ!？」

ライトをバツクから取り出して、少し含み笑いを浮かべていた飛鳥を見て

何かを察したらしく、貴美子は暗がりでもわかるエキゾチックで綺麗な顔を

怒った口調と表情で曇らせる。

「違うわよ！暗い洞窟の心霊スポットとかにロケにいくと必要になるのよ!」

怒気をはらんだ口調で、ライトをケリーと賀居に渡そうとする貴美子。

「私はいいわ、それを持つと銃が撃てないしね。ちょっとその力ワイイお嬢さん。持ってきてくれる?」

「え．．?あ、はい」

健二の肩を抱えながら綾香が、ケリーから渡されたライトを手にする。

「これは五郎君が使ってくれ。俺の銃がつかえないと困るからな」

「・・・は、はい」

五郎にライトを渡すと、賀居は周辺を見始めた。

綾香と五郎は一齐にライトをつけた。

眩いほどの光が7Fフロアを直線的に照らし出す。

「ケホツ・・・こ、これは・・・」

健二が照らし出されたフロアを見て言葉を失う。

降りた先から7Fのフロアを見ると、1Fフロアとは違い

一直線の通路がエレベーター真ん中にして壁伝いに続いている。

【監査室】 【電算室】 【予備研究室】 【予備執務室】 と書かれたプレートが

それぞれの部屋のドアの前にかけてある。

「うへえ・・・また死体かよ」

「兵士から研究者まで・・・むごいものね」

エレベーター周辺には戦闘服を着た兵士や、白衣の人間がまるで何かから逃げるようにエレベーターのスイッチを押しながらドア向きに血まみれの状態で倒れている。

スイッチには、まだ乾燥しきっていない真新しい血が付着している。どうやらまだ殺されて間もないらしい。

「・・・空薬莢・・・使いかけの銃器・・・ダメだ弾倉に亀裂が入って使えません」

「どうやらこの兵士達は抵抗したようだな。でも傷は1Fフロアの兵士と比べると、もっと化け物らしいと言っか・・・暴力的な感じだ」

床や壁に付着した血飛沫は窓にも飛び散り、ここでどんな恐怖の惨劇が起きていたのかを重苦しそくに物語っている。

血飛沫が舞っていない窓を少し覗くと、長かった闇夜も明けようとうっすらではあるが、徐々に太陽が地平線から見えて明るくなるうとしてる。

「夜明け・・・か」

窓を歩きながら見ていた尾山が徐々に明るくなるうとしている闇夜を見て

ぽつんとつぶやく。『夜明け』と言っ言葉が何を意味しているのか他の八人にはわからないが、尾山は少し嘲笑するような苦笑いを浮かべ

再び暗がりの通路を歩き出した。

・・・タツ・・・タツ・・・タツタツ・・・

「ちよつと待て!?!何の音だ!!!」

通路の先頭を歩いていた賀居が通路を伝って聞こえてくる

自分たち以外の走る音に気づく。

・タツタツ・・・タツタツタツ・・・

「こっちに近づいているみたいね・・・!!」
ケリーが肩にかけていた二挺のショットガンを構える。
安全装置をきるとカシャツカシャツと小気味いい
銃器特有の音が鳴り、カチャンという初弾が装填される音が聞こえる。

・・・タツタツタツタツ!

「ライトを通路の奥に照らし続ける!」
賀居が声を張り上げる。

通路の奥に照らし出された眩いライトの光の元へ
足音は近づいてくる。

カツツタツタツタツ!!!

照らされたライトの先に人影が二つ見えた!

「そこに居るのは誰だ!」

賀居が人影に向けて突撃銃G36を構える!

「アー、アー、撃ツナ！」
しかし人影は手を上げるといきなりカタコトの日本語で話しかけてきた。

「アユム・・・？あれは・・・」

「人間か・・・？」

少し疑うような目で銃の狙いを降ろすことなく近づいてゆく賀居とケリー。

眩すぎるライトに照らされた人影もこちらに向かって歩いてくる。戦闘服をつけた兵士のようだが、深深と帽子をかぶり身に着けるべき銃やナイフケースは見当たらない。

「どつやら化け物じゃないみたいだぜ」

「そつだといいがな・・・」

飛鳥が先頭を歩く賀居とケリーを見て安心したようにとっさに構えていたベレッタを腰のラインまで下ろす。

恵が安心する飛鳥に注意を促すように暗い口調で話しかける。

「アー、アー。コツチ安全ダ」

深深と帽子をかぶった戦闘服の兵士二人がカタコトの日本語で賀居とケリーに話しかけてくる。手は軍手のようなもので覆われ。

口調から見るとどうやら安全な脱出を手助けしてくれるらしい。賀居とケリーが手招きすると、他の人も合流してきた。

「あんたら日本語わかるのか？」

賀居が質問をする。

たしかに兵士二人は戦闘服を着ているが

そのカタコトの日本語を聞く限り、さつきジェイムズが死ぬ間際に言っていた

外部から援護に来た外人部隊の連中なのだろう。

だがいくら外人部隊とはいえ、日本語が話せるのはそうそういないはずだ。

「アー、少シナラ、デキル」

カタコトの日本語が兵士から言い放たれる。

「主電源オチタ。エレベーター動力ナイ、安全ナ通路コツチダ」

もう一人の兵士が、手を右の通路にかざし

九人を案内するように通路に進みだす。

「・・・」

綾香が二人の戦闘服を見る。戦闘服に傷はあるものの血は流れていない。

化け物の攻撃を避けたのか？たしかに訓練された隊員ならよける事も可能だろう。

だが、電灯の無い暗闇の通路の中では肌の色さえもわからない。

かといってライトを当てても白い眩すぎる光があるため

どこの国籍の人であるかまでは判別が出来ない。

「そういえば、お前たちの仲間は何に銃も持たずに危険じゃないのか？」

ケリーが前を歩く兵士達に質問する。

たしかにエレベーター付近の兵士や研究員達は銃を持っていた。

だが、今日の前を歩く兵士達には戦闘服についての銃器をしまうサイドポケットや

ナイフを携帯するためのケースはあるものの武器らしい武器は何もつけていない。

「アー、部隊全滅シタ、残ッタノワレワレダケダ」

「銃、奴ラニ襲ワレテ、撃チ果タシタ」

帽子を深くかぶった兵士達は、この現状に恐怖することなく言葉を淡々と述べながら先頭を歩き続ける。

「そう……（もっともらしい理由だけど何処か怪しいわね）」
ケリーは兵士達の落ち着きすぎた言葉に少し疑問を抱き
不信任を覚えたが、今は信用するしかないと言頭を歩く二人についてゆく。

右通路の奥にたどり着くと、兵士達はそのまま大きな通路に歩き出した。

兵士や研究員の死体は、まだ通路の傍らに続いている。

- AM 4時30分 7Fフロア中央通路

天井からぶら下がるプレートには【7F中央通路】と書いてある。プレートを見ると、どうやら通路の奥には階段があるらしい。だが、兵士二人は階段がある方向とは反対側に歩いてゆく。暗がりの中を進み続ける九人は不審に思いつつ、闇を進み続ける。

「また死体か・・・」

尾山はもう見慣れたはずの研究員の死体を見て不快感を覚える。同じ白衣を着ているから、そう思えるのかもしれない。必死に何かから逃げて殺された研究員の表情は苦悶に歪み死体は前を歩く二人の兵士の行く方向とは逆向きに倒れている。

「おいおい最上階に行くんじゃないのかよ」

飛鳥が声を上げる。通路の逆側には階段がある。たしかに普通ならそのまま階段に行くほうが

簡単に最上階へ行けると思うのだが、なぜか帽子を深深とかぶった兵士達は

逆の通路を進み続ける。

「アー、階段、奴ら居ル」

「コッチニ、安全ナ場所アル。モウ、スグダ」

飛鳥の言葉を聞いても、まるで通路を歩くのをやめない兵士達。

ついに壁に囲われた通路の端【第二実験室】と書かれたプレートが見えてくる。

「アー、ココダ。安全ダ」

「ハヤク、ナカハイレ。奴ライナイ。安全ダゾ」

兵士達は立ち止まり、大きなガラス張りの部屋の中へ入るように指示する。

ガラス窓にはカーテンが掛かっており、内部は見えない。

兵士が指を指すと、ライトを持っていた五郎がドアから床を照らす。

ドアはドアノブから壁にいたるまで血飛沫で血まみれだった。

床は何かを引きずったように血の跡がドアの中へと続いている。

「ケホツ・・・賀、賀居さん・・・」

研究員や兵士の死体の向き・・・

ドアノブと床の血の跡・・・

それに兵士の喋り方まで何か変・・・。

そう感じた健二が賀居に苦しそうに咳をしながら声をかける。

「ん、なんだ？」

賀居がガラス張りの実験室のドアの前に立ったあたりで振り向く。

「ゲホツゲホツ！・・・ここは・・・何かおかしいで・・・」

ガシヤアアアン！！！！！！！

健二の言葉をかき消すように、研究室の窓ガラスは勢い良く音を立てて崩れた。

「アアアアアアアア”！アアアア”！」

最も聞きなれた、最も聞きたくない、最も聞こえる狂気の声が通路中に響いた。

シナリオ【脱出】 - 5 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【脱出】 - 5

- AM 4時34分 自衛隊基地7Fフロア 第二実験室前

中央通路の突き当たりにある第二実験室と書かれた場所まで来ると
深深と帽子をかぶり、前を歩いていた兵士達が立ち止まり
実験室は安全だと指を指し、手招きする。
賀居がドアの前に立ったその瞬間
室内の窓ガラスをぶち破り、奴らが現れた！

「アアアアアアアア！」

窓ガラスを突き破って化け物と化した人間たちが奇声を上げながら
襲ってくる！
化け物の衣服は白衣や警察の制服、兵士用の戦闘服を着たものなど
さまざまだ。

「ッ！？くそッ！！！」

賀居は後ろを振り返し、即座に状況を飲み込むと
持っていた突撃銃G36の安全装置をはずし、即座に発砲する。

ズガガッ！

「ウゴオ！ギャワアアアア！」

ビタツビタツ！

二点バーストに設定されていた突撃銃G36から速射された二発の銃弾は窓ガラスから這いでできた白衣を着た化け物のこめかみ辺りにあたり、その場で緑色の血液と脳漿を飛び散らせる！

「アアアアアアアア！」

しかし、一人を撃って倒してもまた一人と化け物が窓ガラスを突き破って

研究室からまるで際限なく嫌悪感を催す腐臭と恐ろしい形相で這い出てくる！

ドオン！ドオン！

「安全な場所だと？ここがか？ふざけるな！」

近寄ってきた化け物にS&W37を撃ちながら恵が怒声をあげる。通路に長く続く部屋の窓ガラスからは、8階に行くまでの階段を塞ぐように

どンドン化け物が這いずり出てきている。

思い描いている恐怖や焦りが、より現実となって襲い掛かってきていることを

恵は確信していた。

「くそっ！どういうことだ！ここは安全じゃなかったのかよ！？」
飛鳥が深深と帽子をかぶった兵士の一人に& amp;#25681;みかか
みかか！

深深とかぶっていた兵士の帽子が& amp;#25681;みかか
った衝撃で取れる。

「アー、アー、ココ安全、ワレラノ棲家アンゼン、オマエタチ連レ
テクル・・オマエラ・・ワレラノ・・エサ」

帽子をとると、そこには血色の悪い緑色の肌でひどい悪臭を放つ
まるでそこらじゅうを這いずっている化け物のような兵士が立っ
ていた。

「オマエラ、ハヤク食イタイ。ワレラ、エサ、ナル！」

カタコトの日本語を言い終えた兵士の化け物は、飛鳥めがけて襲
い掛かってきた！

「くっ！こいつらも化け物かよ・・！まったく・・ッ！ついて・
！ねえゼツ！」

目の前で襲い掛かってくる兵士の化け物の顎を力一杯跳ね除けよう
とするが

恐ろしい力で肩を押さえつけられて、口を避けるのが精一杯だ。
片手に持っていたベレッタの銃口も定まらないでいる。

カチッ！ドオン！

「ウゴオオオ・・・」

ハンマーを起こす音と共に銃声が聞こえ、飛鳥を襲っていた化け物の腹部に

銃弾が当たる。

「飛鳥さんッ・・・ゲホッ！早く逃げてッ！」

健二が智弘の形見のS&W36を、綾香に肩を貸されながら化け物目掛けて発砲したのだ。

「た、助かったぜ！」

思いっきり力を込めて、化け物を引き剥がす飛鳥。

その場に倒れた戦闘服の化け物は、まだ息をしているようにピクピクツツと

かすかに動いている。

ドオン！ドオン！

「くそつたれが！」

飛鳥は二挺のベレッタを一発ずつ倒れた化け物に浴びせると化け物は、その場に事切れたように血液を撒き散らし倒れる。

しかし、九人を取り囲むように化け物はゾロゾロと際限なく窓ガラスから湧き出てくる。

カチャツ！カチャツ！ズドオオオン！ズドオオオオン！

「ジェイムズが言っていた味方のフリをするってのはこういうことだったのね！」

ケリーが両肩に背負ったショットガンの安全装置を切ると

周りを取り囲んでくる化け物に対して容赦なく発砲しはじめる！

1F射撃場で会ったジェイムズの死に際の言葉が今になって理解できた。

「俺たちは化け物たちの罠に引っかかったエサってわけか、冗談じゃないぜ！」

両手を前にぶらつかせて近づいてくる化け物に銃を確実に致命傷になる位置に

命中させてゆく賀居。だが、いくら特殊な事件を解決してきた彼であつても

こんなに敵の多い戦闘はおよそ初めてであろう。

それに人の言葉を喋る知能を持った化け物がいるという事実は賀居や他の八人の恐怖を煽るには、十分すぎるほどだった。

ドンッ！ドンッ！

「化け物が進化したとしても・・・言語を喋れるほどになるには、スピードが速すぎだのう・・・ッ！・・・まさかッ！」

尾山が何かに気づいたような顔を浮かべる。

だがその間にも警官の制服を来た化け物が両手をこちらに向けて、
獰猛な牙を光らせ、うつろな目をギラギラとさせて襲ってくる。

化け物の額のと真ん中にガバメントの銃弾を打ち込む尾山

まるで化け物の弱点がここだと知っているように、その狙いは正確だ。

ガンッ！ガンッ！

「・・・うおっ！」

丸腰の五郎が研究室のドアを破ってこようとする

両手を体ごとドアにあてがい、中からの化け物の勢いを必死に抑えている。

「五郎君！こいつを使え！」

賀居がそういうと、銃を片手で撃ちながら、スーツのポケットから愛銃シグザウエルP226を取り出し、五郎のほうへ投げる。

「こ、これは」

「使い方は普通の銃と一緒にだ！大事に使ってくれよ！」

そう賀居が言うと、五郎は銃を受け取り安全装置をはずし始めた。

賀居は通路の階段側に向けて倒れていた兵士の死体から

使用していないと思われる短機関銃【MP5K】をとって

安全装置を外し、ケリーに目配せする。

「ケリー！このままじゃキリが無い！Forcing break through！！（強行突破だ！）」

「consented！Cover and give the road to me because I make it！」
OK、道は私が作るから援護頂戴！」

賀居がアイコンタクトし、英語で何か喋る。

賀居とケリーだけがわかる共通の言葉だったのだろうか、何かを悟ったケリーは、即座にショットガンの向きを変えて階段側に向かって取り巻く化け物の群れをショットガンでなぎ払いながら走りはじめた。

ズドオオオン！ズドオオオン！

「Here！（こっちよ！）」
ケリーがショットガンを放つと、その衝撃に耐えられなくなった化け物たちが

肉片や血液をその場にばら撒きながら吹っ飛んでゆく！

「みんなケリーに続け！窓から来る奴は俺がやる！」
賀居がそう言うと、片手に持ったMP5Kをセミオートにして室内の窓から襲い掛かってくる化け物めがけて走りながら射撃し始めた。

ドガガッ！ドガガガガッ！

「こりゃあ、まるでアクション映画だぜ！」

「冗談言ってる場合が早くいくぞ！！！」

こんなときにも冗談の言える飛鳥の声が聞こえる。

恵が「またか」といった感じで顔を曇らせながら、飛鳥の腕を引っ張り

走り出した。そんなジョークを言ってる場合じゃないというのに飛鳥の、その声が聞こえるだけで走っている九人も余裕が生まれる。

根拠の無い余裕。飛鳥には、それを皆に抱かせる事のできる唯一の人だった。

ガシャアアアン！！

「アアアアアアアア！！！」

「尾山さん！あぶない！！！」

「うおっ！！！」

化け物が今まで静かだった部屋の窓を突き破り、尾山の体を& a m
p ; # 2 5 6 8 1 ; ; もつと

両手を伸ばしてきたが、貴美子のとっさの声で避ける尾山。

「こんのおおおお!!」

ズドオオオオン!

デザートイーグルの衝撃音が7フロア中に聞こえると共に尾山を襲っていた手に向かって貴美子が発砲する。獲物を探していた手は大きな弾痕を残し、室内の闇へ奇声を上げながら消えてゆく。

「助かったぞ!お嬢さん!」

「いいから走って!」

尾山が再び片手に持ったジュラルミンケースを強く握るとケリーがショットガンで群がる化け物に蹂躪された階段までの通路を開いてゆくのを見て、再び張り詰めた表情で通路を走り出した。

「もうすぐ階段よ!健二登れる!?!」

「ゲホツ!...だ、大丈夫だ」

綾香に肩を貸されながら、健二が意識が朦朧としながら24段程度の階段を登り始める。

「アアアアアアア!アアアア!」

九人は階段を登り始めた。後ろには狂気に取り付かれた化け物の群れが
獲物の匂いを嗅ぎまわり、前を走る獲物を見つけ、
再び腐臭のする息と、ギラギラとした目をちらつかせ
こちらに向かつて襲い掛かってくるのだった。

- A M 4 時 4 3 分 8 F フロア トイレ前

階段を上ると、そこは今までで一番とも思えるほど異常であった。
下の階にあった兵士や研究員の死体は無いのだが
壁や床は、まるで死体を引きずってどこかへ行ったかのように
べっとり血液の跡だけが残されている。
それまで続いていた階段は 8 F を上ると断ち切れている。
どうやら空へと続くヘリポートが設置された最上階に
行くには、エレベーターが専用の階段を使うしかないようだ。

「ちょ！ちょっと後ろを見て！」
貴美子が今まで上ってきた階段のほうを見る。

階段の下にいる化け物の群れは上へ上がってこようとしないのだ。

「何故？・・・まあいいわとにかく最上階に向かいましたよ」
ケリーはそう言うと、壁に立てかけられた血まみれのガラスケースを
割り、その中の木製の掲示板に書かれた最上階までの地図を見る。

カツツ

「・・・ん？なんだこのファイルは」

恵が下に落ちていたあまり血に染まっていないファイルを焦っていたせいか

靴に当たった音で気づき、気になったのか拾い上げてみる。

【臨床実験レポート】

『第一実験室の素体は結局知能の無いゾンビ化してしまい散々な結果に終わった。』

皮膚組織の再生は上々だったが、脳細胞異常減少による皮膜損傷で知能の進化が止まってしまいE H K V投与後の素体が拘束具を外し暴れたので実験室ごと焼却処分にした。携わった兵士二人と研究員3名死亡。貴重な人命が失われたことを遺憾に思い、次の第二実験室での臨床実験には細心の注意を払いたいと思う』

「おい、これは・・・」

恵が歩きながらファイルを読んでいると気になる事が書いてあるレポートを目にする。

【臨床実験レポート2】

『今回の実験は成功の兆しが見られた。5mgほどの液化E H K Vを直接投与し、』

あらかじめ素体の皮膚組織を活性化させるために酸化化合物で皮膚に

炎症を負わせたのが功を奏したのだろうか、脳細胞の減少は見られていない。今回の臨床実験は全て機械による全自動で進めたが、素体が完成に近づく寸前に死亡したため言語理解や数例理解など新たな進展は、また後日の実験結果の報告を待つしかないだろう』

【臨床実験レポート3】

『今回の実験は異質だった。何人もの外国人スタッフが実験に参加してきた。

名前は忘れたがアメリカでは有名な製薬会社らしい。手馴れた感じで素体の状況を調べていたのが印象的だ。今回の素体は三人。民間人一名と、警察から外国人の死体と生きている警官が提供された。今回は人数も多いことから気化したEHKVを吸引させてそれぞれの効果を臨床してみたが、民間人の素体は早い段階でゾンビ化し、その後心臓肥大破裂で死亡。外国人死体に関しては肉体の再生が見られた。以後実験体を『KV-1』と呼称する。だが、最も興味深かったのは警察官で、1時間の吸引に対して何の変化も見られなかった。EHKVとの身体的相性が合ったのであろうか、臨床実験では初めての生還例となる。今後も彼の観察が必要になるだろう』

「これは・・・まさか」

恵がさらにページをめくる。

そこにはやけにおびえた様な書体で書かれたメモがはさんであった。

【事後経過報告】

『実験室から『KV-1』が脱走した。どうやら皮膚組織が進化して鋭利な錐のような形状になったらしく、強化ガラスを破壊させて地下の下水に逃げ込んだようだ。追撃部隊の報告によると眼球を失

明させたようだ。後で回収部隊を回すらしい。E H K V感染者の動向についての新情報。行動可能範囲は以外と狭く通常の空気感染者だと5 km〜10 km程度だが、感染者から感染した二次感染者は100 m範囲内ではしか行動出来ないという報告があった。この方法を使えば兵器としての運用も、まったく無理というわけでは無いと思われる』

【対E H K V除去薬製作について】

『民間企業に依頼した対E H K V除去薬についてだが、どうやら完成したようで、明日P M九時に依頼主に面会する予定だ。最近のS市周辺の人身事故の報道を見る限り、どこかでE H K Vが漏れた可能性がある。詳細は聞いていないが先日、『K V - 1』の回収班の体調がおかしい。医務室に隔離してはいるが、さらに観察が必要である』

「そうか、7 Fの化け物が階段から先を襲ってこないのは、こういう理由か」

「ってことはイツらは全部二次感染者ってことか？」

恵がファイルを閉じるより早く

賀居が恵の声を聞き取り、質問する。

「・・・二次感染者は、感染者のE H K V遺伝子に従って動いている。つまり子分化だ。普通の感染者なら飢餓感を感じ、本能のまま動いて人間を襲う程度だが、どうやらこの数時間に進化したらしいな、あの警官の化け物の触手を見る限り、完全に自分の操り人形として動かしているようだ」

尾山が歩きながら淡々とつぶやくように全員に言う。

なぜウイルスに関してこんなに詳しいのか？

その場にいる全員が思ったに違いない。

「・・・尾山さん・・・やっぱりあなたは・・・」

「五郎、すまない。騙すつもりは無かった」

五郎が尾山に落胆したように声をかける。

わかっていたはずだ。尾山が最悪の場合、

この事件を引き起こした張本人達の仲間であること。

「ワシは、この化け物達を作り出した組織の一員じゃ。主に依頼されてE H K V関連の薬品を製造していたんじゃ」

ジュラルミンケースをギリギリと強く握る音が聞こえる。

「そんな・・・尾山さんが・・・」

「ケホツ・・・事実は小説より奇なりか。アイツならそう言いそう
だ」

この告白はその場に居る全員の疑問を全て解消させてくれたが
今まで一緒に生き延びてきた仲間が犯人という後味の悪い結論だっ
た。

長い沈黙が続いた後、ケリーが最上階専用階段を発見する。

その階段を一步一步と上りながら、重苦しい歩を進める九人。

もう数時間も走りっぱなしである疲労感や強烈な睡眠欲、

そして仲間の突然の告白に迷う九人の心には

「今は生きて脱出する事だけを考えよう」という気持ちだけがあった。

シナリオ【脱出】 - 6 (前書き)

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

シナリオ【脱出】 - 6

- AM 4時51分 自衛隊基地最上階 ヘリポート専用通路

最上階へと続く長い専用階段。

垂直に伸びた金属の柱に螺旋状の張りめぐらされた階段を上る九人。外気を遮断する大型のコンクリート壁に付着した血痕や弾痕、それに何か大きな物が衝突したようなへこみと、そのへこみを中心に周辺に渡るまでひび割れが、コンクリートの壁に続いている。何者かが激しく戦った後を見せさせる。

下のフロアには化け物が奇声を上げながら群れをなし、ひしめきあっている。

およそ逃げられる最後の脱出路に向かって九人は、一步一步を確実に歩み

最後の力を振り絞りながら通路を歩き出した。

「これが最後ね・・・皆準備はいいかしら？」

最上階のヘリポートに長く続く通路を見て、ショットガンの銃弾をカシャツカシャツと音を立てて補充しながら、全員に声をかけるケリ。

表情には張り詰めた緊張感・・・それだけがあった。

「弾も残り少ないな・・・」

賀居が突撃銃のクリアケース弾倉を見る。もう半分も残っていない。どうやら7Fでの化け物の群れをなぎ払うのに使ったのが自分の想像よりも激しく銃弾を消耗させたのだろう。

賀居の顔は今まで見たことも無い焦燥の表情に歪む。

「この通路の先はどうなっているの？」

貴美子が持ったデザートイーグルをぶらつかせている。

怪力の彼女でも、人を殺傷できる銃を持つのは初めてだろう。

初めて銃を撃った感覚がまだ手に残っている。重い。彼女が持つには余りにも重い。

そんな銃は想像出来ないほど貴美子の手にズッシリとした存在感を残している。

今は、この銃が自分以外の誰よりも頼れる物だからだ。

「ここはヘリポートへの専用通路だけど、普段は中央のエレベーターを使用するから今は緊急時以外使われていないの。だから、この通路の先には重厚なチタン製のドアがあって、さまざまな電子ロックが施されているわ」

淡々と語るケリーは、暗闇の通路を歩きながらショットガンを構えている。

どんな時にでも気を抜かない、気を許したものは死ぬ。彼女の鉄の戦闘理論だ。

「じゃあどうやってヘリポートまでいくんですか！」

綾香が健二を抱えながら、急に大声を出す。

たしかにケリーの話が事実なら、重厚なチタンのドアを潜るには電子ロックを解除しなければならない。

「安心して。電子ロックはこの電源を使って操作しているの、つ

まり今は主電源が切れてるわ。だから電子ロックは無意味だし、非常時には手動で動かせるマニュアルがあるのよ。でも一度手動で動かした後、電源が入ると緊急制御システムが働いてドアが完全に封鎖される仕組みなの。まあ主電源が落ちた時点で、それは無いと思うけど気をつけてね」

ケリーが流暢な日本語で全員に聞こえるように話すと暗闇の通路の中を風がピューっとぶく。

「風……？おかしいわね、ここは外気は入ってこない密閉構造なんだけど……」

ケリーが不審そうに周りを伺いながら進む

風はケリーの言っていた通路の終着地から吹いているようだ。

ガツン……ガツン……！

「……何の音だ?!」

後方から聞こえる異質な音に気づく五郎。

まるで大きな石と石をたたきつけるような恐ろしい音。

その音は九人の足音に近づいてくる。

五郎は音のする方向に貴美子から預かっていたライトを照らしてみる。

「キヤオオオオオオオアアア!!」

そこには、赤い目をした人間の形をした四足の化け物がこちらに向かっ
て
一歩一歩その金属のような重い足を前に出しながら咆哮をあげる、
研究員の
白衣を着た化け物の群れがいた。

「……みんなドアまで走るぞッ！」

「ココまで来て……まったくツイてないぜ！」

賀居がそう言うのと飛鳥が口癖のように皮肉めいた台詞を叫び
九人は通路の奥に目掛けて無我夢中に走り出した。

キュッキュッ！カッソッ！カッソッ！タッタッ！タッタッ！

ガッソッ………！ガッソッ………！

「キャオアアアアアア！」

革靴、スニーカー、バッシュさまざまな足音が聞こえる中
化け物の奇声と足音だけが異質な音の模様をかもし出していた。

通路の奥まで走ると、ヘリポートと繋がるチタン製の重厚なドアが見える。

唯一の脱出路を目指し走り続ける彼らの後方には、今まで見たことも無い

化け物の殺意の魔の手が襲い掛かろうとしていた。

「ドアが見えた！あと少しだ！」

ドアを肉眼で確認した賀居は、少し希望のまなざしで後方を走る全員に声をかける。

最後方を走っているのは健二と健二に肩を貸している綾香だ。

「もー何やってるの！このままじゃ追いつかれるわよ！」

「貴美子さん！」

健二に肩を貸していた綾香の速度を見て危ないと察知したのかまるで奪つように健二を自分の背中に乗せて走り始める貴美子。

「しっかりつかまっててよ！健二君！」

「ゲホツ・・・ゲホツ・・・」

健二を負ぶさって走り出す貴美子。

国体の選手であった彼女の走る速度は健二を負ぶさっても、変わることなく

凄い速度で通路を駆け抜けてゆく。

「アユム！ドアを手動で動かすわ！時間を稼いで頂戴！」

「ああ、わかつてる！」

かたく閉ざされたドアの前に到着したケリーは
手動で動かせる緊急用のガラスケースをショットガンの端でぶち破り
スイッチを押す。

ドガガツ！ドガガガガガツ！

賀居は突撃銃G36を構えると後方に迫ってくる異質の化け物目掛けて乱射した！

「キヤオオオオオ！キヤオオオオ！」

化け物はその場に血液と皮膚を撒き散らしながら、壊れた玩具のよ
うに

断末魔の奇声をあげて、動かなくなってゆく。

しかし、化け物の屍骸を飛び越えて、数える事も出来ないほど
無尽蔵に出てくる新しい化け物の群れがおうにも眼に入ってくる。

「こいつらキリがない！ケリー！ショットガン一挺貸してくれ！」

「わかったわ！無駄撃ちしないでね！」

肩から金属製のベルトでかけられたショットガンをとっさに外し
賀居のほうへ片手で放り投げるケリー。

「サンキューケリー！オマエは最高の相棒だぜ！」

「アユム！？どういう意味……！！！」

そう言うと、赤い目の化け物の群れの中を走り出す賀居。

ズドオオオオン！ドガガガッ！ドガガッ！

「キャオオオオ！キャオオ！！！」

ショットガンと突撃銃G36を交互に撃ち放ちながら
化け物の群れを中心に戦いはじめる賀居！

「が、賀居さん！！そっちは化け物の群れの！！！」

「気にすんな五郎君！オマエはオマエの仕事をするだけさッ
！！うおっ！！」

賀居がショットガンを壁際の化け物に放つと、天井にぶら下がるよ
うに

引っ付いていた化け物が賀居の体目掛けて飛びついてくる。

「くそっ！離しやがれ！化け物がつ！！！」

突撃銃を持った体で左右に体を思いつきりふると
背中に張り付いた化け物が勢いに負けて振り落とされる！
だが賀居の背中には化け物の爪が引きずられたように傷口がついて
いた。

「いてーじゃねえか！！」
振り落とされた化け物に弾丸を撃ち込もうとしたその瞬間、
賀居の後方からまた別の化け物が飛びかかろうとしていた！

「うおっ！！」
後方の異様な殺気に気づいた賀居が後方を振り返ると
化け物が壁からジャンプした後だった。

やられる！と思ったその瞬間だった！

ドオン！ドオン！

飛び掛ってきた後ろの化け物には弾丸が撃ち込まれ
化け物はその場に奇声を上げて息絶えた！
その目線の先にはベレッタを二挺構えた飛鳥が立っていた。

「へっ！あんただけにいい格好はさせないぜ！」

「口の減らない奴だ！死ぬぞ！」

突撃銃を襲い掛かる化け物の頭部目掛けて撃ちながら
こっちに向かつてきた飛鳥に傷を負った背中を守らせるような姿勢
をとった。

「ツイてねえこと続きで参ってたところだからな！今さら化け物相
手に命張って戦うくらいななんとねえさ！」

「まったく馬鹿だな・オマエは助からんかもしれんぞ！」
背中合わせに感じる他人の動悸、荒々しい呼吸、血なまぐさい匂い。
異質とも思える、その全てが今の彼らにとって信頼以上の何かを感じ
させた。

「俺一人で救える奴らの未来があるならいいさ！」

飛鳥の高々な声が、通路中の化け物の奇声の中響いた。

「ドアが開いたわ！思いっきり外側にひいて！」
ケリーがそう言うと五郎と尾山が力いっぱいドアを両側に引っ張ると
大きな音を立てて、重く厚いチタン製のドアが開いてゆく！

ゴゴゴゴ・・・ゴゴゴゴ・・・

「賀居さん！飛鳥さん！早くこつちへ！」
綾香の声がドアを開けると同時に室内に吹き込んでくる風と共に
通路を響かせて揺らす！

「アユム！何をしてるの！早く」
ケリーや他の六人がドアの外へ出ると、まだ中で戦っている飛鳥と
賀居は
化け物を振り払い、こちらに向かってくる。

ギョオンッ！！

「なに！？で、電気が！？」
その時、何かのスイッチが入ったように音が鳴り通路が電灯で照ら
されてゆく。

【緊急管理システム作動】

ビービー！ビービー！

ゴゴゴゴ・・・ゴゴゴゴ・・・

「そんな！今さら外部の予備電源が！？」

ドアの電子ロックを閉じようと、緊急管理システムがアラートと共に作動し始め、ドアがどんどん閉まってゆく!!

「飛鳥!!! 急げッ!!!」

恵がいつもの冷静さなどかなくなり捨てて、閉まるドアの前で大声を上げる。

「あいよ!・・・まったく黙ってりゃ可愛いのに・・・うおっ!」

通路を走っていた飛鳥だったが、恵の声が気になって後ろからジャンプしてきた

化け物に気づかず、体の上に爪をたてのしかかってくる!

「飛鳥君!大丈夫か!まかせろ・・・うわっ!!!」

飛鳥を救おうと突撃銃を構えた賀居であったが

それを見計らうように壁と天井から化け物が賀居の体目掛けて襲ってきた!

突撃銃で致命傷はガードするが、その場に倒れる賀居。

ゴゴゴ・・・ゴゴゴ・・・

徐々に閉まるドア。もう二人の姿は化け物に取り囲まれ、見えなくなっている。

「飛鳥————ツ!!!!」

「だめよ!今いったらあなたまでやられるわ!」

ドアの中に入るうとする恵をケリーが力いっぱい止める。

すでに壁や天井には電灯に照らされた化け物がいつこちら目掛けて襲ってくるかわからないからだ。

「クツ!うおおお!ケリー!早くヘリポートへ!」

「くそつたれ・・・最後までまったくツイてねえぜ!おい恵さんよ!俺のツ!自叙伝ツ!!ちゃんと頼んだぜ——ツ!ぐわあッ!」

ゴゴゴ・・・ゴゴゴン!!!!!!

「飛鳥————ツ!!!!!!」

恵の叫びと共に重苦しいチタンのドアが閉まる。

中の音は何も聞こえない・・・。

「さあ・・・いくわよ!」

ケリーが泣き崩れる無気力な恵の手を力強くとると、

眼前に広がるヘリポート目掛けて走り出した。
目にはうつすらと、涙の色が見えた。

- AM 5時11分 最上階ヘリポート

軍用ヘリが並んだヘリポートが眼前に広がる。
朝日の上り始めた周囲の中で光るヘリは、哀しみの中で広がる唯一
の脱出の希望。

今、七人は駆け抜ける。その悪夢のような現実から脱出するために。

「さあヘリに乗って頂戴！」

軍用ヘリの一つにケリーがとびのると、助手席に恵を乗せてエンジ
ンをかける。

ドツドツド・・・ドウルンドウルンドウルン！

ヘリ特有の羽音がすると、健二をおぶった貴美子や綾香。
それに尾山や五郎が搭乗する。

「ギザマラ！！ギユルサナギ！！オオオオオオオオオオ！！」

その時、ヘリの前に恐ろしい様相で立ちはだかる一体の化け物の姿
が見えた。

肥大化した腕と足、胸から出る鋭利な触手・・・ワゴンを襲ったあ

の化け物だ！

「・・・へりを早く上昇させるんだ！」

そう尾山がつぶやくと、尾山がへりの後部座席から外へ出て手に持ったガバメントを構えながら片手でジュラルミンケースを開く！

尾山の顔は何故だか笑っているようにも見える。

「どうする気ですか！尾山さん！」

五郎が声を上げて尾山に話しかけるが、まるで反応がない。へりの翼が回り始め轟音を上げながら上昇しはじめる。

「五郎さん！今出たらあぶな・・・！」

「くっ・・・もう無理だわ！上昇するわよ！」

飛び降りた五郎を尻目にへりは轟音をたてながら、空へと飛び立った。

ドオン！ドオン！

「久々だな、実験体。この基地もおまえの仕業だろ？わかっているさ」

尾山は、懐かしむような口調で化け物に語りかけ銃弾にも無反応な化け物目掛けて片手に持ったガバメントで射撃する。

「ゾンナモノガギゲカ？ムダダ！オオオオオオオオ！！」

シュルシュル！シュルシュル！

化け物の鋭利な触手が尾山めがけて狂気の音を立てて迫ってくる！

「ほう言語まで理解しおったか・・・ではこんな玩具では無理だな！」

弾の無くなったガバメントを化け物目掛けてなげるとジュラルミンケースの中から注射器を持ち出す。

シュルシュル！グサツ！！

「ぐっ！・・・オオオツ！」

注射器を持った右腕の付け根辺りに鋭利な触手が刺さる。

おびただしい血液を出しながら、さらに鋭利な触手が尾山めがけて迫ってくる！

シュルシュルシュル！！！！

「尾山さん！！！！危ない！！！！」

上昇し始めるへりから降りた五郎が、尾山に襲いかかる鋭利な触手の前が出る。

ザクツザクツザクツザクツ！！！！

「ぐっ！！！！！！」

無数の尾山に襲い掛かろうとしていた触手が、尾山の前に出た五郎の体を突き刺す！突き刺された箇所からはドクドクと赤い血が流れている。

五郎の表情は、まるで化け物を睨むような必死な形相である。

「ぐ、五郎！！！！何故へりに乗らなかつたッ！！！！」
目の前で血を流す五郎を見て、尾山は声を張り上げる。

「……ッ！守らなきゃッ……！いけないッ！人がいる……からッ！守るんッ！……ですよ！」

その場におびただしい血液を流しながら

喋るたびに口から血液が流れる五郎の姿を見て尾山が少し笑い。

「まったくッ……仕事熱心だな！」

そう言うと、尾山は左手で右手のくびれを持ち

力いっぱい右手の注射器の抽出部分を化け物の触手へ打ち込む！

ドクッ……ドクッ……ドクッ……ドクッ……ドクッ……。

「ウガッ……ウガアアア！！ギザマ……ナニヲ！！！」

「オマエの……処方箋だッ！……化け物に訪れる事のない死という名のなッ！」

尾山はそう叫ぶと、化け物の触手はボロボロと砂のようにその場に崩れ去り

化け物の体自体も緑色から灰色へ変色し、皮膚組織がボロボロと崩れてゆく。

「ギャオオオオオオオオオオ……!!!!」

・・・バリバリバリバリ!

化け物の断末魔と共に、健二、綾香、貴美子、恵、ケリーを乗せた軍用ヘリは上空へと放たれた。

空には地平線から朝日があがり、夜明けを知らせていた。

この街で起きた悪夢からついに逃げられたのだ。

彼らは喜び、悲しみ、怒りなどさまざまな感情に包まれながら、この街を脱出した。

ヘリは無機質な旋回音を上げながら安全な場所を求めて飛行を続けた。

シナリオ【脱出】 - 終了 -

エピソード（前書き）

二年前に完結した小説です。

ブログの仕様そのままに投稿してるため、
おかしい部分が多々ございます。

本編はグロテスクなシーンが含まれます。
耐性の無い方はご注意ください。

エピソード

- AM 5時39分 S 県上空 軍用ヘリコプター内

運転席のケリー、助手席に恵。

後部座席には、シートに寝かされた健二とそれを見守る綾香と貴美子。

「・・・飛鳥・・・」

恵が助手席でポツンとつぶやく。

飛鳥の最初の印象は、はつきりいつて最悪だった。

口の聞き方はしらない、やたら五月蠅い。言語が粗雑だ。

ガンシヨップでは調子に乗って、いざという時には役に立たない奴だと思った。

だがそんな行動も、あいつが本当に仲間を思いやる奴だったからだと今は思う。

ガソリンスタンド、警察署での行動は、仲間を守るという意思が無ければ出来なかっただろう。

『まったく最後までツイてないぜ！』

最後は皆を救って化け物に襲われ死んだ。

救世主のつもりか？最後まで冗談めいたこと言って死んで。

今は怒りさえ覚えるよ飛鳥。

もうあの冗談も二度と聞けないだろう。

「……そろそろ県境よ、通信が復旧してくれると嬉しいけど……ケリーが通信機器をいじり始めた。どうやら外部との通信をとるようだ。」

『……ザザッ……こちら……ザザッ……軍基地』

「……ビンゴー」

ケリーはそう言うと、通信機から聞こえる声と二、三会話しどうやら安心できる場所へと降下できるらしい、落ち着きを取り戻したような表情を浮かべる。

顔は喜んでいたが、その心には賀居の音が耳に焼き付いていた。

404

『最高の相棒』と呼ばれたその声。
今までの彼との長い付き合いのなかで、そんな台詞は聞いたことが無かった。

彼の『最高の相棒』は銃くらいな物だと思っていた。
ケリーは、どこか『最高の相棒』と呼ばれたことに
賀居との決別の意味を感じていたのかもしれない。

「だから今はその言葉を誇りに思え」

そう彼が言ったような感じがした。

「智弘君に……尾山さん……五郎さん……皆死んじゃったわね……」

後部座席に座って、暗く笑うような表情を浮かべる貴美子。

ワガママな私に付き従ったマネージャーさん。

いつも笑ってるけど、やるときはやれる智弘君。

ミステリアスな感じだけど、お酒が大好きな尾山さん。

いつも私達を守ってくれてた五郎さん。

皆もこの世には居ないのね。

アッチの世界で良い思いしてよね……。

遠くに浮かぶ眩しい朝日を見つめながら、遠い目をする貴美子。

へりはそのまま十分ほど飛行すると、とある基地に降り立つ。

「さあ、みんな降りて。ここは安全よ。話は少し休んでからしまし
よう」

「安全か……その言葉、信じられないが。信じるしかないか……」
助手席に座った恵が降りると、ケリーが後部座席を見て声をかける。

「綾香さん、降りるわよ？あれ？なにやってんの？」
貴美子が後部座席に座っていた綾香に話しかける。
なぜか綾香は震えている。

「さつきから健二に意識がないんです、どうしたら・・・」

「医務室へ連れてゆく？ここには、いい医療施設があるわよ
ケリーに言われて、綾香が健二の体を起こす。」

「・・・う・・・ウウ・・・」

健二は何かつめくよつに目を少しずつ開く。

「大丈夫なの？健二」

手を止めて、健二を陸に降ろそうとする綾香。

しかしその時、健二の肌を見るとやけに緑色に変色し、どこかしら腐臭がする。

「・・・ウウウ・・・ウウウウ・・・」

健二が口を開きながら、綾香に耳打ちをするように顔を近づける。

「ウウ・・・アア・・・アアアアアアアア！！！！」

私の悪夢は、まだ終わっていないかったのかも知れない。

今さらキャラ設定

主人公1 瀬敏 セジン 健二 ケンジ (21歳)

職業：プログラマー

プログラマーで生計を立てる若者。

めんどくさがり屋で、性格は平和主義。

プログラミングの腕はそこそこ。夢乃とは現在恋仲。

主人公2 鳴神 ナルミ 智弘 トモヒロ (21歳)

職業：国文学科学生

国文科に通う学生。瀬敏とは友人。河野貴美子の大ファン！
怖がりで潔癖症。毎日をレポートに追われている。
最近では古文学にも興味があるようだ。性格は温和。

主人公3 夢乃 ユメノ 綾香 アヤカ (20歳)

職業：ウエイトレス

高校時代、瀬敏と同じ学校に通っていた女性。
高校卒業後、ウエイトレスとして働く。
少々怒りっぽいところがある。キレると怖い。

主人公4 正義 セイギ 五郎 ゴロウ (19歳)

職業：新任警官

高校卒業後、警官になって都市部の交番に派遣される。
正義感は強いが、根っからのアウトローで
人付き合いはあまり得意ではないようだ。

主人公5 尾山 オヤマ 紫 ムラサキ (45歳)

職業：医者

父親から継いだ尾山総合療養所という病院を営んでる開業医。

父親は一流だったが、ハツタリ屋で医者としては二流。だが薬の知識だけは高い。彼が病院を継いでから悪い噂が立たないという。

主人公6 河野 コウノ 貴美子 キミコ (26歳)

職業：タレント

根っからの心霊マニアで、自身も心霊タレントとして売り出している女性。

オカルトな話題やホラー映画を熟知している。

ちなみに実家は漁師。昔は漁の手伝いもしてたらしい。

主人公7 寺丹 テラジ 飛鳥 アスカ (22歳)

職業：パチンコ屋勤務

パチンコ屋に勤務する男。お調子ものでおしゃべり好き。

たまに空気を読めなさすぎて、周りから煙たがられることも。パチンコ屋の前はガソリンスタンドで働いてたようだが・。

主人公8 美和 ミワ 恵 メグミ (25歳)

職業：サラリーマン管理職

一流企業のエリートキャリアウーマン。性格は厳格で強気。

協調性はそこそこあるが、基本的に毒舌で口ばっかの奴が嫌い。

部下に対する仕打ちがひどい事から、仕事では部下から【閣下】と呼ばれている。

登場クリーチャー

各シナリオに出てきた、ゾンビ、クリーチャー暫定設定

・シナリオ【異変】

【リバーズアンデッド】

居酒屋虚無僧の厨房に現れたKウイルスに侵された店員の慣れの果て。

異変に気づいた他の店員との戦闘で包丁で腹を刺され死んだように眠っていたが

健二達が厨房内に入ってきたときに再度ゾンビとして覚醒。

恐ろしい怪力と、軽い傷なら即座に回復できる再生能力を持っている。

最後は傷口に大量の消化剤をそのままぶち込まれて倒れる。

虚無僧の裏通路で倒れていた万田は、実は彼に襲われた傷が元で死んだという裏設定がありました。

・シナリオ【慟哭】

【急変する栗木】

ガンシヨップを営む栗木が、店先の異変に巻き込まれ

手に大きな傷を負って助けが来るのをじっと待っていたようだ。

傷を負った体でバリケードや、窓にベニヤ板を

ボルトで打ち込んだりする作業で疲労した結果

ウイルスの侵食速度が早まったのかもしれない。

徐々にウイルスに感染していたところに、尾山の治療で出血過多になり

そのまま意識を失うと共にゾンビとして覚醒してしまう。

・シナリオ【変化】

【オルタナティブ・リザード】

ガソリンスタンドで飼われていた二匹のトカゲがスタンドが閉鎖されると共に餌をやる人がいないため仮死状態であったが

Kウイルスに侵されると、体の組織が再び動き出し

生前の飢餓感だけが大きくフィードバックされて、人間を襲い始めた。

普段は二足歩行しているが獲物を見つけると獰猛な牙を光らせて四速歩行になり

その歩行速度と異常な跳躍力、獲物を捕らえるための鋭利な尻尾の進化など

Kウイルスの効果を著しく表していたと言える。

・シナリオ【異変と脱出】

【特異素体】

Kウイルスの臨床実験素体となった五郎の先輩の成れの果て。

筋肉組織の進化による腕や足の肥大化、恐ろしい怪力と尾山がシナリオ【慟哭】で放ったカーボレーン酸により銃弾をも通さない頑丈な皮膚組織に進化した。

駅前で戦闘をした警察官を自分の分身として操れる自分の感染血液を胸から伸びる鋭利な触手で対象者に注入、または吸収して自分の肉体の一部としてしまう能力がある。

最後は言語理解ができるほど進化するが、尾山が触手に直接対ウイ

ルス殲滅液を打ち込まれて進化した体が崩壊しはじめ、大きな粉塵を巻き上げて沈む。

・シナリオ【絶句／脱出】

【実験素体KV-1】

事件七日前に死亡した黒人マフィアの死体が覚醒し、進化した姿。組織が欲しかった死亡素体に適応したため、EHKVを投与されその後、下水へ逃げ出したKV-1は化け物と化し追ってきた追跡部隊をそのまま自分の操り人形として基地に戻す。手や足についた回転するドリルのような突起物を持ち再生能力に付け加え、見えなくなった目を補うため自分の声から超音波を出すという新しい進化を見せる。

・シナリオ【脱出】

【マリオネット・クレバー】

特異素体の触手から注入された感染液によって操り人形と化してしまった外人部隊の成れの果て。言葉を理解し、自分達の獲物を仲間のいる餌場まで誘い出すという恐ろしい知能を持つ。

最後は行動領域までも超え、四足で動く化け物へと進化した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5124d/>

バイオハザード・アウトブレイク『ファイルK』

2010年10月12日11時21分発行